

図 162 水間遺跡出土縄文土器 (1/2)

1・2とも文様の切合のため単位や施文方向は判然としない。高山寺式に比定される。

3・4は外面に扁平な隆帯を貼り付けるもので、同一個体と考えられる。3は口縁部片で、端面外面に隆帯を貼り付け、隆帯上から器面にかけて条線を施す。また隆帯下に直径5mm程の孔を穿っている。4は頸部片で、外面は平行する隆帯で区画を行い、区画内に波状の隆帯を貼り付けている。3と同様に隆帯上の条線が器面にも及んでいる。3・4とも内面の調整はナデ・コビオサエで、指頭圧痕が顕著に認められる。頸部で屈曲し内傾する器形を呈し、塩屋式に比定される。

5～7は内外に粗い条痕を施す土器である。5は外面に横位、内面に左上がりの条痕を施す。6は外面に横位の条痕を施した後左上がりの条痕を施し、内面は左上がりの条痕を施す。7は外面に左上がり、内面に横位の条痕を施す。早期末前期初頭に位置づけられる。

8・9は外面に縄文ないし条線を施すものであるが、表面は摩滅のため判然としない。内面はナデで、砂粒を多く含む。10・11は内外をナデで調整するもので、11の外面はナデによる凹凸が顕著である。8～11は中期～後期に属するものと考えられる。

12・13は外面に斜傾する波状の沈線を施すものである。沈線は山形状を呈しており、波状の頂部は鋭い角を持つ。器壁は薄く砂粒を多く含む。これらは同一個体と考えられる。小片のため帰属時期は定かでないが、早期末の天神山式の可能性も考えられる。(熊谷)

ii. 石器 (図163・164、表25・26)

試掘調査を含め、641点の石器がある。内訳は表25の通りで、L発掘区縄文時代遺物包含層から出土したものが40.4%を占める。石器石材は、ほぼすべてサヌ

表25 水間遺跡出土石器内訳表

	L発掘区		M発掘区	その他 の発掘区	合計
	縄文包含層	その他			
石鏃	7	9			16
鏃穂		2	1		3
削器	7 (2)			3	10 (2)
楔形石鏃	1	2			3
石核		11 (1)		1	12 (1)
加工痕有剥片	4	17		2	23
使用痕有剥片	1	4			5
剥片	82	234		7	323
碎片	163	82			245
鏃石	1				1
合計	259	368 (3)	1	13	641 (3)

※括弧内の数値はチャート製石器の数を示す。

カイトで、これに若干のチャートと燧石に用いられた珪岩が加わる。以下、主要なものについて述べる。

石鏃 (1～12) 1は平基式、2～11は凹基式で、二等辺三角形形状を呈するものが多い。12は側縁上部に突出部をもつ、いわゆる「五角形鏃」である。

1・2は縦長細身のもの。2は基部に浅い袢りが入るもので、側縁がやや外彎し、脚が内側にすばまる。3～5は基部の袢りが深く入るもので、脚の外側が膨らみ、端部が尖る3と、脚の内側が膨らむ4・5がある。3は早期に比較的多く見られる形態である。9・10は全長1.5cm内外におさまる小形石鏃。11は直線的な基部に深く袢りを入れるもので、前期に多く見られる。なお7・9・10はL発掘区縄文時代遺物包含層の出土遺物で、早期末～前期初頭の可能性がある。

楔形石器 (13・14) 上下端にツブレがあるもので、13は左側面、14は右側面に剪断面を有する。14は背面に素材剥片の主要剥離面、左側面に礫面を残し、縦長の寸詰まり剥片が素材と考えられる。

搔器 (15) 腹面側からやや浅い角度の2次加工を施し、弧状の刃部を作り出すもの。幅広剥片を素材とするが、いわゆる拇指形搔器に近い形態を呈する。

削器 (16～21) 16・17はチャート製で、左側縁にノッチ状の袢りが入るもの。幅広の寸詰まり剥片を素材としていると考えられ、腹面側から2次加工を加える。16の上面は折れ面となっており、また17の右側縁にはツブレがある。

18・19は幅広剥片ないし横長剥片を素材とし、主として腹面側から刃部加工を施すもの。2次加工は粗雑で、外彎する刃部を有する。20は縦長の寸詰まり剥片を素材とし、左側縁に腹面側から刃部加工を施す。

21は幅広剥片を素材とし、背腹両面から刃部加工を施すもの。刃部右端が石鏃のつまみ部のような形態を呈するが、側縁に2次加工はなく、素材の形態に従って行われた2次加工の所産と考えられる。

敲石 (22) 珪岩製自然礫の下端部に敲打痕を持つもの。使用頻度はさほど高くないが、礫の稜線部分を敲打しており、石器製作に用いたものかもしれない。

石核 (23～24) 23は打面と作業面を転移させながら剥離を行うもの。左右側面にツブレが見られることから、右側面の剥離を行う際、両極打法を行った可能性がある。24は剥片素材の石核の一端から幅広剥片を

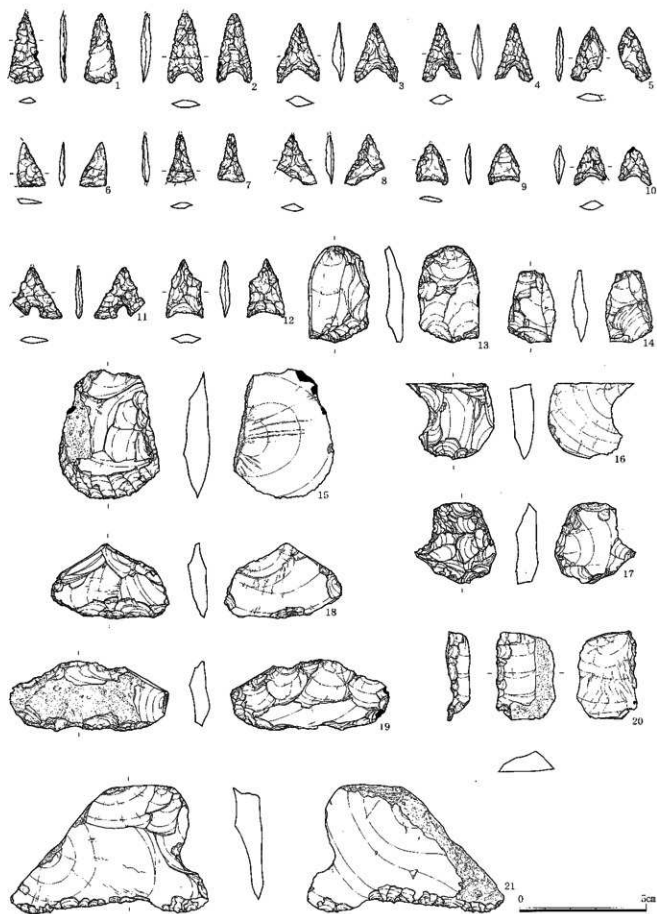


図 163 水間遺跡出土石器① (2/3)

図 26 水間遺跡出土石器観察表

	X(m)	Y(m)	H(m)	遺積・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	
1				中世包倉層 灰褐色土	石鏃	(2.75)	(1.20)	0.22	(0.71)	サヌカイト	両部欠損	
2	-147.514826	-4.627543	457.832	黄灰色粘質シルト	石鏃	(2.16)	1.37	0.32	(1.15)	サヌカイト	先端部欠損	
3	-147.517461	-4.625809	457.593	黄灰色砂質シルト	石鏃	2.33	1.63	0.45	0.98	サヌカイト		
4	-147.514.158	-4.625978	457.751	黄褐色シルト	石鏃	2.24	1.51	0.40	0.70	サヌカイト		
5				SD01(新): 暗灰色土	石鏃	(2.15)	(1.24)	0.26	(0.65)	サヌカイト	基部欠損	
6				中世包倉層 暗褐色土	石鏃	1.69	1.08	0.20	0.31	サヌカイト	破片	
7	-147.522794	-4.623028	457.538	黄灰色シルト	石鏃	(1.86)	(1.20)	0.28	(0.37)	サヌカイト	先端部・基部欠損	
8				SB02: 暗黄灰色土	石鏃	(2.00)	(1.56)	0.30	(0.52)	サヌカイト	先端部・基部欠損	
9	-147.523817	-4.622713	457.593	黄灰色シルト	石鏃	(1.56)	1.22	0.18	(0.33)	サヌカイト	先端部欠損	
10	-147.513003	-4.625280	457.751	黄褐色シルト	石鏃	(1.47)	(1.28)	0.38	(0.47)	サヌカイト	先端部・基部欠損	
11				中世包倉層 暗灰色土	石鏃	(1.99)	(1.93)	0.25	(0.69)	サヌカイト	先端部・基部欠損	
12				中世包倉層 灰色土	石鏃	2.33	1.42	0.33	0.84	サヌカイト		
13				SB02上層 暗黄灰色シルト	硬形石器	3.80	2.26	0.66	8.71	サヌカイト	両面磨面	
14				SB02埋土 暗黄灰色シルト	硬形石器	2.80	1.88	0.54	4.06	サヌカイト	両面磨面	
15				SD01(新): 暗灰色土	短器	4.96	3.95	1.00	22.24	サヌカイト		
16				中世墳: 灰色土	短器	2.97	3.37	0.88	11.06	チャート	褐色チャート	
17				SD01(古): 黄褐色砂質土	短器	3.16	3.19	0.68	9.56	チャート	赤色チャート	
18				中世包倉層 暗褐色土	短器	2.95	4.60	0.65	9.57	サヌカイト		
19	-147.518767	-4.627821	457.619	SB02	短器	2.56	6.21	0.65	16.86	サヌカイト		
20				第76奥部區中央	中世包倉層 灰色土	短器	3.52	2.31	0.92	7.89	サヌカイト	
21				L奥部區X02-Y43	石鏃	4.49	7.77	1.06	38.16	サヌカイト		
22	-147.511815	-4.628618	457.591	石鏃底: 灰色砂	短器	(3.33)	(3.50)	4.99	(104.79)	珪岩	上半部欠損	
23				L奥部區X38-Y45	SD01(古): 黄褐色砂質土	石鏃	3.02	3.38	1.68	20.05	サヌカイト	
24				L奥部區X36-Y43	中世土境 黄褐色砂質土	石鏃	1.20	4.46	4.47	10.39	サヌカイト	
25				L奥部區X36-Y41	SD01(新): 暗灰色土	加工痕有剥片	1.40	3.23	0.42	2.35	チャート	褐色チャート

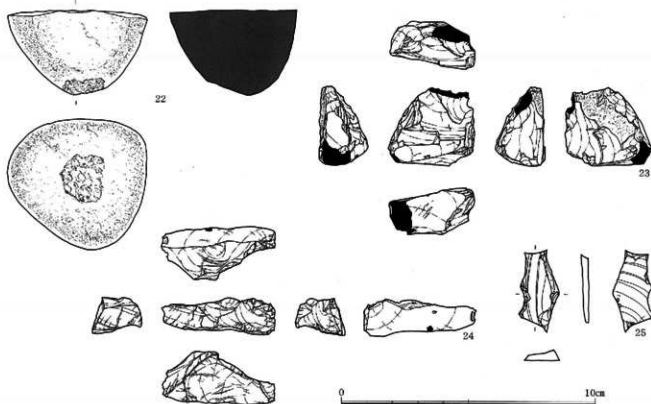


図 164 水間遺跡出土石器② (2/3)

剥離している。

加工痕有剥片 (25) 緑色チャートの縦長剥片に一部ノッチ状の2次加工を施すもの。挟りには微細な剥離痕があり、削器状に使用した可能性がある。(大窪)

(2) 古代の遺物

L発掘区S B01・02出土遺物の概要を報告する。

S B01出土遺物 (図165・1～9) 1・2は土師器杯Cである。1の内面には粗いヘラミガキの上に4周する暗文があり、外面は底部ヘラケズリの後に粗いヘラミガキを行なう。口縁端部内面にはふい沈線がめぐる。口径15.6cm、器高6.3cm。2の内面には方向を違える2段の放射状暗文と2重の螺旋状暗文があり、外面は底部にヘラケズリを行なう。口径16.8cm、器高5.5cm。

3・4・5は須恵器杯Hで、4・5は重なって出土した。5のみが底部外面の一部に回転ケズリを行なう

が、3点ともに底面は無調整のままである。4の底部に置台の粘土塊が溶着する。口径・器高は3が9.55cm・3.1cm、4が9.0cm・3.2cm、5が9.6cm・3.3cm。6は須恵器杯G蓋で、口径9.4cm・器高2.5cm。

7・8は須恵器杯Gで、7は6と組み合せて出土した。8は、口縁部を強くヨコナデして短く外反させ、回転ケズリが及ばない底面に板目の圧痕が残る。口径・器高は7が8.4cm・3.9cm、8が11.1cm・3.8cm。

9は須恵器広口壺で、底部外面の一部を手持ちヘラケズリするものの、無調整の底面に蓋状圧痕が残る。口径10.7cm、器高17.75cm。

これらは7世紀後半の一括資料と考えられる。

S B02出土遺物 土器と鉄器がある。

土器 (図165・10～23) 14～16・22・23が床面出土資料で、その他は埋土から出土した。10～13は土師器杯で、口縁端部に内傾する面がある。内面と口縁

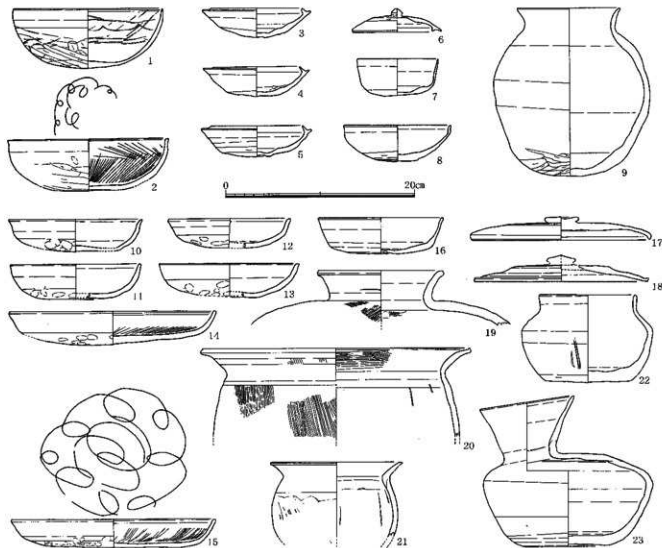


図165 S B 01・02出土土器 (1/4)

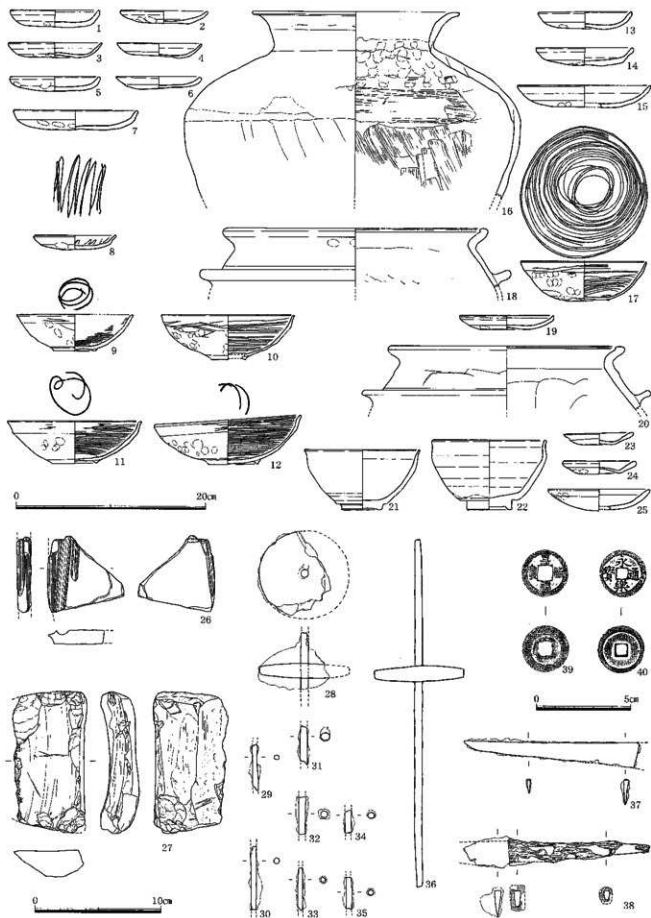


圖 166 SK 02, SD 01・04・05 出土土器 (1/4)

部外面をナデ調整し、底部外面は無調整で指頭圧痕が残る。口径・器高は10が13.9cm・3.45cm、11が13.6cm・3.7cm、12が12.7cm・3.1cm、13が14.6cm・3.6cm。14・15は土師器皿Aで内面に放射状暗文があり、さらに15のみ2重の螺旋状暗文がみられる。底部外面は無調整で、指頭圧痕が残る。口径・器高は14が21.6cm・3.55cm、15が21.2cm・3.0cm。

16は須恵器杯Aで、底面だけ無調整のままである。口径13.0cm、器高3.8cm。17・18は須恵器杯B蓋で、18は口縁部の約1/8が残存する。17は口径18.65cm・器高2.4cm、18は復元口径18.2cmである。19は須恵器横瓶の口縁部片で、口径13.1cm。

20・21は土師器甕Aで、20は長胴、21は小型である。いずれも底部を欠失する。体部の外面調整は20がタテハケ、21がケズリとナデ、内面調整は20・21ともに板ナデである。口径は20が28.0cm、21が13.0cm。22は須恵器短頸壺で、底部外面の一部に手持ちヘラケズリを行なうが、底面は無調整のままである。体部外面に引っかいたような2条の線刻がある。口径10.05cm、器高9.3cm。23は須恵器平瓶で、底部外面に回転ケズリを行なう。肩部まで口ロ成形した後、円盤を上から充填して体部をつくり、片側へよせて穿孔した箇所を口縁部を付け加えて製作している。口径9.9cm、器高16.0cm。

これらの上器からみて、S B02は奈良時代前半に廃棄されたと考えられる。

鉄器 (図166-28～38) 28～35は輪を通した一つの紡錘車。錆化が激しく取り上げ時に細片化したため、出土時の記録を基に復元図化したのが36である。紡輪(28)は直径4.7cm・厚さ0.3～0.8cm、軸(29～35)は全長18.1cm・直径0.3～0.4cm。

37・38は別個体の刀子と思われる。37は刃部片で、残存長9.25cm・最大刃幅1.4cm。38は刃部の大半を欠失する。茎には柄の木質が付着して残っている。残存長9.75cm・茎全長7.4cm・茎幅0.35～0.85cm・最大刃幅1.4cm。

紡錘車は床面北東部、刀子は37が東壁中央方マド埋土、38が西壁中央の周壁溝から出土した。

(3) 中世遺構出土遺物

L発掘区SK02・SD01・04、およびM発掘区SD05・08・P1出土遺物の概要を報告する。

SD01出土土器 (図166-1～12) 1・3・9・11は上層、2・4～8・10・12は下層から出土した土器である。1～7は土師器皿で、小型品(1～6)と大型品(7)がある。口径は1が9.3cm、2が9.1cm、3が9.8cm、4が8.7cm、5が9.2cm、6が8.7cm、7が12.95cm。8は瓦器皿で、底部内面に平行線状の暗文がある。口縁端部に煤が付着する。口径8.4cm。9～12は瓦器碗で、10を除いて外面ヘラミガキの簡略化傾向が顕著にみられる。口径・器高は9が12.4cm・3.9cm、10が13.9cm・4.7cm、11が14.0cm・4.5cm、12が15.35cm・4.9cm。10～12は概ね近江編年I-6期に相当し13世紀前半の資料とみられる。ただし、上層出土の9は法量的に新相を示しており、SD01が埋没したのは13世紀中葉まで下がるのだろう。

SK02・SD02出土土器 (図166-13～18) 13～17はSK02出土土器、18はSK02と接続するSD02出土土器である。13～15は土師器皿で小型品(13・14)と大型品(15)がある。口径は13が9.7cm、14が10.1cm、15が13.9cm。16は常滑産の甕で、口縁部1/4が残存し底部を欠失する。口縁部から肩部にかけて自然軸がかかる。口径21.7cm。17は瓦器碗で、平底に近い形態の底部外面に著しく退化した高台が貼り付く。内面のミガキは見込み部から連続して行なわれる。内外面ともにミガキの簡略化が著しく、その条線が針金で引っかいたように細いのが特徴的である。大和型とは形態やつくりが異なる。口径13.2cm、器高4.2cm。18は大和B1型の土師器羽釜である。体部内面にケズリの痕跡がみられる。口径27.0cm。

SD04出土土器 (図166-19・20) 19は土師器皿で、口縁端部が直立する。口径9.7cm。20は大和B1型の土師器羽釜である。口径24.2cm。

SD05・08出土土器 (図166-22～25) 22・23・25はSD05出土土器、24はSD08出土土器である。23～24は土師器皿で、小型品(23・24)と大型品(25)がある。口径は23が7.2cm、24が7.5cm、25が10.6cm。22は瀬戸美濃産の鉄軸天目碗である。口径11.9cm、器高7.3cm。これらは16世紀後半頃の遺物とみられる。

P1出土土器 (図166-21) 21は瀬戸美濃産の鉄軸天目碗である。口径12.0cm、器高6.35cm。(鐘方)

(4) その他の遺物

銭貨 (図166-39-40) 39は北宋銭の嘉祐通寶(1056

年初鑄)で、外縁外径2.517cm、内郭内径0.734cm、外縁厚0.085cm、重量2.077g。第74発掘区中世遺物包含層から出土した。40は明銭の永楽通寶で、外縁外径2.524cm、内郭内径0.552cm、外縁厚0.136cm、重量2.769g。M発掘区S D 05から出土した。

砥石 (図166-26~27) 26は砂岩ホルンフェルス製の有溝砥石で、粗砥と考えられる。表面と左側に砥面が残る。残存長5.94cm、残存幅5.85cm、厚さ1.08cm、重量48.86g。27は砂岩製の粗砥で、表面と右側に砥面が残る。裏面には使用に伴うと考えられる摩滅が残る。長さ11.18cm、残存幅5.80cm、最大厚2.46cm、重量207.60g。26・27ともにL発掘区の中世遺物包含層から出土した。

(大窪)

石造物 (図167-1~7) 1~6は調査地西端の石造物集積箇所に一括してあった石造物、7はN発掘区南側の石地藏安置箇所にあった石地藏である。すべて花崗岩製で、表面が著しく風化している。

1・2は石龕仏の屋根石(笠石)である。平面長方形で寄棟屋根を模し、下面が平らにつくられている。1は全長36.7cm・幅21.5cm・高さ8.0cm、2は全長31.6cm・幅21.9cm・高さ10.0cm。一部が欠損するとともに、表面の風化によって稜線も明瞭でない。1・2

の下面中央には一辺5cm前後・深さ1cm前後の方形納穴がある。この納穴で石龕仏に固定したと思われる。

3は五輪塔の方形台座で、大きさは一辺27.5cm×28.4cm・高さ9.3cmである。上面に地輪を置くための平坦面(19.5cm×20.0cm)をつくり、その4周に複弁の連弁を2弁ずつ彫刻する。

4は五輪塔の空風輪で、直径12.6cm・高さ20.4cmである。底に火輪へ挿入するための納(直径4.4cm・長さ1.4cm)をつくり出す。

5は石造物の方形台座で、上面中央に直径8cm・深さ1.5cmの円形納穴がある。残存長50.0cm・高さ12.0cm。後世の転用時に打ち割られているものの、納穴を中心として復元すると本来の大きさは49cm×52cm前後のやや長方形になると推定できる。

6・7は石龕仏(箱仏)である。6には阿弥陀・地藏二尊像、7には地藏一尊像が彫刻されている。なお、7は片端が欠損するため、本来二尊であった可能性もある。現状では、上面に屋根石を載せるための納が認められない。大きさは、6が高さ43.0cm・幅36.3cm・厚さ12.0cm、7が高さ33.9cm・幅21.6cm以上・厚さ10.0cmである。表面の風化により像の詳細はすでに失われている。背面は未加工のままである。(鐘方)

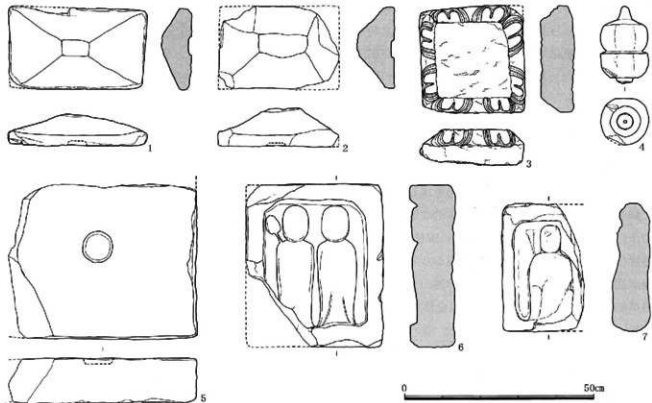


図 167 石造物実測図 (1/10)

第4節 遺物散布地の試掘調査

ここでは、試掘調査を実施した遺物散布地の中で、今回遺跡と認定するには至らなかった水間町・柚ノ川町内の2箇所の調査概要を報告する。

I. 水間町遺物散布地の調査（試掘04-15）

1. 試掘調査の方法

平成11年6月21日付教文第407号の遺跡有無確認踏査願いに基づく遺跡踏査によって、幾つかの遺物散布地の存在が水間町内で確認された。そのうちの1箇所にあたり、平成16年度に工事が予定された範囲について、遺跡有無確認のために試掘調査を行なった。調査次数は試掘04-15である。

調査地は、東西方向の細長い谷筋内に造成された水田地に相当する。東側に開けた箇所においてのみ遺跡の存在が想定されたため、調査対象地を工事区域内の東半分に限定した。また、発掘区の設定は原則として切上工事の範囲内で行なった。

対象地内の7箇所に第1～7発掘区を設け、重機で耕七を除去した後に、表土掘削を行なって試掘調査を実施した。各発掘区の平面図は1/100、七層図は1/20で作成し、平面図に旧国土座標を記入して調査地での位置関係を記録した。なお、第6発掘区で奈良時代の遺物包含層を確認したため、それを拡張しA発掘区として調査を行なった。各発掘区の位置は図149に示した通りである。

2. 調査の概要

以下に各発掘区の概要を述べる。

第1発掘区 (22m×3m) 現地地表1mほどまで造成土が堆積していたため、深さを考慮して2段掘りで調査を行なった。発掘区内の基本的な層序は、耕土の下に厚さ約0.8mの造成土があり、灰色粘質シルト、暗灰色腐植質シルト、暗褐色腐植質シルトと自然堆積層が続いて、青灰色砂礫・シルトの地山（谷底中央で標高436.8m前後）となる。発掘区全体が谷底の中にあり、中央が0.3～0.4mほど高く、南・北が少し低くなって浅い流路を形成していた。発掘区北端は約20°の勾配で高くなり、北側丘陵へと続いていく。流路の上面及び谷底全体が腐植質シルト層に覆われており、この層から平安時代頃の土器が出土した。

第2発掘区 (28m×3m) 現地地表0.9mほどまで造成土が堆積していたため、深さを考慮して2段掘りで調査を行なった。発掘区内の基本的な層序は、耕土の下に厚さ約0.7mの造成土があり、青灰色粘土、青灰色砂礫土、灰色粘質シルト、暗灰色腐植質シルトと自然堆積層が続いて、青灰色砂礫・シルトの地山（谷底中央で標高438.2m前後）となる。

発掘区全体が谷底の中にあり、中央が0.3mほど高く、南・北が少し低くなって浅い流路を形成していた。発掘区北端は約10°の勾配で高くなり、北側丘陵へと続いていく。流路の上面及び谷底全体が腐植質シルト層に覆われており、この層から平安時代頃の土器が出土した。また、北側流路内埋土から10世紀頃の黒色土器、南側流路から奈良時代の土器が若干出土している。

第3発掘区 (15m×3m) 基本的な層序は、耕土の下に厚さ0.15mの造成土、灰色砂質シルト、灰褐色シルト、暗灰色腐植質シルトが堆積して青灰色砂礫の地山となる。谷底は北から南へと緩く下っており、その標高は、発掘区の北端で441.2m、南端で440.8mである。腐植質シルトは南半のみに堆積しており、12～13世紀頃の土器片少量と石器が出土した。

第4発掘区 (29m×4.5m) 基本的な層序は、耕土の下に厚さ0.3mの造成土、淡灰色粘土、灰色シルト、暗灰色粘土と堆積して、青灰色砂礫の地山となる。地山の標高は443.65m～443.25mで、北から南へと緩く下っている。発掘区の北端には幅8m以上、深さ1.15mの大きな流路があり、底に暗灰色腐植質シルトが堆積する。遺物は、地山直上の暗灰色粘土から石器と13世紀頃の土器が若干出土したにとどまるが、中国製白磁片が1点出土している。

第5発掘区 (34m×3m) 不自然な地割を示す東西3枚の水田にまたがって発掘区を設定した。基本的な層序は、耕土の下に灰色土、淡灰色粘質土、灰色シルト、暗灰色シルトが堆積して青灰色砂礫の地山となる。地山は西から東へと下っており、その標高は発掘区西端で446.4m、北側で444.6mである。遺物は、暗灰色シルトから14世紀頃の土器片が少量出土したのみである。谷底がこの付近で少し高くなって東へ張り出しており、不自然な水田地割はその旧地形をとどめたものと考えられる。

第6発掘区 (17m×3m) 発掘区北半で地山が高まる微高地を検出し、北側の尾根裾が本来南へ張り出していたことが判明した。南半は地山が谷底へと下がっており、その基本的な層序は、耕土、造成上の下に灰色砂礫、暗灰色礫混シルト・粘土となっている。

暗灰色礫混シルト・粘土は丘陵裾の斜面に形成された遺物包含層で、奈良時代の遺物が多く出土した。また、その上に堆積する灰色砂礫は丘陵端部を削平した際の排土と思われ、この層にも奈良～平安時代の遺物が含まれていた。そこで、もう少し発掘面積を周囲に広げて調査する必要性を認め、A発掘区として改めて発掘調査を実施することにした。その内容については後述する。

第7発掘区 (13m×3m) 基本的な層序は、耕土の下に淡灰色粘質土、灰色シルト、暗灰色シルト、暗灰色シルトが堆積して青灰色砂礫の地山となる。地

山の一部に花崗岩の露頭がみられる。谷底は概ね平坦であり、その標高は451.3～451.5mである。遺物は、発掘区北側において暗灰褐色シルトから奈良時代の土器片が若干出土したにとどまる。

A発掘区 (図168) 第6発掘区を拡張した発掘区で、調査面積は約300m²である。北側の尾根から南へ短く張り出す三角形の小さな微高地(地山)を検出した。その上面(標高451.0m)は水田造成時の削平によって平坦となっており、遺構は認められなかった。わずかに南斜面で炭・焼土が混在する上坑の一部や小上坑2基を検出できたにすぎない。これらの遺構からはほとんど出土遺物が無いものの、土器の小片から中世の遺構と推測する。ただし、試掘調査結果と同じように、微高地周囲の裾に形成された遺物包含層(灰色砂礫、暗灰色礫混シルト・粘土)から奈良時代の遺物が多く出土した点は注意しておかなければならない。

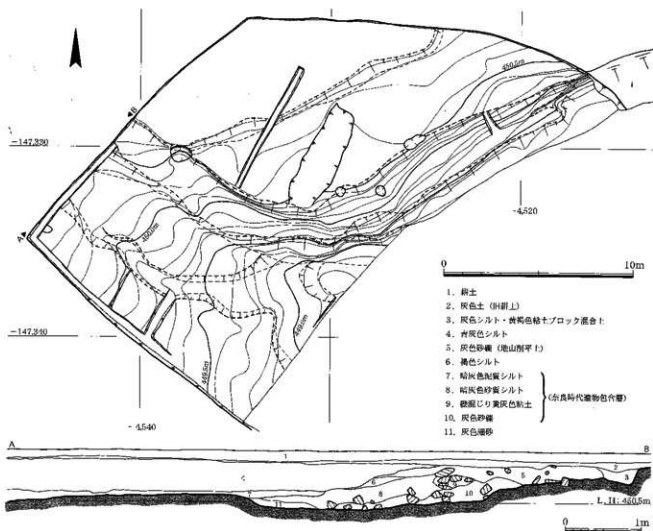


図168 A発掘区平面図 (1/200)・堆積上層図 (1/50)

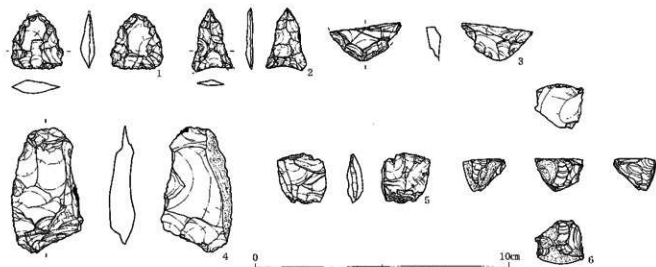


図169 水間町遺物散布地出土石器 (2/3)

表27 水間町遺物散布地出土石器観察表

出土地区	層位・遺構	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考	
1	A発掘区X29-Y41	中世谷埋土・暗灰色シルト	石鏃	(2.18)	2.04	0.53	(2.04)	中央カイト	先端部欠損
2	第74発掘区東半部北	砂土表層	石鏃	2.41	(1.54)	0.25	(0.74)	サスカイト	踵部欠損
3	A発掘区X30-Y29	中世包含層・灰色砂質土	尖頭器?	(1.47)	(2.78)	(0.55)	(1.78)	サスカイト	基部のみ
4	第76発掘区中南部	中世谷埋土・暗灰色砂質シルト	楔形石鏃	5.00	2.85	0.86	18.05	サスカイト	
5	A発掘区X33-Y28	遺構面直上・灰色粘土	楔形石鏃	1.89	1.86	0.49	2.93	サスカイト	
6	A発掘区X38-Y30	中世谷埋土・暗灰色砂質土	石鏃	1.28	1.89	1.67	4.66	チャート	

3. 出土遺物

各発掘区から出土した石器と第6発掘区・A発掘区で確認した奈良時代の遺物包含層出土土器について概要を述べる。

(1) 石器 (図169-1~6・表27)

尖頭器1(1)点、石鏃3(1)点、楔形石器2(1)点、石核1点、使用痕有剥片1点、剥片26(11)点、合計34点の石器が出土した。なお、括弧内の数値はA発掘区の出土数を示している。いずれも奈良時代以降の遺物包含層や谷埋土から出土した。石材は99%がサスカイトだが、1点のみチャート製石核がある。

以下、主要なものについて述べる。

石鏃 (1・2) 1は小型の寸詰まり剥片を素材とする平基鏃。周囲に粗雑な2次加工を施すもので未製品の可能性がある。他の石器に比べ風化が甘く、相対的に時期が下るものかもしれない。2は側縁の上半部に屈曲を持つもので、いわゆる「五角形鏃」である。

尖頭器 (3) 折損により器種不明だが、ここでは尖頭器未製品の可能性があるものとして取り上げた。背腹両面から2次加工が施されているが、いずれも粗雑な短い剥離で、押圧剥離によるものではない。素材剥片には比較的薄い剥片を用いていると考えられる。

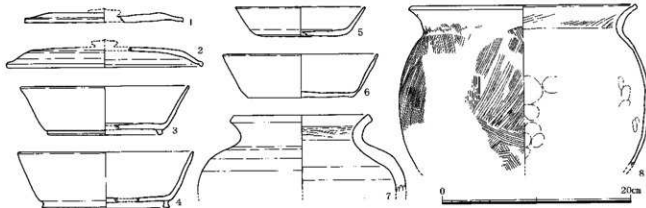


図170 第6発掘区・A発掘区奈良時代遺物包含層出土土器 (1/4)

なお、石器は受熱しており、サーマルフラクチャーが見られる。

楔形石器（4・5）4は上下辺が平行しない不定形を呈するもので、上下端にツブレがある。腹面側には素材剥片のものと思われるネガティブ面があり、また右側面に折れ面、左側面に礫面を有する。5は、四辺形を呈するもので、腹面右側に素材剥片の主要剥離面が残る。幅広の寸詰まり剥片を素材としてと考えられる。上下辺にツブレを有し、右側面に剪断面をもつ。

石核（6）当調査地唯一のチャート製石器で、直径2cm程度の黒色チャートの小礫を用いた石核である。これの分割面を打面として長さ1.5cm程度の縦長剥片や幅広剥片を剥離している。（大塚）

（2）奈良時代遺物包含層出土土器（図170）

器種には、上師器杯A・婁A・B・C、須恵器杯A・B・杯B蓋・壺、製土器がある。量的には上師器婁A・Bと須恵器杯A・B・杯B蓋が多く、上師器杯A・須恵器壺は少量である。ほとんどが小片化しており、その一部を図170に示した。

1・2は須恵器杯B蓋で、つまみを欠失する。復元口径は、1が16.4cm、2が20.3cm。3・4は須恵器杯Bである。復元口径は3が17.7cm、4が18.2cm。5・6は須恵器杯Aである。復元口径は5が13.5cm、6が16.3cm。7は須恵器短頸壺で、体部以下を欠失する。復元口径は13.9cm。8は上師器婁Aで、底部を欠失する。口径は23.5～24.0cm。

4. まとめ

A発掘区において、北側の尾根から南へ短く張り出す小さな微高地を検出し、その周囲に形成された包含層から奈良時代の遺物が多く出土した。調査地全体からみても遺物の出上が局地的であり、本来この微高地上に何らかの遺跡が存在した可能性は高いと思われる。ただし、それに関する遺構は水田造成時の削平によって何も残っていなかった。日常的に生活するには不適切な環境であり、水間町周辺に奈良時代の柚が存在していたことから考えて、あるいは柚に関連する作業場のような施設がそこに設けられていたのかもしれない。

その他の地点は、試掘調査成果からみて谷底低地に相当する。そこでは谷底内を流れた流路やその埋土内

に少量の遺物が包含されている程度であり、遺跡が形成されていたような痕跡は認められなかった。

以上のように、調査地内のほとんどは遺跡に該当せず、局地的に存在したであろう遺跡も遺存していなかった。（鐘方）

II. 柚ノ川町遺物散布地の調査（試掘05-08）

1. 試掘調査の方法

調査地は、平成13年度の遺跡有無確認踏査で確認した遺物散布地内に相当する。平成13年度に発掘調査を実施した柚ノ川イモタ遺跡から西へ約300mの位置にあり、布目川へ連なる同じ谷筋内にある。地形的には東西方向の谷部東端付近に当たり、南から張り出す2つの尾根の先端部分とそれに挟まれた南北に細長い谷筋に水田が造成されている。

切土工事が及ぶ地点を中心に7箇所の発掘区を設定し、重機で耕土を除去した後、表土削削を行なって試掘調査を実施した。調査次数は試掘05-08である。各発掘区の平面図は1/100、土層図は1/20で作成し、平面図に旧国土地標を記入して調査地での位置関係を記録した。

第1発掘区で石器や縄文土器が出土する包含層、第4発掘区で炭化材が堆積する黒色炭層を確認したので、第1発掘区の東側にA発掘区を設けて縄文時代遺物包含層を調査すると共に、第4発掘区の一部を拡張して黒色炭層の詳細を追及した。

各発掘区の位置は図171に示した通りである。

2. 調査の概要（図171）

以下に各発掘区の概要を述べる。

第1発掘区（47m）谷部東端に近い位置に設定した南北方向の発掘区である。南北2枚の水田にまたがり、南側水田の方が一段高い。発掘区内の基本的層序は、耕土の下に灰色土、青灰色シルト混灰色シルト、黄灰色シルト、青灰色シルト、淡黄褐色シルト・砂が堆積し、淡灰色砂礫の地山となる。黄灰色シルトの上面（標高396.3m）で遺構検出を行ない、南端で東西方向の落ち込みを確認した。この落ち込みは深さ0.3mで南へ向かって深くなる。北半部では水田造成によって黄灰色シルト以下の層が削られており、中近世頃の土坑1基が認められた。また、その北側で谷底流路の南層を検出した。

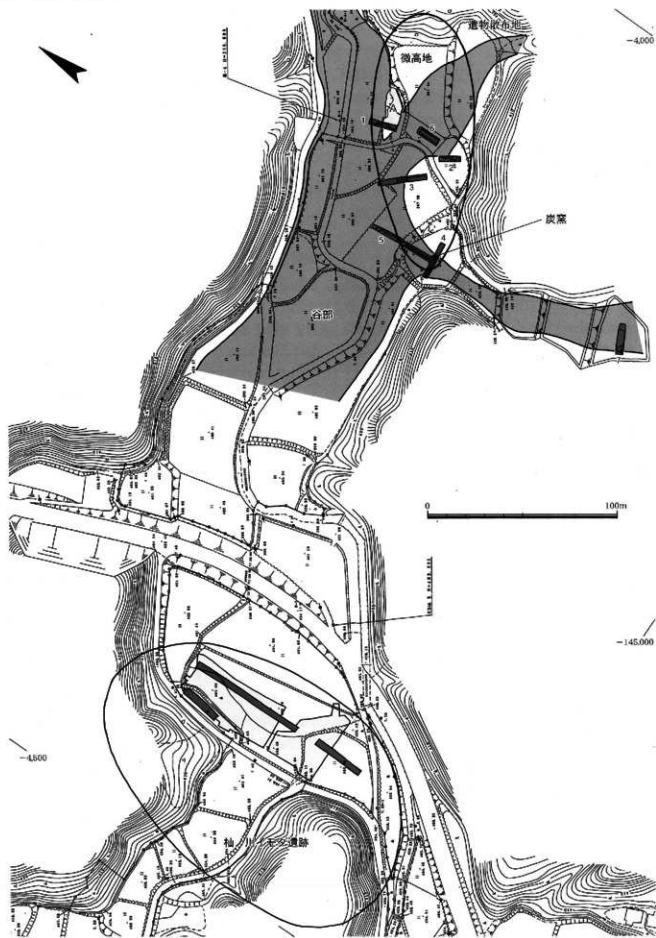


图 171 榎ノ川町遺物散布地試掘調査発掘区位置図 (1/2,000)

さらに、黄灰色シルト中に遺物の包含が認められた。そこで、黄灰色シルト以下の層を一部試掘したところ、縄文土器片と石器剥片が出土し、それらの層が縄文時代遺物包含層であることが判明した。縄文時代遺物包含層の厚さは約0.3mで、その下の地山（標高396.0m前後）はほぼ平坦となっている。

第2発掘区（35m） 東側の丘陵裾部に設定した発掘区である。発掘区内の基本的層序は、耕土の下が直ちに黄褐色小礫混シルトの地山となる。地山面の標高は398.8m前後で、水田造成に伴う削平によって全体的にほぼ平坦となっている。南半部に丘陵裾に沿った方向で深さ0.3mの溝状に窪みがあり、褐色腐植質シルトが堆積する。窪みの一部には、根株の痕跡も残っていた。また、北半部東側では北に向かって下がる深さ0.3mの落ちを検出した。

第3発掘区（78m） 第2発掘区の北西に設定した発掘区である。発掘区内の基本的層序は、耕土の下に灰褐色土、黄色砂礫混シルト、黄灰色礫混シルトが堆積し、青灰色砂礫の地山となる。黄色砂礫混シルトの上面（標高397.1m前後）で遺構検出を試みたが、暗渠以外は何も認められなかった。また、黄色砂礫混シルトが第1発掘区で確認した縄文時代遺物包含層と質的に類似しており、層位的に両者が対応する可能性も考慮されたため、一部を試掘した。その結果、黄色砂礫混シルト及び黄灰色礫混シルトから石器が出土したが、その量は非常にわずかである。

発掘区北半部は谷部となり、黄色砂礫混シルト以下の層は途切れて褐色腐植土、明青灰色シルト、淡青灰色細砂、淡灰色シルト・砂が堆積する。褐色腐植土には14～15世紀頃の遺物が少量含まれていた。

第4発掘区（55m） 2つの尾根に挟まれた南北に細長い谷筋が北に開く地点を横断するように設定した発掘区である。尾根裾部を削平した上砂（厚さ0.4～0.7m）で谷筋を埋め立てて水田が造成されている。

理め立て以前の谷筋の基本的層序は、上から灰褐色土、灰色砂・褐色腐植土の互層、黄灰色粘土・灰色粘土・青灰色砂の互層、灰色シルト、灰褐色土・青灰色シルト・砂の互層、淡褐色シルトと堆積し、黄灰色砂礫の地山となる。流路堆積であり、最下層の淡褐色シルトから布留式土器甕の破片が少量出土した。また、少なくとも灰色シルトより上層には中世土器片が少量混在

するようである。最上層の灰褐色土からは石匙1点が出土した。谷の深さは1.3m、谷底の標高は397.9m前後である。西側の尾根裾部に沿って、幅約2m、深さ約0.6mの溝があり、青灰色シルト・淡灰色細砂・淡黄灰色粗砂の互層で埋没する。出土遺物がなく時期はよくわからないが、谷理土上層を切り込んでいるので中世以降と考えられる。

一方、谷東側の斜面には厚さ0.2～0.3mの黒色炭層が堆積する。地山をL形に切り込み、炭化材を積み重ねたようにもみえ、壁面は焼けて赤褐色化している。そこで、この遺構の性格を明らかにするために、周辺を拡張してその全容を検出することにした。

その結果、全長3.97m以上、幅0.95m以上の炭窯（I72）であることが判明した。谷底近くの低い場所に構築されているため、後世の水流で西側が大きく削られており、本来の規模は不明である。焼成部と煙出しの一部が残っているのみであり、残存した燃焼部の長さは3.62m、煙出しの長さは0.35mである。

おおよその構造は主軸を等高線と並行させ、燃焼部を谷開口部に向けるものであったと思われる。炭は谷底側へかき出したのだろう。

焼成部の床面には主軸に対して直交方向に炭化材15本が並べ敷かれており、さらにその上で炭化材が束壁から斜めに並んで被さるようにして出土した。床面の炭化材は、丸太を半裁し凸面を上にして並べられており、おそらく置台であろう。この上から出土した炭化材は丸太を4分割した部材であり、取り残された製品（木炭）の可能性もある。煙出し周辺にのみ焼土が多く堆積し、拳大の焼けた礫13点もその中に認められた。焼成部の床面は標高397.65mでほぼ平坦となり、煙出しの床面はそこから0.07m高くなって緩やかに上がる。

第5発掘区（99m） 第4発掘区に直交させて設定した発掘区である。谷筋の中央を縦断する位置に相当したため、その基本的層序は、第4発掘区と同じである。しかし、一段低い北側水田中に相当する北半部では、谷の堆積土が削平されてしまっており、耕土下に灰色土が堆積するだけで直ちに地山（標高397.1m）となる。その東側で谷底を流れる流路跡の西側を南北17mにわたって検出した。深さ0.5m以上で、東に向かって深くなると思われる。第3発掘区で認めたよう

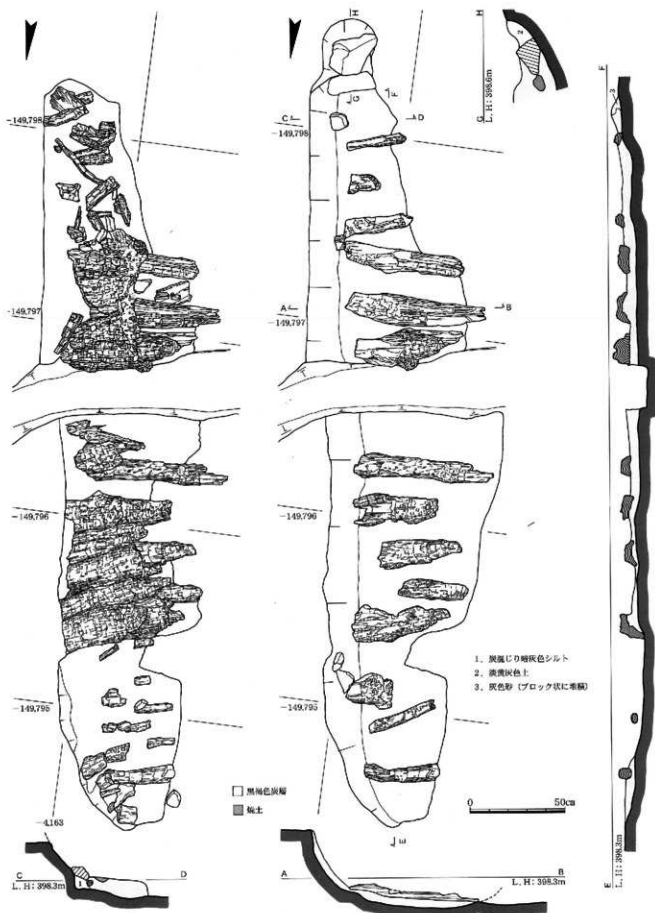


図 172 第4発掘区炭層平面図・断面図 (1/40)

な縄文時代遺物包含層は確認できなかった。

第6発掘区 (50m²) 第1発掘区と第2発掘区の間を設定した発掘区である。第1発掘区で確認した縄文時代遺物包含層の広がり一段高い南側にまで及んでいるかを確認するために設けた。

その結果、発掘区全体にわたって厚さ0.8mの造成土があり、現在の水田は大きくかさ上げされていることが判明した。造成土の下には旧耕土、黄灰色シルトブロック混暗灰色土(水田造成土)、暗褐色腐植土、灰白色砂、青灰色砂混シルト、灰白色砂・粗砂・褐色腐植土の互層、暗黄色シルト、青灰色粘土、茶褐色腐植土、淡黄灰色粗砂が堆積する。現水田面下1.9m(標高396.0m)まで掘削したが、以上の通り水田造成土と流路堆積が認められるだけで地山までは達しなかった。第1発掘区で確認した地山の標高が396.0m前後であり、それよりも深くするのは確実である。深くして危険なため、これ以上の掘削は行なわなかった。

第1発掘区と第2発掘区の調査成果から考えて、第6発掘区地点は東から西へ流れる流路跡の内部に相当すると推定できる。第1発掘区南端で検出した北屑と第2発掘区北東で検出した南屑から、流路幅約30m、深さ0.6m以上に復元できる。

第7発掘区 (56m²) 2つの尾根に挟まれた南北に細長い谷筋の最も南奥に設定した発掘区である。

発掘区全体にわたって厚さ0.3～0.7mの造成土があり、現在の水田は谷筋を大きく埋め立ててつくられていることが判明した。造成土の下には淡灰褐色土、黄灰色砂、灰色土、青灰色シルト・茶褐色腐植土・灰色砂の互層が厚く堆積する。流路堆積であり、青灰色シルト・茶褐色腐植土・灰色砂の互層からは13世紀頃の瓦器碗片が出土した。現水田面下1.9mまで掘削したが、谷底には達しなかった。危険なため、これ以上の掘削は行なっていない。発掘区西側で谷の西屑を検出したが、東屑は発掘区外となるため谷の幅は不明である。したがって、確認できる谷の規模は、幅13m以上、深さ1.4m以上となる。

西側の尾根裾部に沿って、幅2m以上、深さ約0.3m以上の溝があり、第4発掘区で検出した溝と一連の遺構である可能性がある。谷筋の水を尾根裾に迂回させて下方の水田に流すための水路と思われる、そこから2mほど西側にある現在の水路の前身であろう。

また、谷の西屑より約0.5m下がった位置に黒色炭層が堆積する浅い窪みがある。形は不整形で、南北1.5m以上、東西1m、深さ0.05mである。おそらく第4発掘区で検出したような炭層が近辺にあって、その灰原の一部が現れているのだろう。

A発掘区 (137m²) 第1発掘区で確認した縄文時代遺物包含層の広がりを追求するために、その東側に設定した発掘区である。第1発掘区を設定した箇所的一段高い南側水田下がほぼ縄文時代遺物包含層の広がりとなっていた。そこで、この範囲を調査対象とし、基準点測量で旧国七座標軸に沿った1m方眼のグリッドを設定して調査を行なった。

縄文時代遺物包含層の上で一度遺構検出したところ、調査区中央北側で焼土坑SK01(図174)を1基確認した。SK01は南北0.9m、東西0.62mの隅丸方形で、深さ0.12mである。底に炭を多量に含む暗灰色シルトが堆積し、四周の一部の壁面には焼けて橙褐色化した焼土が残っていた。

なお縄文時代遺物包含層は、X=-149,735.00mライン及びY=-4,108.00mラインに沿って東西南北に幅1mの試掘をまず行ない、包含層の堆積構造と深さや遺物の包含量・分布を調べた。

その結果、発掘区の西側から遺物が多く出土する傾向が看取できたため、Y=-4,108.00mラインより西側の包含層を掘削して遺構の有無と出土遺物の分布を確認した。

i. 縄文時代の遺物分布

A発掘区西側南半部には南東から北西へ延びる微高地があり、その裾部に沿って縄文時代早期末前期初頭の遺物が分布していることが調査によって判明した。検出した微高地は、東西8.5m、南北6mである。微高地上の標高は396.4m、北側裾の標高は395.9mで、南北約0.5mの比高差がある。微高地上では遺構が認められなかったが、A発掘区から出土した遺物は縄文土器46点、石器115点あり、これの遺物分布を検討する。なお石器石材は全てサヌカイトであるため、石材別分布は示していない。

平面分布を地山上面の旧地形図に投影した(図175・176)。これを見ると微高地の裾部に沿って遺物が分布していることが分かる。発掘区南部は遺物分布が極端に希薄となるが、これは後世の水田造成の削平

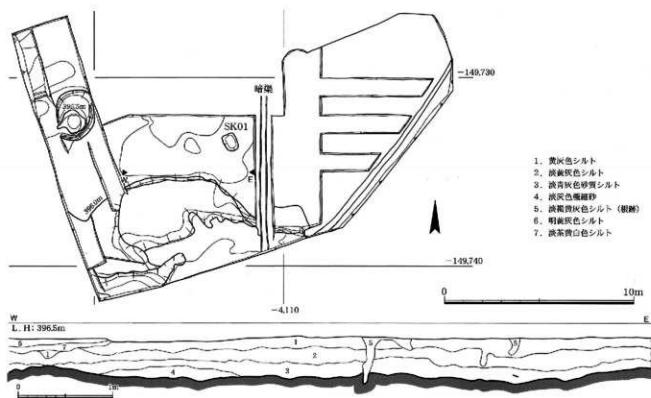


図173 A発掘区平面図 (1/200)・堆積土層図 (1/40)

によって縄文時代遺物包含層自体がなくなっているためである。遺物は微高地裾部の北東部周辺で特に集中して出土しており、分布の傾向が土器・石器で共通している。このことから両者が同じ成因によって分布している可能性が高いと考えられる。

垂直分布でこれを見ると、遺物は縄文時代遺物包含層の各層に散在することが分かる(図177・178)。土器はすべて早期末前期初頭のものであり、いずれの層境にも分布のピークが見られない。

以上のことから、遺物はすべて2次堆積したものと考えられる。遺物分布が微高地裾部に集中することから、本遺跡の中心的な活動箇所は、微高地上方に当たる南東方向にあったのではないだろうか。また、遺物の時期が一時期に限られることから、その活動は短期間の限定的なものであった可能性がある。キャンプサイトとして一時的に利用された遺跡だったのかもしれない。(鎌方・大窪)

3. 出土遺物

出土遺物は、遺物整理箱1箱分が出土した。その内訳は、縄文時代の土器・石器の他に古墳時代の土師器・須恵器、中世の瓦器・土師器が少量ある。ここでは、縄文土器と石器の概要を述べておく。

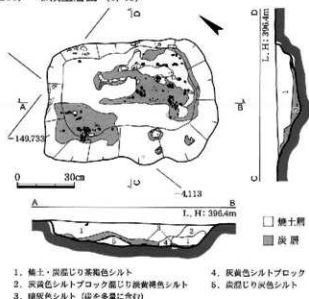


図174 A発掘区SK01平面図・断面図

(1) 縄文時代の出土遺物

1. 縄文土器 (図179-1~7・表28)

柚ノ川試掘調査において出土した縄文土器は総数47点、約170gである。早期末前期初頭に位置づけられるものが2~3個体分、帰属時期不明のものが1点出土している。いずれも原位置を遊離した状態で出土しているが、1個体分がある程度復原できる。

1~5は深鉢の口縁部片である。1~4は端部に刻

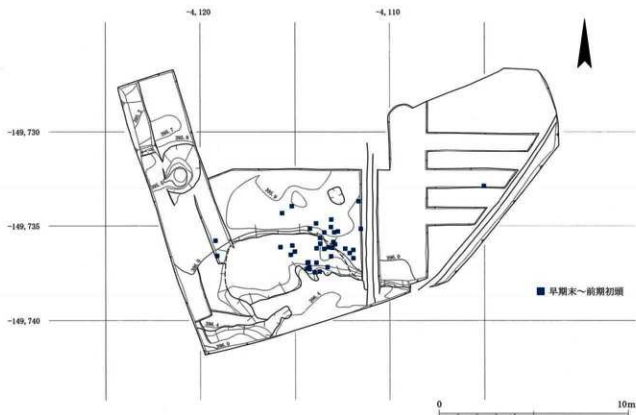


図 175 A発掘区出土縄文土器平面分布 (1/200)

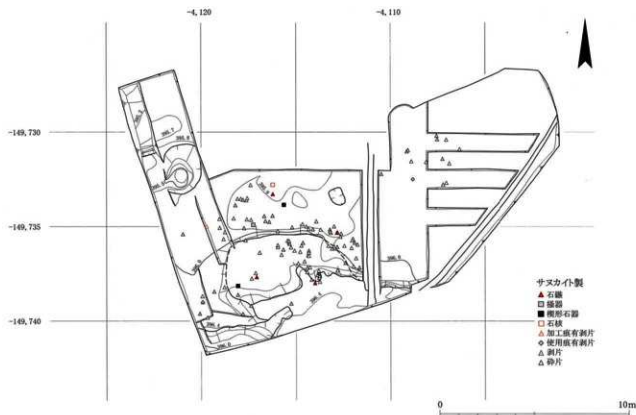


図 176 A発掘区出土石器平面分布 (1/200)

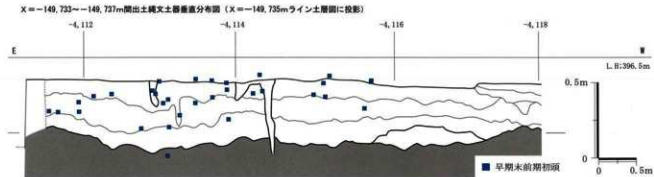


図177 A発掘区出土縄文土器垂直分布

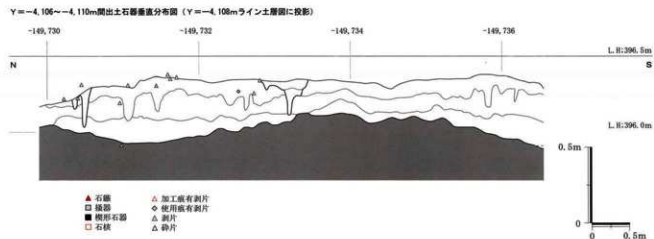
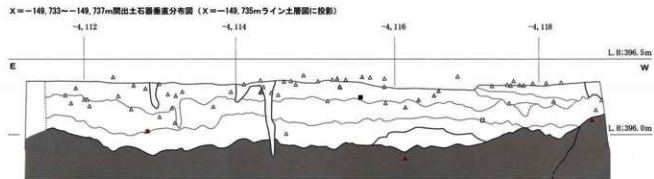


図178 A発掘区出土石器垂直分布

みを施さないもので、同一個体と考えられる。面取りを行った際の擦痕が認められる。1・2の内面は指頭圧痕が顕著に認められる。3・4の内面は摩滅のため調整不明であるが、面取りを行った際に粘土がはみ出したことが窺える。5は端部に右下がりの刻みを施すもので、内外にナデを施す。

6は深鉢の頭部～胸部の破片で、接合により器形が復原できた資料である。頭部で屈曲し口縁部がやや内傾する器形で、外面は斜位の条痕を交互に行い、切り合う。内面は頭部以下はナデ・ユビオサエで調整し、指頭圧痕が顕著に認められ、頭部には横位に条痕を施す。砂粒・雲母を多く含み、1～4、5のいずれかと

同一個体であると考えられる。

7は深鉢の胴部片と考えられるもので、内外にナデを行う。1～6とは出土地点が異なり、また帰属時期も不明である。(熊谷)

ii. 石器 (図180-1～11・表29)

石鐮7(4)点、石匙1点、削器2(1)点、楔形石器3(2)点、加工痕有剥片1点、使用痕有剥片2(1)点、剥片44(37)点、砕片77(69)点、合計137(114)点の石器が出土した。なお、括弧内の数値はA発掘区での出土数を示す。図180では2・5・7以外がA発掘区の縄文時代遺物包含層出土石器である。先述のように、この層の出土土器が縄文時代早期末前期



図 179 袖ノ川遺物散布地出土縄文石器 (1/2)

初頭と考えられることから、これらの石器もこの時期の可能性が高い。また、石材はすべてサヌカイトである。以下、主要なものについて述べる。

石鏃 (1～4) 1は縄文時代早～中期に多く見られる小型のもので、側縁がやや内彎し、脚部を丸くおさめる。2～4は脚端部を尖らすものである。2は全体的に丁寧な調整が施されるもので、脚が内側にすばまり、側縁が緩いS字を描く。3は側縁が外彎し、基部に浅く抉りが入る。4は長さ3cm近くに及ぶもので、脚部の内側が膨らみ、直線的な側縁をもつもので

ある。前期に多く見られる形態と考えられる。

石匙 (5) 礫面を打面とした横長剥片を素材とするもので、腹面側から刃部加工を加え、やや内彎した刃部を作出している。刃部は概ね右から左へ押し剥離作業を進める傾向があり、丁寧に調整されているが、その他の部位は調整が粗雑で、一部礫面も残る。第4発掘区の谷埋土から出土した。

削器 (6・7) 6は、背面左側に素材剥片の主要剥離面を残し、幅広剥片を素材としていたと考えられる。腹面には同様の剥片を剥離したと考えられるネガ

表 28 袖ノ川町遺物散布地出土縄文土器観察表

報告 番号	X (m)	Y (m)	H (m)	層位	時期	型式	器種 部位	特徴	調整	器量(mm)			粘土			
										最大	最小	平均	器種	内面	外面	
1	-148.737.187	-4.114.282	396.214	黄灰色 砂質 シルト	早期末 前期初頭	深鉢 口縁部	外ナデ 内ナデ	ナデ	ナデ	0.6	0.5	0.6	◎	◎	◎	◎
2	-149.734.346	-4.115.093	396.161	黄灰色 シルト	早期末 前期初頭	深鉢 口縁部	外ナデ 内ナデ	ナデ	ナデ	0.63	0.55	0.6	◎	◎	◎	◎
3	-149.736.543	-4.115.233	396.574	黄灰色 シルト	早期末 前期初頭	深鉢 口縁部	外ナデ 内ナデ	ナデ	ナデ	0.73	0.35	0.5	◎	◎	◎	◎
4	-149.733.874	-4.115.177	396.227	黄灰色 シルト	早期末 前期初頭	深鉢 口縁部	外ナデ 内ナデ	ナデ	ナデ	0.65	0.4	0.5	◎	◎	◎	◎
5	-149.736.660	-4.112.122	396.241	黄灰色 シルト	早期末 前期初頭	深鉢 口縁部	外ナデ 内ナデ	ナデ	ナデ	0.8	0.7	0.8	◎	◎	◎	◎
6	-149.735.829	-4.113.059	399.234	黄灰色 シルト	早期末 前期初頭	黄灰色土器 深鉢 口縁部	黄灰色	外ナデ 内ナデ	ナデ	0.75	0.5	0.7	◎	◎	◎	◎
	-148.736.643	-4.113.837	396.384	深鉢 口縁部												
	-149.735.453	-4.113.430	399.212													
	-149.736.441	-4.112.799	396.163													
	-149.736.508	-4.112.758	396.138													
	-149.736.471	-4.112.799	396.171													
	-149.736.471	-4.112.852	396.138													
	-149.736.497	-4.112.854	396.135													
	-149.736.648	-4.114.109	396.146													
	-149.734.889	-4.113.899	396.059													
	-148.734.889	-4.113.896	396.065													
	-149.735.564	-4.113.568	396.081													
-149.736.178	-4.113.424	396.051														
-149.734.688	-4.112.817	395.944	深鉢 口縁部													
-149.735.656	-4.112.224	396.029														
-149.735.656	-4.112.875	396.037														
-149.736.454	-4.112.829	396.166														
-149.735.171	-4.111.949	396.068														
-149.735.282	-4.113.348	396.051														
-149.736.863	-4.112.753	396.193	黄灰色 砂質 シルト	黄灰色土器 深鉢 口縁部	黄灰色	外ナデ 内ナデ	ナデ	0.8	0.7	0.8	◎	◎	◎	◎		
7	第3トレンチ	下層砂層土 層		黄灰色 シルト		深鉢 口縁部		外ナデ 内ナデ		0.8	0.7	0.8	◎	◎	◎	◎

ティップ面があることから、打面を変えながら連続して幅広剥片を剥離していたのかもしれない。刃部にはインパースリタッチが施されており、最初浅い角度で調整した後、再度急角度の調整がなされている。7は、礫面を打面とする横長剥片を素材とするもので、素材剥片の主要剥離面を背面側にもつ。刃部加工は腹面側から行われ、粗雑で浅い角度のインパースリタッチを施している。

楔形石器 (8~10) 小型の四辺形を呈するものと、縦長の形態を呈するものがある。いずれも上下端にツブレを有する。8は薄い剥片を素材としており、両端打法で剥離された剥片を素材としている可能性がある。下半右部分が破損したため廃棄したと考えられ、左側面に剪断面をもつ。9・10は素材剥片の主要剥離面が残るもので、それぞれ寸詰まり剥片、縦長剥片を素材としていると考えられる。ともに右側面に剪断面を有する。

剥片 (11) 剥片は小型のものが多数を占め、礫面の形状から石核には小型の亜凸礫や並角礫が使用された可能性が高い。剥片は幅広の寸詰まり剥片が多く、横長剥片や両端打法で剥離された剥片がこれに続く傾

向にある。11は礫面を有する幅広の寸詰まり剥片の両端を加撃し、剥片を分割したものである。(大塚)

4. まとめ

第1発掘区と第2発掘区の間には南東から流れ出した流路跡があり、これに分断されるように南北二つの微高地が尾根の裾部に形成されている。

この微高地の周囲には黄灰色シルト層が堆積し、縄文時代早期末〜前期初頭の遺物を包含することが判明した。しかし、その包含量はわずかであり、局地的に遺物の分布が集中する地点をA発掘区内で確認したに過ぎない。A発掘区での調査結果から考えて、早期末〜前期初頭のわずかな期間だけ人の居住域となっていたのだろう。南側に開けておらず日当たりのさほど良くない場所であり、ここに長期的な生活遺跡を想定するのは難しい。ただし、ここと連続する袖ノ川町内の谷筋にはイモタ遺跡やキトラ遺跡が点在し、その地形環境はよく似ている。調査地北側の尾根南側周辺にも同様の微高地が形成されているならば、むしろこちらの方が居住域としては適切だろうと想定できる。

調査地南側の南北に細長い谷筋には、炭炭以外に遺跡の存在を示唆する顕著な資料は認められなかった。



図 180 榎ノ川町遺物散布地出土石器 (2/3)

表 29 榎ノ川町遺物散布地出土石器観察表

	X(m)	Y(m)	H(m)	層位・遺構	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ(g)	石材	備考
1	-149,735.356	-4,112.836	396.020	淡青灰シルト	石鏃	1.53	1.27	0.21	0.19	ヤスカイト	
2		第6発掘区		中世渡路土層: 灰色砂土	石鏃	2.30	1.64	0.30	0.61	ヤスカイト	
3	-149,763.340	-4,133.821	396.818	黄灰色シルト	石鏃	2.26	1.81	0.40	0.99	ヤスカイト	
4	-149,738.019	-4,113.992	396.420	黄灰色シルト最上層	石鏃	(2.78)	(1.76)	0.32	1.10	ヤスカイト	先端部・基部欠損
5		第4発掘区西端		中世谷埋土最上層: 灰色土	石鏃	2.61	6.19	0.53	7.25	ヤスカイト	
6	-149,734.822	-4,117.245	396.094	淡青灰シルト	柄部	3.84	5.00	0.79	14.98	ヤスカイト	インバースリタツテ
7		第1発掘区 両手		中世遺物包含層	柄部	2.43	4.88	0.41	6.82	ヤスカイト	インバースリタツテ
8	-149,739.421	-4,119.630	396.171	黄色シルト	楔形石鏃	2.01	2.19	0.37	2.19	ヤスカイト	
9	-149,733.888	-4,115.639	396.244	黄灰色シルト最上層	楔形石鏃	2.03	2.12	0.75	3.29	ヤスカイト	両断面有
10	-149,738.372	-4,118.064	396.354	淡黄灰色シルト	楔形石鏃	3.70	1.96	0.91	5.26	ヤスカイト	両断面有
11	-149,732.810	-4,116.224	398.145	黄灰色シルト最上層	破片	2.84	1.81	1.08	6.64	ヤスカイト	

本来深い谷筋であったらしく、微高地が形成されるような地点もない。谷の底は流路となり、砂やシルトが堆積する。この最下層からは古墳時代の布留式土器片が少量出土しているが、その理由はよくわからない。この上には中世土器を包含する層が厚く堆積し、中世

以降に多くの土砂が谷部に堆積するような環境の変化があったらしい。

以上の調査所見からみて、調査地内に大きな遺跡は認められず、短期間の居住域や炭窯のような単体の遺構が散在する程度であると考えられる。(鏡方)

第4章 自然科学的分析

第1節 自然科学的分析の目的

I. 自然科学的分析について

遺跡の発掘調査は、野外において遺構、遺物の出土状態や遺跡の立地要件に関連する地形・地質を観察・記録し、遺物や分析試料の採集を行う野外調査と、野外で採集した遺物や分析試料の整理と分析を行う室内調査からなる。自然科学的分析は室内調査の一環で、肉眼観察では確認できなかった事象の把握が可能となり、調査成果の総合性や確実性を高めるうえで大きな役割を果たす。

奈良市教育委員会がこれまでに行ってきた自然科学的分析は、以下の3つである。

① 環境の指標性が高く、生活資源となっている植物を主体とした生物遺体の同定

② 有機物を試料として年代値を得る放射性炭素年代測定や、年代の指標性が高い広域火山灰の同定

なお前者には年代の手がかりとなる遺物がみられない遺構や地層の年代を比定するために行うものと、遺物自体の年代を特定するために付着有機物の分析を行うものがある

③ 遺物の付着物や土壌中に含まれる化学物質や土器の胎上に含まれる鉱物の同定、ならびに石器石材として使用される鉱物の原石産地を同定する理化学分析

いずれも従来から地質学や自然地理学で行われていた分析を活用しており、専門の研究機関や分析会社に委託して実施している。

II. 実施した自然科学的分析の内容と目的

1. 別所下ノ前・辻堂遺跡、柚ノ川イモタ・キトラ遺跡・水間遺跡

別所下ノ前遺跡をはじめとする各遺跡で国立歴史民俗博物館に依頼し、下記の自然科学的分析を実施した。

放射性炭素年代測定 別所下ノ前遺跡第4次調査D発掘区、別所辻堂遺跡第3次調査、柚ノ川イモタ遺跡第2次調査、柚ノ川キトラ遺跡第2次調査、水間遺跡第7次調査の縄文時代遺物包含層から出土した縄文土器の付着物13点(11個体)について行った。これらは、それぞれの縄文土器の年代の特定を目的とした。

2. 別所下ノ前・辻堂遺跡、柚ノ川町遺物散布地

別所下ノ前遺跡をはじめとする調査では、橿古環境研究所に委託して下記の自然科学的分析を実施した。

放射性炭素年代測定 別所下ノ前遺跡遺跡第4次調査C～E発掘区で確認した土坑・石炭炉、および別所辻堂遺跡、柚ノ川町遺物散布地で確認した炭窯で採取した炭化物について、遺構の年代の特定を目的として行った。

3. 別所下ノ前遺跡

橿古環境研究所に委託して下記の自然科学的分析を実施した。

黒曜石の石材産地同定 別所下ノ前遺跡第2次調査E発掘区の掘立柱建物S B05の柱穴埋上から出土した黒曜石製角錐状石器について、石材産地同定を目的として行った。

4. 柚ノ川イモタ遺跡

橿古環境研究所に委託して下記の自然科学的分析を実施した。

ガラス質安山岩(サヌカイト)の石材産地同定 柚ノ川イモタ遺跡第2次調査A・B地区の縄文時代遺物包含層から出土したガラス質安山岩(サヌカイト)3点について、石材産地同定を目的として行った。

以下、これら4件の分析の成果を報告する。(大窪)

第2節 放射性炭素年代測定

I. 別所辻堂遺跡出土土器試料の炭素14年代測定

奈良市内の各遺跡から出土した土器付着炭化物の年代測定を行ったので、その結果を報告する。試料の採取は2006年7月10日に奈良市埋蔵文化財センターで遠部慎が採取した。資料の出土層位やおおよその所属時期は、奈良市埋蔵文化財調査センターの久保邦江及び奈良大学大学院熊谷博志氏によるものである。

試料の前処理は年代測定グループが行い、測定は榊バネオ・ラボ社によるものである。測定結果は計測値(補正)とともに、実年代の確率を示す較正年代値を示した。また、その根拠となった較正曲線を示した(図181)。

1. 測定試料

測定対象とした試料は、遠部が採取した土器付着物

13点(11個体)である。試料については、一覧を表1に示す。年代測定用の前処理をした結果、このうち12点は炭素量不足で測定できず(表30)、結果的に1個体についてのみ測定を行った。

2. 炭化物の処理

炭化物試料については、補注1に記した手順で試料処理を行った。(1)の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において遠部が行い、(2)(3)の作業を宮田が行い、残りはパレオ・ラボ社に委託した。

3. 測定結果と暦年校正

測定結果は、補注2に示す方法で、同位体効果を補正した¹⁴C年代、校正年代を算出した。表32に測定結果を示すが、 $\delta^{13}C$ 値は、すべて加速器による同位体効果補正のための測定であり、試料自体の正確な値とは言えない。表には参考値として()で記しておく。

4. 測定結果について

奈良市内の遺跡試料で、炭素14年代測定できたのは、別所辻遺跡の土器付着物1点のみである。そこで、市内の縄文時代草創期～早期の測定例などを参照しながら、検討してみる(表33)。

今回、神宮寺式(古段階)の上器付着物から、9,305±25 B Pという年代値が得られた。これは暦年校正すると、紀元前8,630～8,470年(95.5%)になる。なお、別所下ノ前遺跡では上器付着物の測定値は得られなかったが、早期前半の炉の炭層から9,450±40 B P

という値が(橿原考古学研究所2006)、水間遺跡では早期後半(天神山式併行)の炭化材からは、6,400±40 B Pという値が報告されている(奈良市埋蔵文化財センター2006)。

土器付着炭化物では、近畿地方の京都府家察使遺跡で豊後隠岐火山灰下(福沢1995)から出土した縄文時代早期の大川式土器から、9,530±60 B Pという年代値が報告されている(中川2005)。この土器は大川式土器でも新段階である(矢野1993)。Rh-Calで校正すると、紀元前9,155～8,705年(94.8%)、紀元前8,665～8,655年(0.7%)となる。今のところ、豊後隠岐火山灰の上位から、大川式が出土した例はないので、年代と校正年代の確率分布との関係を重視すれば、大川式(新段階)は紀元前9,155～8,740年の範囲に含まれると理解できる(遠部2006)。こうした理解のもと、年代的考察によれば、大川式(新段階)と神宮寺式(古段階)は、年代測定値上では、前後関係を有していることになる。まだ、縄文時代早期の測定数が少ないが、今後、測定を重ねて改めて検討したい。

本稿の測定成果は、平成18年度科学研究費補助金(学術創成研究)「弥生農耕の起源と東アジア炭素年代測定による高精度編年体系の構築—(研究代表 西本豊弘 課題番号16GS0118)、平成18年度科学研究費奨励研究「瀬戸内地方における縄文時代早期貝塚の年代学的研究」(課題番号18904003)、「西日本における

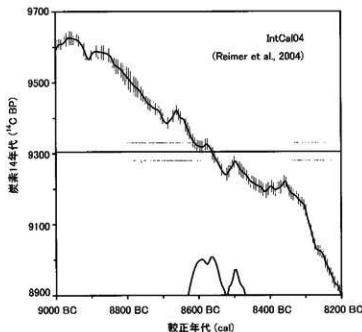


図181 校正曲線と校正年代値

試料番号	NR\NR-3			
機関番号	PLD-6296			
炭素14年代	9305 ± 25	¹⁴ C BP		
校正年代	8630 cal BC	8530 cal BC	76.7%	
	8520 cal BC	8470 cal BC	18.8%	
	-	-	-	-
	-	-	-	-
	-	-	-	-
	-	-	-	-
	-	-	-	95.4%
中央値	8575 cal BC			
最頻値	8565 cal BC			

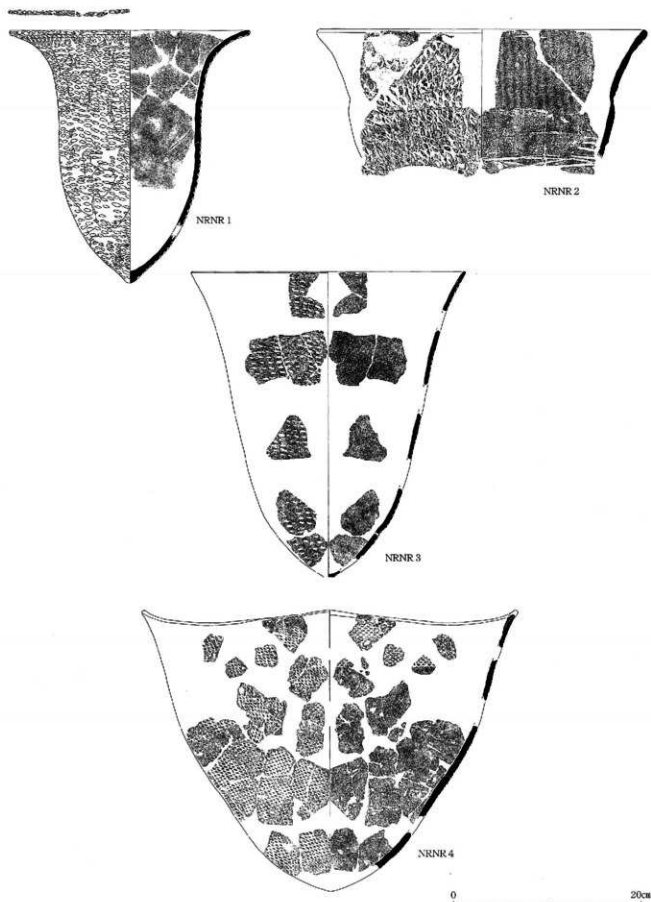


图 182 炭素測定試料① (S = 1/4)

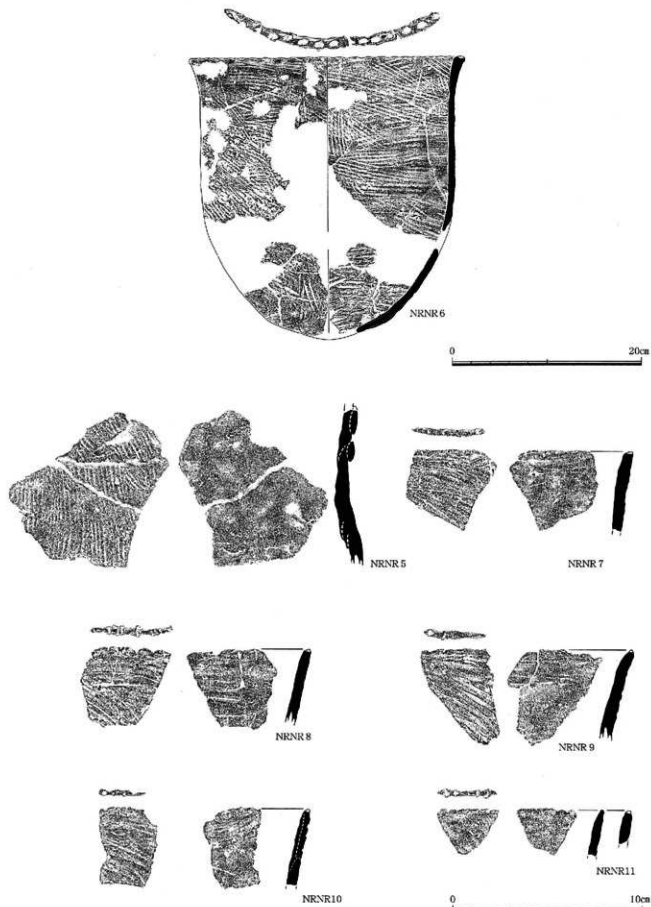


図 183 炭素測定試料② (NRNR 6 : $S = 1/4$, その他 : $S = 1/2$)

表 30 採取した試料の情報

試料記号	遺跡名	トレンチ・層位	測定対象	図版番号	土器型式	器種	付着	付着部位 状況
NRNR-1	札ノ川イモダ遺跡	A区	縄文包含層下層	土器付着物	概要報告 I 図35	大川式	深鉢	煤 胴部外面
NRNR-2a	袖ノ川キトラ遺跡	A免掘区	縄文包含層上層	土器付着物	概要報告 I 図66	高山寺式	深鉢	煤 胴部内面
NRNR-2b	袖ノ川キトラ遺跡	A免掘区	縄文包含層上層	土器付着物	概要報告 I 図66	高山寺式	深鉢	煤 胴部内面
NRNR-3	別所辻堂遺跡	A免掘区	縄文包含層下層	土器付着物	本書報告 図117	神宮寺式	深鉢	煤 胴部外面
NRNR-4	別所下ノ前遺跡	D免掘区	黄色シルト	土器付着物	本書報告 図69	山戸型	深鉢	煤 胴部外面
NRNR-5	別所下ノ前遺跡	D免掘区	黄色シルト	土器付着物	本書報告 図71	埴屋式	深鉢	煤 口縁部外面
NRNR-6	水間遺跡	K免掘区	黄灰色シルト	土器付着物	概要報告 I 図124	粟津S2併行	深鉢	煤 胴部内面
NRNR-7	水間遺跡	K免掘区	黄灰色シルト	土器付着物	概要報告 I 図123	天神山式併行	深鉢	煤 口縁部外面
NRNR-8	水間遺跡	K免掘区	黄灰色シルト	土器付着物	概要報告 I 図123	天神山式併行	深鉢	煤 口縁部外面
NRNR-9	水間遺跡	K免掘区	黄灰色シルト	土器付着物	概要報告 I 図123	天神山式併行	深鉢	煤 口縁部外面
NRNR-10a	水間遺跡	K免掘区	黄灰色シルト	土器付着物	概要報告 I 図123	天神山式併行	深鉢	煤 口縁部外面
NRNR-10b	水間遺跡	K免掘区	黄灰色シルト	土器付着物	概要報告 I 図123	天神山式併行	深鉢	煤 口縁部外面
NRNR-11	水間遺跡	K免掘区	黄灰色シルト	土器付着物	概要報告 I 図123	天神山式併行	深鉢	煤 口縁部外面

表 31 採取した試料の分析状況

試料番号	採取量 ¹⁾ (mg)	処理量 ²⁾ (mg)	残量 (mg)	処理方法 ³⁾	回収量 (mg)	含有率 I (%)	前処理後 ³⁾ 状態	精製 (mg)	ガス (mg)	含有率 II (%)
NRNR-1	12.19	12.19	0	通常	3.52	28.9%	不良	2.51	0.09	3.6%
NRNR-2a	10.41	10.41	0	通常	2.62	25.2%	不良	1.95	0.02	1.0%
NRNR-2b	8.51	8.51	0	通常	0	0%				
NRNR-3	19.45	19.45	0	通常	7.15	36.8%	良	5.18	1.15	22.2%
NRNR-4	25.57	25.57	0	通常	6.09	23.8%		4.47	0.19	4.3%
NRNR-5	55.62	55.62	0	通常	0.72	1.3%				
NRNR-6	23.41	23.41	0	通常	3.08	0.1%	不良	2.64	0	0%
NRNR-7	28.13	28.13	0	通常	13.13	46.7%		3.54	0.02	0.7%
NRNR-8	9.14	9.14	0	通常	1.02	11.2%	不良	0.75	0	0%
NRNR-9	6.18	6.18	0	通常	0	0%				
NRNR-10a	39.68	39.68	0	通常	1.00	2.5%	不良	0.81	0	0%
NRNR-10b	12.18	12.18	0	通常	5.78	47.5%	不良	1.18	0	0%
NRNR-11	5.16	5.16	0	通常	0.68	13.2%	不良	5.06	0	0%

1) 採取量の α 及び残量の残は、残部が多いため計量を測定していないが残量があることを示す。

2) 処理方法の通常は補注(1)参照。オートは自動処理機で行ったことを示し、未処理は土壌であったり、

採取量が少ないため、分析作業を実施しなかったもの。

3) 前処理後の良/不良は顕微鏡観察でミネラルなど不純物を多く含むものを不良としている。

表 32 測定結果と較正年代一覧

試料番号	測定機関番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 炭素年代 (BP)	暦年較正年代 (Cal BC)	確率分布 (%)
NRNR-3	PLD-6283	(-24.5)	9305 ± 25	8630-8530	76.7%
				8520-8470	18.8%

表 33 奈良市内の分析一覧

遺跡	分析試料		分析法	機関番号	年代値(補正)	掲載刊利物
	採取地点等	種別				
宝来遺跡	下層遺構調査区(25層)	土壌	^{14}C 年代測定(β)	Beta-114621	5,410±60BP	三好・大塚1999
宝来遺跡	下層遺構調査区(31層)	土壌	^{14}C 年代測定(β)	Beta-114622	6,030±60BP	三好・大塚1999
水間遺跡	F免掘区(11層)	土壌	^{14}C 年代測定(β)	Beta-150882	6,610±90BP	環境考古研究会2002
水間遺跡	F免掘区(17層)	土壌	^{14}C 年代測定(β)	Beta-150883	7,950±100BP	環境考古研究会2002
水間遺跡	F免掘区(6層)	土壌	^{14}C 年代測定(β)	Beta-153624	6,920±70BP	環境考古研究会2002
水間遺跡	K免掘区SK02	炭化材	^{14}C 年代測定(AMS)	Beta-186670	6,400±40BP	古墳遺構研究所2006
(大良町)	HJ459-3次土層	有機質土	^{14}C 年代測定(β)	Beta-161996	6,960±40BP	安井2004
(三象本町)	HJ477-3次土層	木(樺)	^{14}C 年代測定(β)	Beta-171883	10,130±70BP	安井2004
別所下ノ前遺跡	D免掘区石敷炉	炭層	^{14}C 年代測定(AMS)	Beta-213475	9,450±40BP	橿原考古学研究所2008

縄文海進期の基礎的研究」(パレオラボ第1期 若手研究者を支援する研究助成)の成果の一部を用いている。

暦年校正については今村峯雄、坂本稔の方法に従う。

(国立歴史民俗博物館 遠部慎・宮田佳樹)

補注1

土器附着物については下記の方法で処理した。

(1) 前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄

AAA処理に先立ち、土器附着物については、アセトンに浸け置き、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した(2回)。AAA処理として、80℃、各1時間で、希塩酸溶液(1N-HCl)で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去(2回)し、さらにアルカリ溶液(3%NaOH、1回目0.1N、3回目以降1N)でフミン酸等を除去した。アルカリ溶液による処理は、5回行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理2回(1N-HCl 1時間)を行いアルカリ分を除いた後、純水により洗浄した(4回)。

(2) 二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を燃焼(二酸化炭素化)、真空ラインを用いて不純物を除去。

AAA処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともに石英ガラス管に投げ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で、850℃で3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス製真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

(3) グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元し、二酸化炭素をグラファイト炭素に転換。アルミニウム製カソードに充填。

1.5mgの炭素量を目標に二酸化炭素を分取し、水素ガスとともに石英ガラス管に封じた。これを電気炉で、およそ600℃で12時間加熱してグラファイトを得た。ガラス管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合させた後、穴径1mmのアルミニウム製カソードに600Nの圧力で充填した。

補注2

測定値について、以下の方法で較正年代を算出した。

年代データの ^{14}C BPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した ^{14}C 年代(モデル年代)であることを示す。 ^{14}C 年代を算出する際の半減期は、5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差(1標準偏差、68%信頼限界)である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の $^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$ 比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測



図184 試料NRRR-3

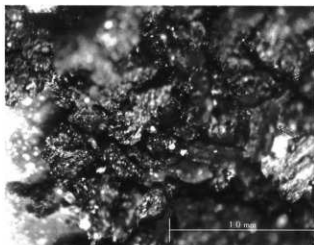


図185 前処理前の試料

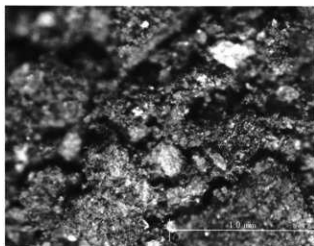


図186 前処理後の試料

定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比により、 $^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$ 比に対する同位体効果を調べ補正する。 $^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$ 比は、標準体(古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比)に対する千分率偏差 $\delta^{13}\text{C}$ (パーミル、‰)で示され、この値を-25‰に規格化して得られる $^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$ 比によって補正す

る。補正した $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、 ^{14}C 年代値(モデル年代)が得られる。加速器による測定は同位体補正効果のためであり、必ずしも $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}/^{13}\text{C}$ 比を正確に反映しないこともあるため、パレオ・ラボ測定分については、加速器による測定を参考として付す。

測定値を較正曲線IntCal10 (^{14}C 年代を暦年代に修正するためのデータベース、2004年版)(Reimer et al 2004)と比較することによって暦年代(実年代)を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と較正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、暦年代の推定信頼率分布として表す。暦年較正プログラムは、国立歴史民俗博物館で作成したプログラムOxCal (OxCal Programに準じた方法)を用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する。95%信頼限界で計算した年代は、較正された西暦 cal B.Cで示す。()内は推定確率である。

《参考文献》

- 遠部 慎2006「北・東部九州における縄文時代早期末〜早期前半の層相一大部分九条町二日市潤六の年代測定」『九州縄文時代早期研究ノート』第4号、19-25頁
- 榎原考古学研究所2006「別所下ノ前遺跡」大和を隔る」榎原考古学研究所
- 環境考古研究会2002「1. 水間遺跡の採取試料の自然科学分析(第1〜3次調査)」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成12年度』、奈良市教育委員会、145-153頁
- 中川和哉2005「家使遺跡出土の縄文土器に関する科学的分析」『京都府埋蔵文化財情報』第97号、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター、17-24頁
- 古環境研究所2006「水間遺跡の環境考古学分析。『県営遺跡整備事業田原東地区における埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅰ』、奈良市教育委員会、176-184頁
- 福沢仁之1995「天然の1時評」『環境変動検出計』としての湖沼の午編堆積物』『第四紀研究』第34巻第3号、第四紀学会、135-149頁
- 三好英穂・大津淳司1999「1 平城京右京三条西房十坪・宝来遺跡の調査 第386次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成10年度』、奈良市教育委員会、1-6頁
- 安井貴也2004「奈良市三条本町一帯の縄文〜平安時代の旧地形と土地利用の変遷について」『R奈良県海田地区上地区調査事業地における発掘調査の成果から』『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要2004』、奈良市教育委員会、1-22頁
- 矢野健一1993「押型土器の起源と変遷—いわゆるネガティブな精陶文を有する押型土器群の再検討—」『考古学雑誌』第78巻第4号、日本考古学会、1-32頁
- Reimer, Paula J. et al. 2004 IntCal04 Terrestrial Radiocarbon Age Calibration, 0-26 Cal Kyr BP. Radiocarbon 46(3), 1029-1058(30).
- Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998): INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon, 40(1), 1041-1083.

II. 別所下ノ前・辻堂遺跡、袖ノ川町試掘調査における放射性炭素年代測定

1. はじめに

別所下ノ前遺跡A・B・C発掘区、別所辻堂遺跡A発掘区、袖ノ川町試掘調査において検出した遺構の構築年代を検討する目的で、放射性炭素年代測定を行った。測定にあたっては米国のBeta Analytic Inc. の協力を得た。

2. 試料

測定試料は、別所下ノ前遺跡E発掘区S K09・D発掘区石敷炉・C発掘区S K01(上層)に堆積した黒色炭層より採取された炭化物(試料A・B・C)の3点、袖ノ川町試掘調査で確認した炭層より出上した炭化材1点(試料D)、別所辻堂遺跡A発掘区の炭層内から出土した炭化材1点(試料E)の計5点である。

3. 方法

加速器質量分析(Accelerator Mass Spectrometry; AMS)法による放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

- まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理(酸-アルカリ-酸処理)を行った。
- 1) 蒸留水で細かく粉砕後、超音波および煮沸により洗浄
 - 2) 塩酸(HCl)により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム(NaOH)により二次的に混入した有機酸を除去
 - 3) 再び塩酸(HCl)で洗浄後、アルカリによって中和
 - 4) 定温乾燥機内で80℃で乾燥

表 34 試料と方法

試料名	試料採取箇所	種類	前処理・調整	測定法
試料A	別所下ノ前E発掘区SK09	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
試料B	別所下ノ前D発掘区石叢炉	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
試料C	別所下ノ前C発掘区SK01	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
試料D	袖ノ川町試掘 炭窯	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
試料E	別所辻堂A発掘区 炭窯	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※ AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は、加速器質量分析法

表 35 測定結果

試料名	測定No.	^{14}C 年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代 (西暦)
試料A	188669	970 ± 40	-26.3	950 ± 40	交点: cal AD 1,040 1σ: cal AD 1,025 ~ 1,155 2σ: cal AD 1,005 ~ 1,185
試料B	213475	9,470 ± 40	-26.3	9,450 ± 40	交点: cal BC 8,740 1σ: cal BC 8,770 ~ 8,690 2σ: cal BC 8,800 ~ 8,620
試料C	213476	880 ± 40	-25.6	870 ± 40	交点: cal AD 1,180 1σ: cal AD 1,160 ~ 1,220 2σ: cal AD 1,040 ~ 1,260
試料D	213477	930 ± 40	-26.6	900 ± 40	交点: cal AD 1,160 1σ: cal AD 1,040 ~ 1,190 2σ: cal AD 1,030 ~ 1,230
試料E	213478	1,040 ± 40	-27.2	1,000 ± 40	交点: cal AD 1,020 1σ: cal AD 1,000 ~ 1,030 2σ: cal AD 980 ~ 1,060, AD 1,080 ~ 1,150

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、n-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデロン加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料を表1に示す。

4. 結果

年代測定結果を表2に示す。

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

2) δ (デルタ) ^{13}C 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質(PDB)

の同位体比からの千分偏差(‰)で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えて算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代(西暦)。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ(シグマ)(68%確率)と2σ(95%確率)は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の

1σ・2σ値が表記される場合もある。

5. 所見

得られた年代値を同位体分別効果により補正し、さらに暦年代較正を行った結果、試料Aでは950±40年BP(2σの暦年代でAD1,005～1,185年)、試料Bでは9,450±40年BP(同BC 8,800～8,620年)、試料Cでは870±40年BP(同AD 1,040～1,260年)、試料Dでは900±40年BP(同AD 1,030～1,230年)、試料Eでは1,000±40年BP(同AD 980～1,060年、AD 1,080～1,150年の年代値が得られた。(株式会社 古環境研究所)

《参考文献》

Stuiver, M., et al., (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫(1999)放射性炭素法。考古学のための年代測定学入門。古今書院, p.1-36.

第3節 石器石材の産地同定

III. 別所下ノ前遺跡出土黒曜石の石材産地同定

1. はじめに

別所下ノ前遺跡A発掘区で出土した石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、原産地を推定した。

2. 試料と方法

対象試料は、別所下ノ前遺跡E発掘区で出土した黒曜石とみられる角錐状石器1点である(図83-1)。

分析装置は、軸セイクーンスツルメンツ社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA-2110Lを使用した。装置の仕様は、X線管はロジウムRhターゲット、X線検出器は、Si(Li)半導体検出器である。測定条件は測定時間240sec、照射径10mm、電流自動設定(1-63μA、デッドタイムが20%未満になるよう自動的に設定)、電圧50kV、試料室内雰囲気真空に設定した。

産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法(望月2004)を用いた。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)とルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps; count per second)について、以下に示す指標値を計

算する。

- 1) Rb分率=Rb強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
- 2) Sr分率=Sr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
- 3) Zr分率=Zr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
- 4) Mn強度×100/Fe強度
- 5) log(Fe強度/K強度)

そしてこれらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸log(Fe強度/K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、原産地を推定するものである。別表と別図に産地原石判別群と産地位置を示した。

3. 分析結果

表36に産地推定結果を示す。図187および図188に黒曜石原石の判別図と遺跡出土試料をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、試料1は隠岐久見群の範囲に収まった。よって、本試料は隠岐地方産の黒曜石である可能性が高いと判断される。

4. まとめ

別所下ノ前遺跡E発掘区で出土した黒曜石について蛍光X線分析による産地推定を行った結果、隠岐久見群産と推定された。(株式会社 古環境研究所・沼津工業高等専門学校 望月明彦)

IV. 袖ノ川イモタ遺跡出土石器のサヌカイト産地同定

1. はじめに

考古学研究においては、遺物が遺跡へと至るまでの来歴を辿ることによって、個々の時代における人々の行動様式や流通関係に迫ることが可能となる。特に狩猟・採集によって生計を立てていたと考えられている石器時代において、石器に使用する石材の産地分析は、空間的な人の動きに迫るための有効な分析方法である。

火山の噴出物として生成されたガラス質安山岩(サヌカイト)は、結晶構造をもたず、珪晶の含有量が少ないことから元素組成が安定している。このようなガ

表 36 出土黒曜石製石器の分析結果

1.判別図法・判別分析からの最終推定結果

2.判別図法による推定結果と判別分析による推定結果

分析番号	遺物№	推定産地	判別図 判別群	判別分析					
				第1候補産地		第2候補産地			
				判別群	距離	確率	判別群	距離	確率
1	0964	隠岐久見群	OKHM	OKHM	1.9	1	OKMU	25.85	0

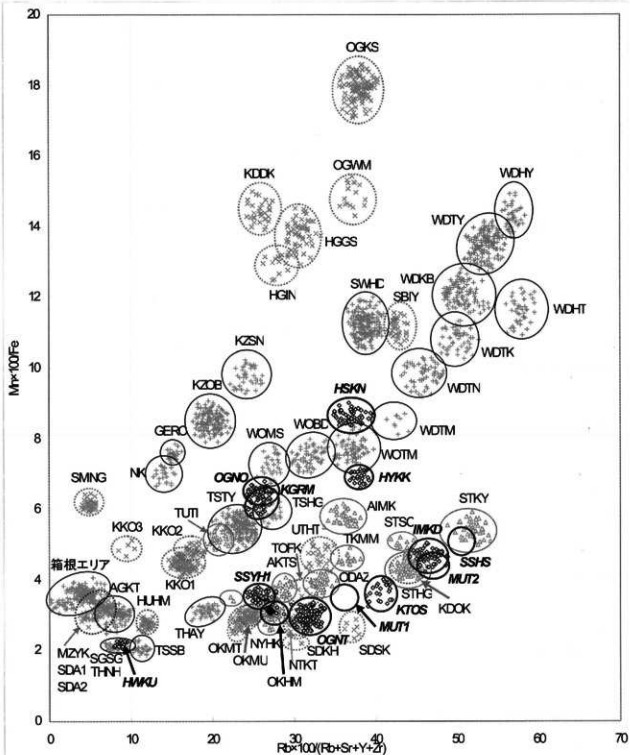


図 187 出土黒曜石判別図 (1)

ラス質安山岩の岩石学的特質に着目して、今日まで様々な理化学的分析方法を用いた産地推定が行われてきた。特に蛍光X線装置を用いた分析は、装置の操作や測定の前処理が容易である等、考古資料を扱うのに

適している。また、比較的短い時間で測定できるという点で、分析対象が出土遺物全般におよぶ石器研究においては非常に有効な測定手段といえよう。今回も、蛍光X線装置を用いた産地推定を行った。

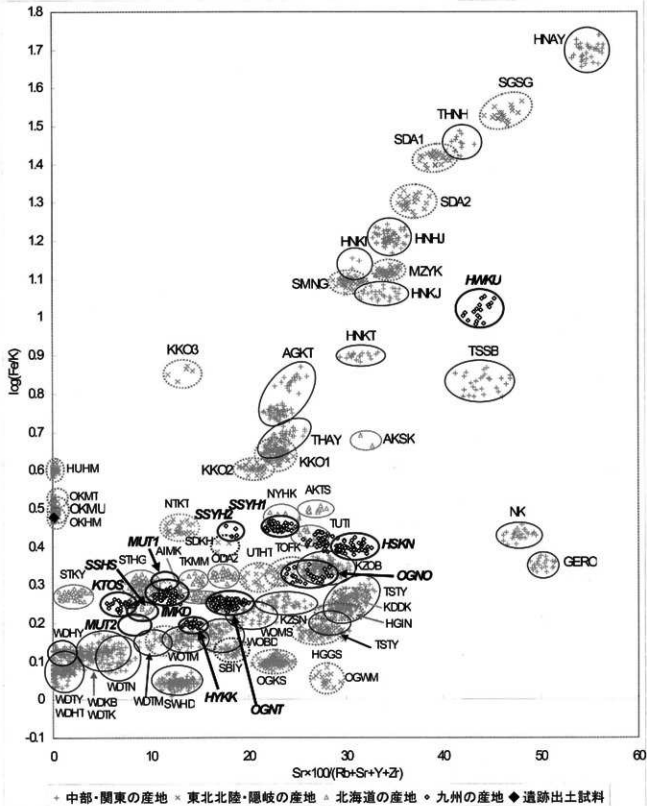


図 188 出土黒曜石判別図 (2)

表 37 産地原石判別群 (SEIKO SEA-21101.蛍光X線分析装置による)

都道府県	地図番号	エリア	判別群	原石採取地(分析数)	
北海道	1	白滝	八号沢群 黒曜の沢群	赤石川山頂(19)、八号沢頭頂(31)、八号沢(79)、 黒曜の沢(6)、楓加林道(4)	
	2	上士幌	三野群	上三ノ沢(16)	
	3	釧路	安住群	安住(25)、清水ノ沢(9)	
	4	旭川	高砂右群 春光台群	高砂台(6)、雨船台(5)、春光台(5)	
	5	名寄	布川群	布川(10)	
	6	新十津川	須田群	須田(6)	
	7	赤井川	曲川群	曲川(25)、土木川(15)	
青森	8	豊浦	豊泉群	豊泉(16)	
	9	木造	出来島群	出来島海岸(34)	
	10	深浦	八森山群	八森山公園(8)、六角沢(8)、岡崎浜(10)	
秋田	11	男鹿	金ヶ崎群 藤本群	金ヶ崎温泉(37)、藤本海岸(98) 藤本海岸(16)	
			月山群	月山荘前(30)	
山形	12	羽黒	今野川群	今野川(9)、大瀬川(5)	
	13	新津	金津群	金津(29)	
新潟	14	新発田	板山群	板山牧場(40)	
			甘湯沢群	甘湯沢(50)、板沢(20)	
栃木	15	高原山	七尋沢群 鷹山群 小深沢群 土屋橋北群 土屋橋西群 土屋橋南群 芙蓉ライク群 古峠群 ブドウ沢群	七尋沢(9)、自然の家(9) 鷹山(53)、小深沢(54)、東餅屋(36)、芙蓉ライク(87)、 古峠(50)、土屋橋北(83)、土屋橋西(29)、 土屋橋南(68)、丁字御旗(18)	
	16	和田(WD)	七尋沢群	THNH	七尋沢(9)、自然の家(9)
			鷹山群	WDTY	
			小深沢群	WDKB	
			土屋橋北群	WDTK	鷹山(53)、小深沢(54)、東餅屋(36)、芙蓉ライク(87)、 古峠(50)、土屋橋北(83)、土屋橋西(29)、 土屋橋南(68)、丁字御旗(18)
			土屋橋西群	WDTN	
			土屋橋南群	WDTM	
			芙蓉ライク群	WDHY	
			古峠群	WDHT	
	17	和田(WO)	ブドウ沢群	WOBD	ブドウ沢(36)、ブドウ沢右岸(18)、牧ヶ沢上(33)、 牧ヶ沢下(36)、高松沢(10)
			牧ヶ沢群	WOMS	
			高松沢群	WOTM	
	18	諏訪	星ヶ台群	SWHD SWTD	星ヶ塔第1鉱区(36)、星ヶ塔第2鉱区(36)、星ヶ台 A(36)、星ヶ台B(11)、水月公園(36)、水月公園 (13)、 星ヶ塔のりこし(36)
			冷山群	TSTY	冷山(33)、友草峠(26)、妻草峠東(33)、波ノ湯 (29)、 美し森(4)、八ヶ岳T(17)、八ヶ岳 9(18)、 双了池(34)
	19	箱根	双子山群	TSIG	双子池(26)
稲鉢山群			TSSB	稲鉢山(31)、亀甲池(8)	
芦ノ湯群			HNAY	芦ノ湯(34)	
20	箱根	畑宿群	HNJI	畑宿(71)	
		黒岩橋群	HNKI	黒岩橋(9)	
21	箱根	鍛冶原群	HNKJ	鍛冶原(30)	
		上多賀群	IINKT	上多賀(18)	
22	大城	柏峠群	AGKT	柏峠(80)	
		恩馳島群	KZOB	恩馳島(100)、長浜(43)、沢尻湾(8)	
23	神津島	砂礫崎群	KZSN	砂礫崎(40)、長浜(5)	
		久見群	OKHM	久見P-アイト中(30)、久見採掘現場(18)	
24	隠岐	筑前群	OKML	筑前海岸(30)、加茂(19)、厚浜(35)	
		柳群	OKMT	柳地区(16)	
25	不明	NK	中ッ原JG、5G(遺跡資料)、厚石産地は未発見		
25	大分	観音崎群	HSKN	観音崎	
		腰岳群	IMKD	大河内・竜門線、牧川	
26	伊万里	岳崎免1群	MUT1	岳崎免	
		岳崎免2群	MUT2	岳崎免	
		淀姫1群	SSYH1	淀姫神社	
27	松浦	岳崎免2群	MUT2	岳崎免	
		淀姫2群	SSY12	淀姫神社	
28	佐世保	針尾	SS, SX	中町、古里など	
		大崎群	KTOS	大崎海岸	
29	佐世保	針尾	SS, SX	中町、古里など	
		西小国群	OGNO	西小国	
30	川棚	大崎群	KTOS	大崎海岸	
		西小国群	OGNO	西小国	
31	小国	西小国群	OGNO	西小国	
		白浜群	KMSH	白浜林道	
32	球磨	桑ノ木群	HYKK	桑ノ木津留	
		日東	OGNT	日東	
33	人吉	日東	OGNT	日東	
		五女木A,B,C,D地点	OGNT	五女木A,B,C,D地点	
34	大分	五女木A,B,C,D地点	OGNT	五女木A,B,C,D地点	
		猿猴A,B地点	OGNT	猿猴A,B地点	
35	大分	上ノ島A,B,C地点	OGNT	上ノ島A,B,C地点	
		上ノ島A,B,C地点	OGNT	上ノ島A,B,C地点	
36	大分	上ノ島A,B,C地点	OGNT	上ノ島A,B,C地点	
		上ノ島A,B,C地点	OGNT	上ノ島A,B,C地点	
37	大分	上ノ島A,B,C地点	OGNT	上ノ島A,B,C地点	
		上ノ島A,B,C地点	OGNT	上ノ島A,B,C地点	
38	大分	上ノ島A,B,C地点	OGNT	上ノ島A,B,C地点	
		上ノ島A,B,C地点	OGNT	上ノ島A,B,C地点	
39	大分	上ノ島A,B,C地点	OGNT	上ノ島A,B,C地点	
		上ノ島A,B,C地点	OGNT	上ノ島A,B,C地点	
40	大分	上ノ島A,B,C地点	OGNT	上ノ島A,B,C地点	
		上ノ島A,B,C地点	OGNT	上ノ島A,B,C地点	

2. 測定方法

蛍光X線法を用いてガラス質安山岩（サヌカイト）の正確な元素分析値を得るには、内部が均質で表面形態が一樣な試料を作成し、検量線法などによって定量的に分析を行うのが一般的である。そのためには試料粉碎してプレスしたブリケットを作成するか、もしくは溶解してガラスビードを作成する必要がある。しかし、遺跡から出土した石器は、通常、非破壊での測定が要求されるため、上記の方法をとるのは困難である。そのため、石器に直接X線を照射する半定量分析が行われている（薬科・東村1988、山本1993）。このよう

な直接照射によって発生する蛍光X線の強度そのものは、試料の状態や装置の経年変化によって変動する可能性が高いが、特定元素の強度同士の比を採った場合はその影響は小さいと考えられている。今回は測定強度比をパラメータとして産地推定を行うこととした。

3. 試料の前処理

比較用の産地採取原石については必要に応じて新鮮な破断面または研磨面を作成し、超音波洗浄器によるクリーニングを行った。一方、遺跡出土石器については、エアブラシを用いて風化面を除去して測定面とし、超音波洗浄器によるクリーニングを行った。ガラ

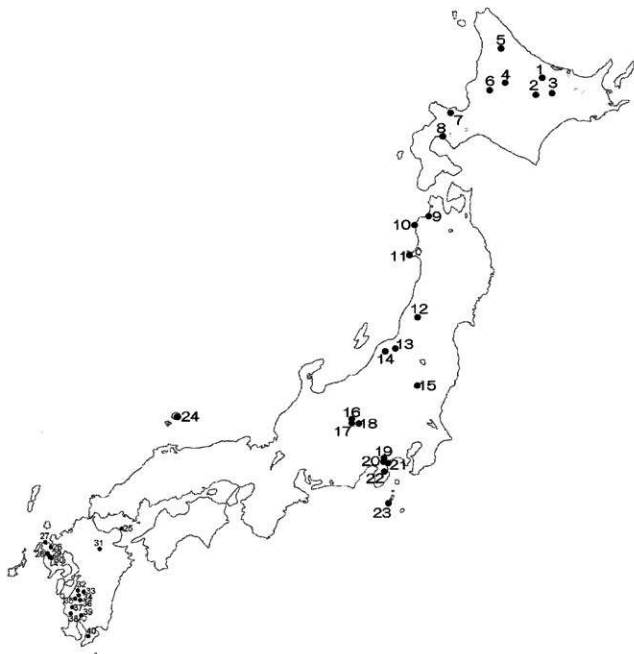


図 189 黒曜石産地位置図

ス質安山岩（サヌカイト）は、黒曜石などと比較して表面の風化が著しく、表皮面への直接照射では安定した測定値が得られないためである。

4. 装置・測定条件

蛍光X線の測定にはエネルギー分散型蛍光X線分析装置JXS-3201（日本電子データム製）を用いた。X線管球はターゲットがRh（ロジウム）のエンドウインドウ型を使用した。管電圧は30KV、電流は抵抗が一定となるよう自動設定とした。X線検出器はSi（ケイ素）/Li（リチウム）半導体検出器を使用した。試料室内の状態は真空雰囲気下とし、X線照射面積は32mmとした。測定時間は、産地採取原石が600sec、遺跡出土試料が300secである。測定元素は、主成分元素はケイ素(Si)、チタン(Ti)、アルミニウム(Al)、鉄(Fe)、マンガン(Mn)、マグネシウム(Mg)、カルシウム(Ca)、ナトリウム(Na)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の計9元素、微量元素はルビジウム(Rb)カトリウム(K)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の計4元素の合計

13元素とした。また、X線データ解析ソフトには、明治大学文化財研究室製；X-JSX-1.03を使用した。

5. 石器の産地推定

ガラス質安山岩（サヌカイト）はケイ酸、アルミナ等を主成分とするガラス質火山岩であるが、その構成成分は産出地による差異が認められる。黒曜石の場合、微量元素Rb、Sr、Y、Zrでの産出地ごとの組成差がより顕著であるが（望月1994、1996）、ガラスビートを用いた定量分析の結果（長井ほか、2005）などから、ガラス質安山岩ではむしろTi、K、Feなどの主要元素の組成差による判別が有効と考える。今回はK強度/Ti強度、Fe強度/Ti強度を用い産地推定作業を行った。Al強度/Si強度、K強度/Si強度を用い産地推定作業を行った。Al強度、Si強度をパラメータに使用したのは、K、Ti、Fe強度のみでは、関東地区の一群と九州地区松浦横辺田系とを分別できないためである。ただし、Si、Alのような軽元素は風化の影響を受けやすく安定性が低いため、基本的には、K強度/Ti強度、Fe強度/Ti強度を

表 38 袖ノ川イモタ遺跡出土ガラス質安山岩製石器の産地推定結果

試料No.	出土位置・層位	測定値				産地推定結果
		Al/Si	K/Si	K/Ti	Fe/Ti	
SMN1-001	A区 縄文時代包含層下層	0.08244	0.05392	1.41589	19.99506	二上山系
SMN1-002	A区 縄文時代包含層下層	0.08581	0.05811	1.42733	20.04923	二上山系
SMN1-003	B区 縄文時代包含層	0.07984	0.05979	1.45707	19.94074	二上山系

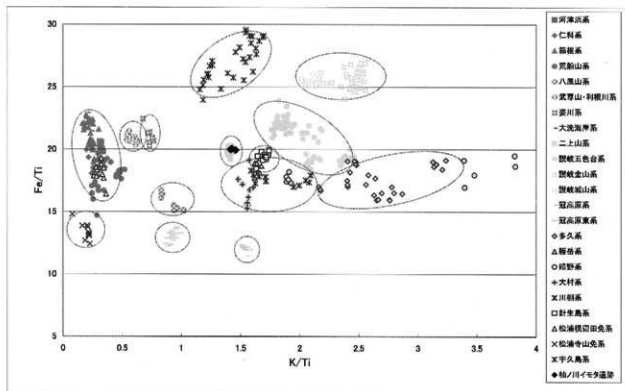


図 190 袖ノ川イモタ遺跡の判別図 (K/Ti × Fe/Ti)

判別の主軸とし、Al強度/Si強度、K強度/Si強度は補助的な判定基準とした。

6. ガラス質安山岩（サヌカイト）原産地の判別

産地推定の基準として、判別図を作成した。判別図は、視覚的に分類基準が捉えられる点、および判定基準が分かりやすいというメリットがあり、また測定結果の提示に際し、読者に理解しやすいという点でも有効である。まず、各産地採取試料（基準試料）の測定データを基に二種類の散布図グラフ（K/Ti vs Fe/TiとAl/Si vs K/Si）を作成し、各産地を同定するための判別域を決定した。次に遺跡出土資料の測定結果を重ね合わせて判別を行った。

また、各ガラス質安山岩（サヌカイト）の産出地や名称については別稿（杉原・小林、印刷中）を参照していただきたい。

7. 石器の産地推定結果

測定を行ったのは、奈良県杣ノ川イモタ遺跡A・B区縄文時代ガラス質安山岩（サヌカイト）製石器3点で、いずれも二次加工が施されていない剥片である。全点が判別可能であり、SMN-002が縄文時代早期、SMN-001、SMN-003が中期～後期の試料である。

測定結果の判別図を示す（図190, 191）。いずれも二上山系と推定できる。遺跡と原産地の位置関係から、

近在産地の石材が使用されていた、ということが分かる。図191において、遺物は二上山系の一群からやや外れるが、上述したように風化が原因と考えられる。今回の測定はごく少数の遺物に限られているため、遺跡の性格について言及することは難しいが、当該遺跡とその周辺一帯では、長期間近在産地石材が使われ続けていたということは確かであろう。

（明治大学 杉原重夫・鈴木尚史・太田陽介・金成太郎）
《引用・参考文献》

杉原重夫・小林三郎（印刷中）『文化財の自然科学的分析による文化圏の研究—ガラス質安山岩産出地データベース—』

長井雅史他（2005）『関東周辺および西日本で産出するガラス質安山岩の波長分散型蛍光X線装置による全岩定量分析』『日本文化財科学会第22回大会研究発表要旨集』260-261

望月明彦他（1994）『遺跡内における黒曜石製石器の原産地別分布について—沼津市土手上遺跡BBV層の原産地推定から』『静岡県考古学研究』26, 1-24

望月明彦（1996）『蛍光X線分析による中部・関東地方の黒曜石産地の判別』『X線分析の進歩』28, 157-168

山本薫（1993）『黒曜石安山岩製石器の原材原産地推定方法について』『筑波大学先史学・考古学研究』4, 45-69

高村哲男・東村武信（1988）石器原材の産地分析。鎌木義昌先生古稀記念論集 考古学と関連科学, 447-491

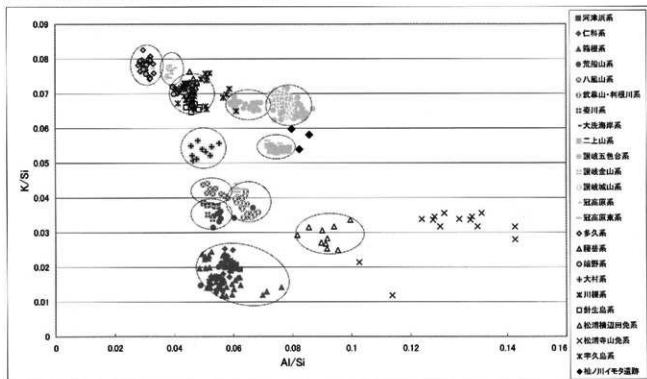


図191 杣ノ川イモタ遺跡の判別図 (Al/Si × K/Si)

第5章 総括

第1節 遺跡の調査成果

I. 別所下ノ前遺跡の調査成果

別所下ノ前遺跡では、試掘も含めて4次にわたる調査を行ない、推定される遺跡のおよそ半分程度の面積を発掘することができた。特に遺跡の東半分は、道路部分を除く微高地上のほぼ全域を結果的に調査したことになる。遺跡の形成時期は、縄文時代と平安時代末～鎌倉時代（12～13世紀）の2時期に大きく分かれることが判明した。また具体的な内容は不明ながら、古墳時代の遺物が遺跡周辺で局地的に分布する状況を取取ってきた。

遺跡がある微高地Aを地形的にみると、尾根裾と連続する一段高い西側と大きく広がりながら緩やかに下がる東側に区分できる。その間は一度くびれて狭まり、第19発掘区の見所からすれば遺跡の空間地となっているようである。

縄文時代 微高地A上の起伏に応じて東西2箇所遺跡が形成されている。どちらにも遺物包含層が広く堆積しているが、顕著な遺構は少ない。縄文時代早期の遺物は微高地A東側の北半部に集中しており、低地に近いところから遺跡の形成が始まっている可能性がある。微高地A東側の南半分は旧流路2に相当し、縄文時代早期以降に主として砂礫が堆積し形成された高まりであることが判明した。なお、旧流路2の肩部に近い位置で神宮寺式段階と考えられる石敷炉1基を検出しているが、近隣の桐山和田遺跡や北野ウチカタピロ遺跡などで早期の類例が多数報告されており、何らかの関連があるかもしれない。

微高地Aの西側では、縄文時代中～後期の遺物が比較的多く認められる傾向があるが、そこでは顕著な遺構をほとんど確認できなかった。粗製土器ばかりで遺物量も多くはなく、比較的短い期間だけ活動したのだろう。

なお、西方の微高地Dでは縄文時代早期および中期末～後期前葉の遺物包含層を確認しているが、微高地Aのそれとは連続性がなく、区別して考えなくてはならない。A・B発掘区の遺物包含層は局地的に分布し、流土内に遺物が散在して包含される状況を取取

きた。したがって、調査地内に遺跡本体を認めるのは難しく、現時点では遺物散布地とするのが妥当と思われる。遺跡の認定は今後の周辺調査を待って判断することにしたい。

古墳時代 古墳時代の遺構は検出できなかったが、遺物が少量ながら局地的に出土する点を注意しておく必要がある。D発掘区から上師壺釜1点・高杯1点、C発掘区から滑石製勾玉1点が単独的に出土している。また、西方のB発掘区周辺からも庄内～布留式土器・須臾器杯身が少量出土した。このように古墳時代の遺物が散在して少量出土する状況は、袖ノ川イモタ・キトラ遺跡でも認められた。その理山はよくわからないが、滑石製勾玉のような祭祀遺物が含まれている点から考えると、不定期的に山間部の谷間へやってきて何らかの祭祀行為を行っていた可能性を考慮できるのかもしれない。

平安時代末～鎌倉時代（12～13世紀） 掘立柱建物・掘立柱塀・土坑・溝などの遺構がある。これらの遺構はD・E発掘区のみで検出されており、一連の遺跡であることは明らかである。建物跡の存在から、12～13世紀の屋敷跡がここに存在したことが判明した。ただし、13世紀末には廃絶したとみられ、14世紀まで遺跡が続かない。したがって、背後の尾根上に築かれた別所城より先行する遺跡ではあるが、別所城とは時間的な連続性を認め難いので、両者の間に系譜的な関連性を想定することはできないだろう。それに代わって、別所辻堂遺跡で14世紀に屋敷跡が整備される点を考慮すれば、主要な居住地が南へ遷移した可能性が高いと推測される。

以上のように、別所下ノ前遺跡では縄文時代に遺跡が形成されて、その後断絶する。古墳時代の遺物も局地的に少量出土するが、長期的な遺跡の存在を推測させるほどの量ではない。次に遺跡が形成され始めるのは、平安時代末（12世紀）頃であったと推測される。古代において木材資源の調達を主な生業とした柚人たちが、荘園制度の中に組み込まれていく過程で、周辺谷部の水田化を推し進めた。これに起因して、別所町内でも生活領域が徐々に確立されていったことを住居跡などの遺構は示しているのだろう。

II. 別所辻堂遺跡の調査成果

別所辻堂遺跡は、段丘状を呈する微高地D上に形成されている。縄文時代早期～前期初頭および中期～後期の遺物包含層は、その東側縁辺部に沿って幾つか形成された小さな谷状地形などに遺存するのみであったが、広域的に分布する点からみて本来は遺跡一帯に縄文時代の居住域が広がっていたようである。遺物包含層だけが点在して残るのは、中・近世の開発・造成によって旧地形が大きく改変された結果、遺跡が広範囲的に削平されてしまったからであろう。

次にここで遺跡が形成され始めるのは、12世紀中葉頃である。ただし、その頃の遺物はD発掘区から少量出土したに過ぎない。庭園風石組みとこれに附属する溝S D04・05や建物S B02・土坑S X02が最も古い中世遺構と考えられる。S D04・05は、あたかも鍾水のように庭園風石組みへと水を流す機能を有している。場所が極楽寺の近くであり、そこに平安時代末期の仏像が伝えられている点を勘案すれば、寺の成立が12世紀までさかのぼる可能性を示唆しているようで興味深い。庭園風石組みからは、真言密教の仏前作法に用いられた六器椀と考えられる瓦器小椀（鳥羽

2007）が出土しており、極楽寺の前身が真言密教と関わる施設であった可能性がある。また、土坑S X02には火を焚いた痕跡が認められ、何らかの宗教行為が周辺で行われていたことも想定できる。そして、庭園風石組みは出土土器から14世紀中葉頃まで存続したと考えられる。

辻堂遺跡で遺構が多く構築されるのは14世紀前葉に入ってからである。この点については、別所氏の動向と密接に関連している可能性があり、残された史料から少し検討しておく必要がある。別所半右衛門正久の覚書（1661年）によれば、別所氏の始祖は山田庄主の二男で別所上ノ辻の本領に居住したとされる。その時期は記されていないが、その子孫である別所入道賢阿が応永（1394～1427年）の頃に袖ノ川を開いて本領に加えたというからそれより前のことになる。

山田庄は嘉禄2年（1236年）の春日社領注園田地寄進状にみえるのが最も古いのが、これが後の大乘院領山田上下庄と同一であるとすれば、本来は春日社領であったことになる。貞和3年（1347年）の大安寺領反段算用状及び応永6年（1399年）の大安寺段米並田数注進状には山辺郡山田上下庄がみえ、後者には大乘院方とある。15世紀後半の『三箇院家抄』には上山田庄・下山田庄と記されているから、山田庄は後に2分割されて管理されていたらしい。山田庄は後に天理市山田町一帯と推定され、山田氏はここを本拠地として勢力を得た大和武士であった。戦国期の春日社進官領大和諸郷納高帳に「山田方 上山田領合四石七斗三升、別所領合式石四斗式升、下山田領合老石九升、ソマノカワ領合式斗一升」とあり、別所と袖ノ川は当時共に山田氏の支配下にあったことがわかる。

朝倉弘氏によれば、15世紀に於いて山田氏は大乘院方国民の山田・山田北、一乗院方衆徒の山田・山田戊亥の四家に分かれており、鎌倉時代以来山田家に相互対立があつて分裂したのではないかと推測されている（朝倉1993）。しかし、山田方に属した4箇所の領地と山田四家が数の上で合致する点は注目する必要がある。

山田四家のうち、同姓の山田両家は山田上下庄に対応するとみるのが無難である。本拠地の天理市山田町には現在も上山田・下山田の地名が残り、その位置関係は西が上・東が下となっている。その中間付近には

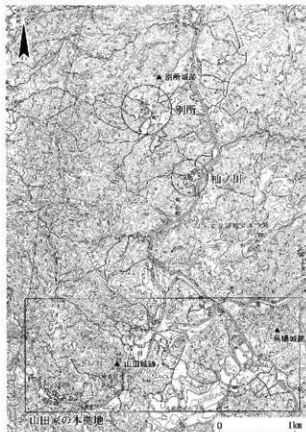


図 192 山田家本拠地と別所・袖ノ川の位置関係 (1/50,000)

拠点となる山田城があり、その東方約2.2kmに新造された馬場城は本拠地の東限を示している。

一方、他の両家は北・戌亥という方角を付けて従来の山田家と区別しており、分家的な側面が強い。ただし、天理市山田町一帯のすぐ北側には顕著な集落がなく、それをどの地域に該当させ得るかが問題となる。そこで注目したいのが、山田町と袖ノ川町・別所町の位置関係である(図192)。山田町一帯からみて北に袖ノ川町、その戌亥の方角に別所町があり、それぞれ山田北・山田戌亥に相当する可能性は十分に考慮できる。これに別所半右衛門正久の覚書に合わせて考えると、14～15世紀にかけて山田氏が北側へ勢力範囲を伸張させ、別所と袖ノ川を取り込んでいった過程を矛盾なく説明できるように思われる。すなわち、勢力範囲の伸張過程で分家した山田家が、やがて当時の勢力争いに巻き込まれてやむを得ず対立関係を生じさせたのだろう。別所城はその自立性を顕在化させた記念物として今も良好に残っている。袖ノ川城については、『郷土記』に「袖川平城、城主名波与左衛門」とあり、その存在を推測させるものの位置は不明である。

以上のような理解が妥当であるとすれば、14世紀以降に増加する遺構は別所氏と関連して形成されたと想定することができる。特に別所氏初代(山田庄主の二男)の居住地が別所上ノ辻であったという点は非常に重要な手掛かりとなる。辻堂遺跡周辺にはその名の通り辻堂という字名が残っており、集会所前から極楽寺(堂)へ至る道路の交差点が本来の辻で、現在も鳥居が立っている。一方、下ノ前遺跡が所在する別所城下の一番にはシモ・シモノ前という字名が残っている。『東山村史』のよれば、永禄10年(1567年)と天明7年(1786年)の記録に残る屋敷名・地名が合致する場合が多く、「明治10年(1877年)の戸籍名簿には天明7年の屋敷名がそのまま苗字として記載された」と記されている。そして、現在の大門部は「下」であり、上西部は辻堂近くの南西側に今も位置する。したがって、別所城跡がある集落の北辺が下であり、辻堂の周辺が上と呼ばれていたことは間違いない。上ノ辻が辻堂遺跡内に位置したと推測できる蓋然性は極めて高い。このような理解が妥当であるとすれば、B発掘区で確認した14世紀の屋敷地北辺に限る2列の石垣は、時間的にみても上ノ辻に存在したと伝える別

所氏初代の屋敷跡の一部と考えて大過ないだろう。

A発掘区では2段に造成された遺構面のうち、上段からのみ14世紀後半以降の遺構を検出し、西側からの排水路となる溝の東端(上段の端部)には濶岸用の石組みで補強が行われていた。このような状況からみて、直線的に造成された段差の部分が屋敷地の東限に相当すると思われる。この段差を北側へ石垣2を東側へ延長させれば、ほぼ直角に交わる。石垣2の方向に沿った地割が道路の西側に遺存しており、西限及び南限は不明ながら、南北78m以上、東西68m以上の方形区画を有した屋敷跡であったと想定できる。なお、A発掘区西側の道路建設時に南北方向の石垣を壊したと伝えられることから、北辺と共に東辺にも本来2段の石垣が存在したのかもしれない。屋敷地内からは多くの遺構を検出したが、調査が屋敷地縁辺部に限られていたためか、遺物跡は見つかっていない。土坑は縁辺部に沿って構築される傾向があり、多量の糞を集積する土坑も認められたが、その性格は不明である。

Ⅲ. 別所大谷口遺跡の調査成果

別所大谷口遺跡は、各時代で遺跡の分布が異なるが、縄文時代、古墳時代、平安時代後期の遺跡である。

A発掘区では、明確な縄文時代の遺構は認められなかったが、微高地上に縄文時代遺物包含層が広く堆積することを確認した。遺物包含層は発掘区北部と南部の大きく2つに分かれ、それぞれ上下2層ある。遺物は出土分布からいずれも2次堆積したものと考えられるが、北部では多数の神宮寺式土器と若干の早期末～前期初頭・中期末～後期前葉の土器、南部では早期後葉・中期末～後期前葉の上器が出土した。A発掘区内において、東へ下降するほど縄文時代の遺物出土量が減少していく傾向を看取できたが、この傾向は試掘調査結果から想定できる遺跡全体での縄文時代遺物包含量の多寡とも概ね合致するように思われる。したがって、縄文時代における遺跡の中心は、A発掘区よりもさらに西側の小高い部分に想定できるだろう。

古墳時代の遺構は土坑1基を確認したのみであり、その広がり不明である。ただし、試掘調査成果からみると遺構密度は極めて低いだろう。

平安時代後期になると、遺物包含層が形成されると共に孤立柱建物がつくられる。その始まりは10世紀

中葉頃と考えられるが、当該時期の遺構は今のところ確認できていない。しかし、11世紀後半の建物跡を第6発掘区で確認しているの、その近くに当初の建物跡も存在していた可能性が高いと思われる。11世紀後半の掘立柱建物跡は、別所町内で今のところ最古の住居跡であり、少し遅れて次に別所下ノ前遺跡で12世紀に掘立柱建物がつくられる。このような開発の時間差が生じた理由を少し考えてみよう。古代において木材資源の調達を主な生業とした柚人たちは、荘園制度の中に組み込まれていく過程で周辺谷部の水田化を推し進めていったと推察される。その拠点の位置にあったと想定できる水間袖からみて、大谷I遺跡はまさに別所の入口に相当する位置を占めている。そして、そこを足掛りとしつつ徐々に奥（南側）へと開発を進めたことに起因するのではないと思われる。

IV. 水間遺跡第8・9次調査の成果

水間遺跡は水間町内で最も大きく開けた谷間のほぼ全域に広がる複合遺跡であり、縄文時代早期から人々の生活領域として利用されてきた。主要地方道奈良名張線及び国道369号線以南で行なった第1～7次調査によって、遺跡中央部の様相がこれまでにある程度判明している。今回の調査では、遺跡北端部の様相を確認することができ、遺跡全体の解明につながる重要な成果を幾つか得た。

縄文時代の調査成果としては、L発掘区で早期末前期初頃の埴居式土器を含む遺物包含層を確認した点が挙げられる。田原東地区内の調査で縄文時代早期の東海系土器は幾つか出土しているが、早期末前期初頃の資料は希少であり、僅かながら重要な資料となった。

L発掘区の調査によって、日当たりの良い南向き斜面に飛鳥から奈良時代（7～8世紀）にかけての建物跡が点在することが判明した。これらの建物跡はいずれも竪穴式であり、第6次調査で確認した打滝川沿いの微高地上に位置する掘立柱建物を主体とする建物群とは構造的に異なっている。在地に生活基盤を置きつつ臨時的に柚仕事に従事した雇下などの住居ではないかとも想定できる。

平安時代（9～12世紀）になると、ほとんど遺構がみられなくなってしまう。ただし、試掘調査第74発掘区において調査地北東側の谷底埋土（暗茶褐色

腐植土層）から多くの割り裂いた板材が平安時代の上器片と共に出土している。その位置はN発掘区のすぐ南西側であり、N発掘区でも12世紀の上器が出土している点を考慮すれば、番上屋敷跡の周辺で小規模な木材生産がその頃に行なわれていた可能性を推定することもできる。

鎌倉時代には、調査地全体から13世紀後半頃の上器が出土し、遺物量が最も多くなる傾向を看取できる。したがって、この時期に大きく周辺の再開発が進んだことが推測される。L発掘区では、尾根上に掘立柱建物・掘立柱列がつくれ、土坑や溝を掘削して連結させるなど、体的な改変が行なわれている。

16世紀になると調査地北西の尾根頂部に水間城が築かれ、周辺の尾根上や中腹に寺跡や屋敷跡がつくられていった。おそらく、このような新たな開発との関連で谷部の水路が整備されてくると思われる。M発掘区のSD05では杭で護岸し整備される時期が認められ、長期的に利用されていたらしい。埋没した谷部の流水を下方へ迂回させる機能を有した水路ではなからうか。N発掘区のSD11も同様であろう。

以上のような調査成果と北尾根を隔てた地点の東西に細長い谷間で平成16年度に行なった試掘04-15の所見から、水間遺跡の北限は尾根⑦の南斜面までに概ね収まると推測することができる。したがって、水間遺跡第8・9次調査により遺跡北限の様相がある程度明確化したと言えるだろう。（鐘方・大窪）

第2節 水間遺跡の検討

I. 水間遺跡の変遷

水間遺跡は田原東地区において最も大きい複合遺跡である。縄文時代早期から始まる遺跡の形成は、縄文時代晩期から弥生時代中期に一旦途切れるものの、弥生時代後期以降より現在まで連続と続いている。ここでは、これまで調査回数ごとに報告してきた水間遺跡の概要を全体的に再度整理し、その変遷を考古学的に述べておきたいと思う（図193・194）。

1. 縄文時代

縄文時代の遺跡は、a～dの4地点で確認している。その分布はa～cの北半部域とdの南部域に分かれるが、その様相は大きく異なっている。日当たりの

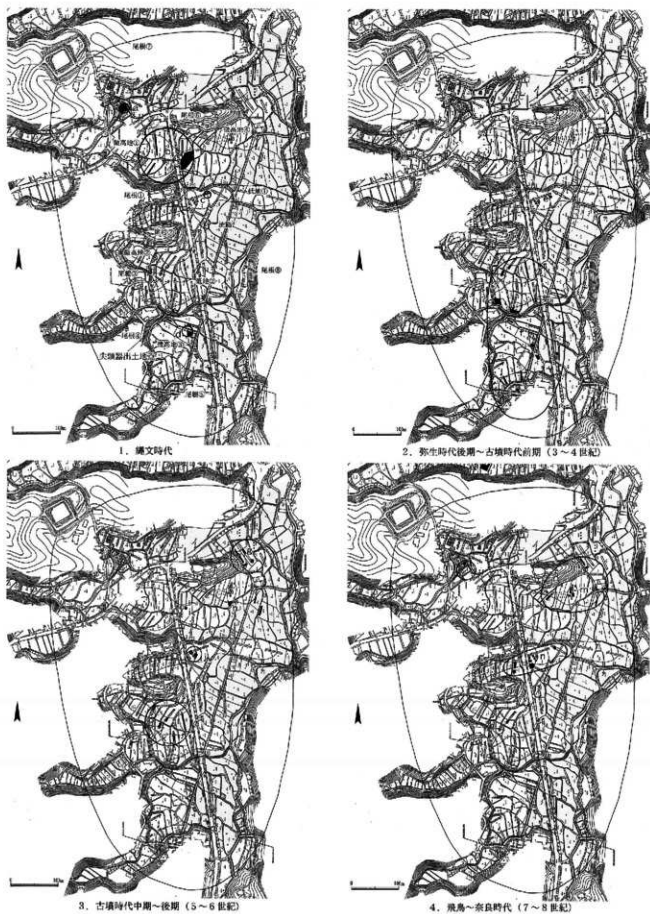


図 193 水間遺跡変遷図①

よい北半部域では、縄文時代早期から後期の長期間にわたって人々が断続的に活動し、特にb地点では広域的で規模の大きい遺跡が形成された可能性が高い。第2発掘区では船元式期の住居跡周壁溝ではないかと思われる遺構も検出しており、K発掘区の調査成果からみてもb地点が縄文遺跡の中心部となろう。a・c地点はそれと一連の遺跡になる可能性も考えられる。

一方、南部域のd地点では縄文時代早・中期の遺物包含層が局地的に確認できる程度であり、水田造成時の削平を考慮しても遺跡の規模は小さいと判断せざるを得ない。なお、D発掘区から尖頭器2点が出土しているため、南部域では縄文時代早期まで遺跡の形成開始期がさかのぼる可能性がある。

2. 弥生時代後期～古墳時代前期

これまでの調査では、縄文時代晩期から弥生時代中期の遺物が出土していない。次に多くの遺物が出土するようになるのは、弥生時代後期以降である。

弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡は南半部域（f区域）にほぼ限られる。遺物のほとんどが流路内から出土しており、遺構としては土坑・溝を幾つか確認できたに過ぎない。遺物の出土量は比較的多く、土器の主体は布疋式土器である。

一方、e地点では弥生土器広口壺1点が出土した溝1条を局地的に確認しただけで、その広がり不明である。後に方墳がつくられるような環境であった点などを考慮すると、方形周溝墓の一部に相当する遺構であるのかもしれない。

3. 古墳時代中～後期

古墳時代中期になると、遺跡の分布域が北側へと移りだすのが大きな特徴である。北東部のg地点では尾根先端部に湧水施設が整備され、滑石製品や手づくね土器を使用した水場の祭祀が始まる。第39発掘区で検出した掘立柱建物は、この祭祀場に関わる建物群の一部となる可能性がある。また、h・i地点でも手づくね土器が出土しており、周辺部でも一連の祭祀が行われていたことが推測できる。

中央部のj地点には古墳が築造された。方墳1基と埋葬施設2基を確認できたに過ぎないが、7世紀以降に周辺が大きく削平されている点を考慮すれば、本来さらに多くの古墳が密集していたであろう。現在民家が建っている西側の尾根上にも古墳が築かれていた可

能性を想定できる。

k地点では流路内から少量の遺物が出土するだけであり、古墳時代前期の遺跡が一部で継続していたことを間接的に示すのだろう。

4. 飛鳥～奈良時代

飛鳥～奈良時代の遺跡は北半部域に限定されるようになり、南部域では当該時期の遺物がほとんど出土しなくなる。また、遺構分布や構成内容にも明らかな差異が表れている。

尾根の南斜面に位置するl地点では飛鳥時代と奈良時代の竪穴建物をそれぞれ1棟分確認した。ただし、飛鳥時代の竪穴建物は規模が非常に小さく、通常の住居跡とは異なると思われる。それと比べて奈良時代の竪穴建物は規模も大きく、カマドを3度も造り替えるなど長期間にわたって使用された痕跡が認められた。調査地点は南斜面地の最も上方に相当し、本来はここから下に幾つかの竪穴建物跡が点在していたものと想定される。

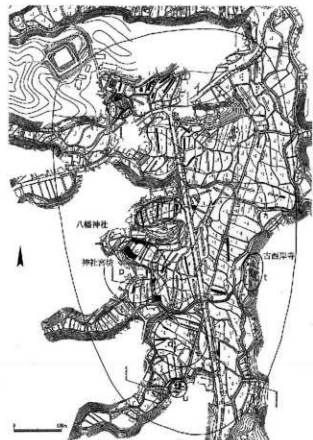
一方、m地点には奈良時代の掘立柱建物群があり、竪穴建物は釜屋（大炊屋）と推定できる小型建物1棟のみである。倉庫とみられる総柱建物が付属する幾つかの建物群に本来分かれていた可能性が高い。l地点の竪穴建物群とは構造的な格差が明確に看取できる。なお、今のところm地点では飛鳥時代の遺構を確認できていない。

それらに比べてn地点の大型掘立柱建物群は、総柱建物群が柱筋を揃えて規則的に配置されるなど、一般的な住居とは大きく異なる特徴を有している。また、近くの谷部からは多量の木屑と木器未製品が出土しており、周辺で木器製作が行われていたことも判明している。特に曲物作りが行われていた点は重要で、専門的な技術を有する司工（権工）がここへ向かって来て製作に従事したことがあったと想定できる。遺跡が水間軸推定地に所在する点を考慮すると、それが山作所の関連施設である可能性は極めて高い。

遅くとも奈良時代には、3つの地点で異なる構造の建物群が並存していたのは間違いない。n地点の大型掘立柱建物群が山作所の関連施設とすれば、m地点の掘立柱建物群は外来を含む山作所常勤者の居住域、l地点の竪穴建物群は在来の臨時的な雇工などの居住域に相当するのではないかと推測できるだろう。



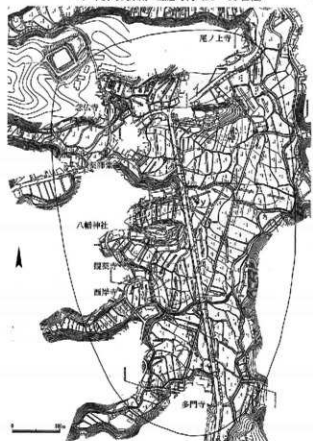
5. 平安時代 (9~11世紀)



6. 平安時代末期~鎌倉時代 (12~13世紀)



7. 室町~戦国時代 (14~16世紀)



8. 江戸時代 (17~19世紀)

図194 水間遺跡変遷図②

5. 平安時代前～後期（9～11世紀）

奈良時代の建物群は平安時代まで存続せずに廃れ、平安時代の遺物分布域も大きく変わってしまう。主な遺物分布域は3つあり、それ以前と比べて西側のより標高の高い場所へ移る傾向を看取できる。o地点はm地点のすぐ西側にあたり、建物などの遺構を確認してはいないものの、奈良時代の居住域が西側へと移動したことを反映しているのではないと思われる。p地点では、尾根③の周囲に形成された遺物包含層を発掘したと考えられ、尾根③上に遺構が広がっている可能性を強く示唆する。ここには八幡宮宮坊（観葉寺）の庫裡跡（坊屋敷）や西岸寺があり、古くから社寺の領域となっていたことも十分に考えられる。

また、q地点は古墳時代中期以降の利用が途絶えていた南側の微高地③上に位置する。10世紀後半～11世紀初頭頃の廂付掘立柱建物1棟を確認しており、そこが居住域として再開されたことがわかる。

6. 平安時代末～鎌倉時代（12～13世紀）

12世紀になると、遺跡内で広域的に遺物が出土するようになり、その傾向は13世紀まで続く。このような特徴は花粉分析から推定された鎌倉時代以降の水田域拡大・畑作顕在化と照葉樹林の大幅減少とも関連する現象と考えられる。

p・q地点が平安時代から継続して利用されるのに対して、r・s・t・uの4地点で新たに遺構が形成されてくる。特に、丘陵上の土地利用がこの時点で明確に顕在化するのとは大きな特徴であろう。久安6年（1150年）の水間袖内検帳案からこの頃には八幡神社が確実に存在した。

r地点では掘立柱建物・土坑・溝が掘削されて奈良時代以来再び居住域となる。s地点では谷部内で局地的に集石遺構がつくられるが、その性格はよくわからない。t地点は、これまで利用されてこなかった打滝川東岸の丘陵斜面地である。発掘区が小さいために不明点が多いものの、12世紀の整地土によって造成された平坦面があり、遺物包含層からは12世紀の土器と共に下駄も出土している。t地点周辺に古西岸寺という字名が残っており、現在の西岸寺は本来ここから移転されたという。この伝承に依拠すれば、t地点が古西岸寺跡である可能性も十分に想定できる。

u地点の遺構形成も古墳時代前期以来再び始まる。

G発掘区内では、丘陵上の中央部から土坑の掘削が始まっている。

7. 室町～戦国時代（14～16世紀）

遺跡北西隅の丘陵頂部に水間城が築造される。西側丘陵上や裾に念仏寺（下寺）・薬師堂が建ち、西岸寺が移転してくるのもこの頃であろう。u地点は継続して利用され、遺構の掘削は尾根周辺部にまで及ぶ。x地点は丘陵先端の東向き斜面地で、南北に並ぶ集石土坑などが検出された。火葬墓群と考えられ、現在の土葬と異なる点が興味深い。

このように遺構の分布が北から西側の丘陵上にほぼ集まるのに対して、w地点では微高地上に掘立柱建物・土坑が認められた。ただし、w地点の遺構はすべて14世紀に構築されており、丘陵上の遺構よりも相対的に古くなる。したがって、それは微高地上に形成された最後の居住跡と位置付けることが可能である。

8. 江戸時代

丘陵部を除くほとんどが水田化されて、現在とほぼ同じ景観になっていると思われる。また、丘陵斜面の一部にまで耕作地の拡大が及ぶ。y地点で集石墓I基を確認している。水間上村且那寺の多聞寺跡に寛永年代の碑銘、水間下村且那寺の尾ノ上寺跡に承応4年（1655年）の六字名号碑が残る。両寺は江戸時代になってから建てられたものだろう。

水間遺跡では、以上のような変遷が推定できる。谷部に近い微高地から遺跡の形成が始まり、徐々に西側の丘陵上へと遺跡が移行していく傾向が看取される。12世紀頃に広域的な土地利用が進められ、14世紀を最後に微高地上で居住域が認められなくなる。この背景には、低地の田畑拡大と高地の居住域開発が中世に大きく進行したことが要因となっているのだろう。

II. 水間袖の糸里と変遷

天喜4年（1056年）に東大寺政所が水間松尾袖の庄司と住民に下した文書（東大寺下文案）によって、水間には聖武天皇が東大寺に施した袖があり、東大寺別院の新薬師寺が修法料の板・雑木や修造料の木材を得ることになっていたことがわかる。水間袖の位置は、現在も地名が残る水間町内に推定することが可能であり、発掘調査成果から飛鳥時代の7世紀後半には袖が成立していたと考えられる。そして、木材が

（備考）
水間

大和國水間柚内檢帳案（東大寺藏書/四十五）

注連 水間御柚當年内檢帳丸目録

合水田四町四段倍捌拾卜

除田一町貳段

神祭田一反 八幡宮田一反 庄堂田二反

庄司田五反 織土田〇反

定田三町二反百八十斗 分米六斗五升（計）

助正名 在添上郡四石原三反 野中三反 八幡山一反（計）

庄司田五反

定田一反 已上一町二反

國持名

添上郡桑本二反 九中切二反 十四宗持一反

栗屋一反 八幡田二反 十六荒山西邊三反

已上九反

定田七反 分米一斗四升

伏増名

添上郡一渡多木三反六十斗 十六荒山二反小

十七坂本二反（計）

常荒二反

定田五反半 分米一斗一升

守水名

添上郡二天田五反 五葦原一反 十六荒山西一反

庄司田五反 神田一反

已上一町三反

助貞名 定田五反 分米一斗

添上郡二高六反 十五大田東西三反 織土田一反

已上一町

國水名 定田八段 分米一斗六升

添上郡二長谷三反 九中垣西一反 十六荒山西二反

谷地一反 庄堂五反

定田五反 分米一斗

右任數代内檢帳注進如件、

久安六年十一月十八日

御使

御止可

史料1 大和國水間柚内檢帳案

旦木津へ集積された後に宮都へと運ばれた点から考えて、木津川流域に連なる主要な山林の開発がこの頃から始まった可能性を推察できる。

平安時代になると、各地で柚が荘園化していくことが知られている。先述の「東大寺政所下文案」によって、遅くとも11世紀には水間柚が荘園化していたことがわかる。荘園化するにあたっては、条里による土地区画が施工されたと考えられ、久安6年（1150年）の「水間柚内檢帳案」にはそれに基づくと想定できる坪付けが記されている（史料1参照）。そこで、「水間柚内檢帳案」の記載内容と遺跡の遺存地割りや発掘調査成果から、水間柚の条里について復元を試みたい。

1. 条里地割と坪付けの復元

奈良盆地ではほぼ正方位に従って条里が施工され、下ツ道を中心にして東側では北西（左上）の角から南へ千鳥式に坪数を数える（『奈良県史』第4巻 条里制）。水間は大和高原に位置するものの、同様にして坪数を数えた可能性が考えられる。ただし、水間の谷底平野は正方位と斜行して広がり、地形的にみても正方位の条里が施工されていたとは想定し難い。それでは、水間の条里方向をどのようにして復元すればよいのだろうか。

最近の条里研究によれば、「古代の官道を基準線として条里が設定された」ことが指摘されている（高橋美久二2006）。水間周辺における古代の官道の位置は判明していないが、柚内を一直線で貫通する道路が設

定されていた可能性は十分に考えられる。仮にそれに沿って条里が施工されたと推測すると、その痕跡を現在の地割内に見出すことができるのではないかと思われる。

このような視点で地割を観察すると、谷底平野の中央を一直線にほぼ縦貫する農道の存在がまず注意される。そして、両側の尾根樹から北側の屈曲点までの直線距離がおおよそ5坪分の長さに相当する。この直線的農道は明治初めの地籍図にも畦道として描かれており、古い地割りを踏襲している可能性が高い。また、この農道と同じ方向に沿ったような地割りが所々に認められる。現在、国道369号線で地割りの一部が寸断されていて少し観察し難くなっているが、特に農道の西側で断続的にそれがみられる。さらに、農道と直交するような地割りが幾つこ遺存しており、それらの幅が1坪分の長さに近似するところがある点も注目される。また、字名の分布を調べても当該箇所で見られる箇所が多く認められた。

この地割り方向は、およそN60°Eである。発掘で確認した遺構の方向との関連性を調べてみると、水間遺跡第3次調査F発掘区で確認した平安時代後期（10世紀後半～11世紀初頭頃）の掘立柱建物SB04の梁方向がN55°E前後でほぼ近似する。条里と直接的に関わる遺構は残念ながら検出できなかったが、この地割りが平安時代後期に存在していた可能性をSB04が示唆する点は重要である。ちなみに、飛鳥～奈良時

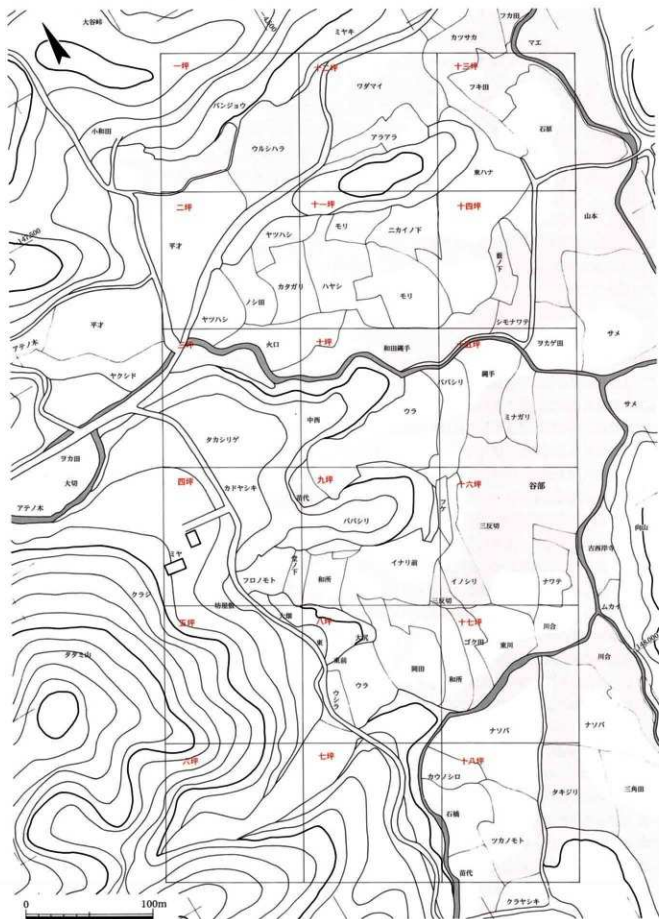


図 195 水間柚の糸里復原案 (1/3,000)

表 39 水間柚条里内の名田一覧(復原)

1坪(1畝) 長100尺(約190歩) (約1畝)	1坪	1坪
2坪(1畝) 西長100尺(約190歩) 北長100尺(約190歩) [畝1畝1反]	1坪	1坪(1畝) 北長100尺(約190歩) 東長100尺(約190歩) [畝1畝1反]
3坪(1畝) 長100尺(約190歩) [畝1畝1反]	1坪	1坪(1畝) 北長100尺(約190歩) 東長100尺(約190歩) [畝1畝1反]
4坪(1畝) 東長100尺(約190歩) 北長100尺(約190歩) [畝1畝1反]	4坪(1畝) 東長100尺(約190歩) 北長100尺(約190歩) [畝1畝1反]	1坪(1畝) 東長100尺(約190歩) 北長100尺(約190歩) [畝1畝1反]
5坪(1畝) 東長100尺(約190歩) 北長100尺(約190歩) [畝1畝1反]	5坪(1畝) 東長100尺(約190歩) 北長100尺(約190歩) [畝1畝1反]	1坪(1畝) 東長100尺(約190歩) 北長100尺(約190歩) [畝1畝1反]
6坪	6坪	6坪

代の掘立柱建物は正方位を意識しつつ若干それより方位が振れる例が多く、地割に合致する例は認められない。この点からみて、遺存する地割は平安時代以降になってから現われた可能性が高い。

以上の検討から、この地割方向が条里の痕跡をとどめていると判断したい。そうした場合、次に問題となるのが条里の施工範囲であろう。地形的にみると、東側には高い山がせまり、その裾部には打滝川が流れているので、これより東側に荘園の存在を想定するのは難しい。おそらくこれが東限となるだろう。また、農道より南側へいくと谷筋が著しく狭まり、整った地割が認められなくなる。よって、そこが条里の南限となる可能性が想定できる。

「水間柚内検帳」によれば、坪付けが十七坪までしか確認できないので、水間では一里の半分の広さのみを区画し坪付けした可能性が考えられる。十四から十七坪に多くの名田が所在しており、比較的平地の連なるような場所にそれが相当すると推測できる。とすれば、十四から十七坪は谷筋の中央に沿って南北方向に割り当てるのが最も地勢に合致する。平安時代後期の水田は自然地形を生かした谷水田が主体であったと考えるのが妥当であり、名田記載の坪内には面積はとにかく谷部の低地が存在しなければならない。一方、記載のない六・七・十・十一・十二・十三・十八坪は尾根が微高地上に相当し、地盤が固い礫層で水利開発が及んでいないような場所に相当すると思われる。

現存する地割と検帳からうかがえる名田の分布などから考えてみると、東限と南限が決まっているので自ずと図195のような条里と坪付けを復元できる。そして、この復元案が発掘調査成果で判明した旧地形に関する情報とよく合致する点は、その妥当性を支持する。また、地形的に最も低地部分が多い十六坪に名田が多いのも整合的である。

このうち、十一・十八坪周辺では平安時代後期の遺物包含層が分布し、十八坪では掘立柱建物や溝などを検出している。したがって、比較的緩傾斜地が広がる両坪内は居住空間として機能していた可能性がある。

また、八坪に頼山・八幡とあり、これが現在の八幡神社とその裏山(タタミ山)を指している想定するのが一般的である(『東山村史』)。したがって、八坪を前後する坪は西側の丘陵近くに比定しなければならぬ。ただし、八幡神社が現在ある地点を八坪そのものに比定できる有力な根拠はほとんどない。そもそも水田に関する検帳に記載されているわけであるから、そこにはおおよその位置や現在の状態のみが漠然と注記されたに過ぎないと考えられる。八幡は頼山一反の右下に小さく書かれてあり、頼山のおおよその位置を注記したに過ぎないとみるのが妥当であろう。八幡神社の周辺を今の地籍図でみると、神社背後がタタミ山、その南側にクラジ(倉地)・坊屋敷がある。ここは本来一続きの山であるから、この山全体を頼山とかつては呼んでいたに違いない。また、坊屋敷は八幡宮坊(観業寺)の庫裡跡とされ、八幡神社の南側一帯も古くから社寺の領域となっていたことは十分に考えられる。したがって、八坪は八幡神社の南側一帯を含めた範囲内で検討しなければならない。

さらに、一坪内と推定される第74発掘区で、谷部に多量の板材が堆積する地点を確認した。平安時代後期～末の土器が出土しており、検帳記載の波多木との関連性を想起させる。

2. 水間柚内検帳記載の名田反数

「水間柚内検帳」の文頭に書かれた水田の合計反数(1町4反180歩)と各名田の総合計反数(6町5反180歩)が合致しないことがこれまで注意されてきたものの、明確な結論を得るには至っていない。水間柚の条里復元案と整合性をもたせるためにも、これをどのように理解すればよいか大きな課題となる。渡

辺澄夫はこの差の中に記録されなかった名畠の存在を想定する(渡辺1956)が、内検帳には水田以外の記載が認められず、畠の反数がそこに合算されているとはとても考え難い。

各名の定田面積を合計すると3町1反180歩となり、文頭の定田総面積3町2反180歩より1反少ないものの近似する。なお、何故に1反少ないのかは後述する。それに対して、各名田面積を合計すると6町1反180歩となり、文頭の水田総面積4町4反180歩を大幅に上回ってしまう。その差は2町3反で、除田面積のおよそ2倍に近い。したがって、除田面積を重複加算しているためにこのような差が生じている可能性が考えられる。このことは、名田反数の和と定田・除田の合計反数が合致する名田がある点にも示唆されている。國持名田は合計9反で、坪付数がない柴本2反を除いた数が記されている。そして、定田7反を除いた2反が除田(八幡田2反)となり、合計数が合致する。快増名でも定田5反半(180歩)は3反60歩と2反小(120歩)の和と考えられる。

除田は各名田の最後に記されている例が多い。これを仮に文末の坪付内に含まれるとして数えると、十六坪内に20反余りの水田が存在したことになり、あり得ない面積になってしまう。したがって、各名田について列記した後に、その中の除田規模を重複して記したと考えた方が理解しやすい。すなわち、各名田についての注記を文末に記したのであり、この点は快増名に常荒2反の存在を注記するのと同じである。ただし、除田を文末に記さない國持名の八幡田2反だけは実際の除田反数が重複なしに書かれている。除田を記す位置によって、内容を書き分けていたと思われる。反数を重複させずに記された八幡田2反は、定田と同様に所在する坪付の中へ挿入されたと考えるのが自然であり、それが十四坪内にあったことを示している。

さらに、文頭に記された除田の内訳と各名田に記された除田の内訳が大きく異なっている点にも注意す

る必要がある。その最も大きな違いは、庄司田5反が助正名と守永名に重複することと、庄堂田の2反(文頭)と5反(國永名)の差である。先述したように除田規模が各名田に重複して記されたとすれば、助正名の実反数は7反、守永名の実反数も7反となる。助正名の定田は1反と記されているから、残り6反に除田を推測でき、5反分を庄司田に充てることができる。しかし、守永名の定田は5反であり、残り2反に庄司田5反を充てることができない。したがって、助正名に庄司田が存在したことは明らかである。守永名では、定田5反と庄司田5反が共に二坪大田5反と同規模であり、これらは同じ名田を指していると思われる。守永名に庄司田5反が記載されているのは、数代の例に任せて内検帳を注進したことと関連すると思われる。数代前に得ていた除田の存在を文書中に実際と違えて盛り込んだのではないかと推測することもできよう。各名田の所在地や大きさなどの個別情報については、名主ごとの報告に準拠して作成されたために、文頭に記された総反数と整合しない箇所が結果的に生じたのではなかろうか。

また、庄堂田5反を記す國永名の実反数は7反であり、定田5反を差し引けば除田は2反しか残らない。庄堂田は本来2反であるから、5反は2反の誤りとみて問題ないだろう。

2反以上の除田は、職士田2反を除いて同じ名田内に属する。そして、さらにそれらは同じ坪内に集まっていた可能性が高い。庄司田5反を含む助正名の内訳は四坪内に6反、八坪内に1反であり、庄司田の面積から考えて、それは四坪内に所在したと想定できる。庄堂田2反は國永名に含まれ、三坪3反内か十六坪3反内に所在するだろう。また先述したように、八幡田2反は十四坪内に所在したと考えられる。糸里復元案の十四～十五坪にかけてヲカゲ田という字名が残っているが、ヲカゲには「神仏の加護」という意があり、それが八幡宮に由来するとすれば、この周辺に十四坪

表40 名田反数と定田・除田反数の関係

名田	名田(補正)	定田	定田(補正)	各名田記載の除田	除田(補正)	備考
助正	1町2反	8反	1反	1反(6坪)		
國持	9反	9反	7反	7反(9・14・16坪)	庄司田5反(4坪)	4坪内は5反か
快増	5反180歩	5反180歩	5反180歩	5反180歩(1・16坪)	八幡田2反(14坪)	反数合致
守永	1町3反	7反	5反	5反(2・5er16坪)	0	0
助貞	1町1反	7反	8反	8反(2・16坪)	神田1反(5or18坪)	0
鷹水	1町2反	7反	5反	5反(3・9・10坪)	職士田1反	0
合計	6町1反180歩	4町4反180歩	3町1反180歩	3町2反180歩	庄堂田5反	庄堂田2反(16坪?)
					庄堂田2反	庄堂田5反は2反の誤り

を復元できる一つの根拠となし得よう。

除田が同じ坪内に集まる点に注目すると、職士田2反も同一坪内に存在した可能性を想定できることになる。助貞名に職士田1反と記されているので、もう1反は助正名か守永名に属したと仮に推測してみよう。これらの間で共通する坪数を吟味してみると、守永名に助貞名と同じ二坪内の名田があることがわかる。二坪の名田として大田5反(守永名)と高6反(助貞名)が記されているが、合わせると1町を超える面積となって矛盾が生じる。ただし、その差が1反である点は、職士田1反の規模と共通し、それが重複して加算されている可能性を想定できることになる。よって、残り1反の職士田は守永名に比定できることになる。しかしそうすると、二坪内の守永名は本来4反であったことになり、守永名の合計6反となって定田5反・神田1反・職士田1反の和(7反)と整合しなくなってしまう。この点を重視すれば、守永名に職士田1反を認めるのはやはり困難で、助貞名に記された職士田1反は2反の誤りとみの方が理解しやすいのではなかろうか。二坪内に存在した職士田2反と定田8反の合計を助貞名1町として記載したのだろう。

このように考えてみると、助正名と守永名でそれぞれ1反の不明分が生じており、それが各名の定田面積合計の誤差1反を生んでいるのではないかと推定できる。ただし、具体的な誤り箇所を特定することは困難である。表40では、一つの可能性として四坪内の助正名田面積が庄司田5反と同じであったと考え、守永名の定田5反は6反の誤りとし合計面積を整合させて示した。

神祭田は守永名に属するが、守永名7反(補正)のうち5反を定田が占めるので、残り1反の神祭田は五坪か十六坪に所在したものと推測できる。糸里復元案の十六坪内には三反切(サンタンキリ)という字名が広く残っているが、かつて三反がミタンと呼ばれていた可能性を想定できるとすれば、これが「御田(神祭田)の限り」の意を表していると解することもできる。とすれば、ここに神祭田が所在した可能性は十分にある。逆に、糸里復元案の五坪がほとんど山地であり、安定した水田の存在を想定し難い点は、そこに神祭田が所在したと考えるのを躊躇させる。ただし、五坪内には前述したようなクラジ・坊屋敷といった字名が残

り、礼寺の領域が及んでいた可能性があるので、神祭田が所在した可能性を全く否定することもできないように思われる。

以上の検討が妥当であるとすれば、一坪3反60歩、二坪10反、三坪3反、四坪5反、五坪1反、八坪1反、九坪3反、十四坪4反、十五坪3反、十六坪9反120歩、十七坪2反(荒田)が存在したことになる。計4町4反360歩のうち、一〜五坪に約5割、十四〜十七坪に荒田を入れて約4割の水田が連続して位置していたと復元できる。そして、一〜六坪では坪付前半に多く、十三〜十八坪では坪付中央に水田が集まる傾向を看守できる。この点は、糸里復元案で示した地形環境と概ね合致する。

3. 水間袖の末路

久安6年(1150年)の時点では、未だ水間袖は東大寺領であるが、戦国期の『春日社進宮領大和諸郷納高帳』には「水間領三斗」と記されており(『奈良県史』第11巻)、16世紀には春日大社への奉仕を水間氏が行なっていて、春日大社の領域へと大きく変わっていることが推測できる。その背景の一つには、大乗院方の山田氏と従属関係を形成した点が考慮されるだろう。しかし、さらにさかのぼって考えるならば、国内寺院の末守・荘園化を進める興福寺の押領を受けていた可能性が高い。建長7年(1255年)の『後醍醐上皇院宣案』には水間庄民が松尾庄に押領をしかけた内容が記されており、この内容から水間庄がすでに興福寺領となっていたことが想定できる(『奈良県史』第11巻)。そして、応永13年(1406年)の『法華寺田畠本券』によると、松尾庄と共に水間庄の多くの田畠が法華寺領となっている(『東山村史』)。法華寺領となった契機については、建長年間(1249~1256)に始まる西大寺叡尊の法華寺復興が考えられるかもしれない。法華寺自体は12世紀末で全く荒廃しており、自力で荘園を獲得することは不可能である。興福寺は別当補任を通じて西大寺を末寺化しており、水間庄・松尾庄の法華寺領化は興福寺の了解を得て行なわれたと想定するのが妥当であろう。以上の内容から、12世紀後半から13世紀前半の間に東大寺領であった水間袖は興福寺に横領されてその支配領域に再編され、その後間もなく法華寺領へと編入されたことが推測される。

(鐘力)

第3節 田原東地区における縄文時代の検討

県営圃場整備事業（田原東地区）の一連の調査では、縄文時代早期前葉から晩期中葉にわたる時期の資料を出土しており、当地域が連続と断絶を繰り返しながら継続的に利用されたと考えられる。

このうち主体となる時期は、早期前半と早期末前期初頃であり、これらの出土量は概算共に以降の時期を上回っている。しかし、遺物量から推測される該期の利用頻度に比べ、顕著な遺構は神宮寺式期の炉跡1基と極端に少ない。このため、遺構から具体的な人間活動を導くのは困難であり、遺物の検討により地域間関係や編年について言及する方法が模索される。ただし、主体となる2時期の編年は近畿地方では不明瞭な点が多く、またそれ以降の時期も、出土が断片的であるため、検討を行うには不十分といえる。

このため、本節ではまず当地区出土の押型文土器と早期末前期初頃土器の編年の位置づけについて検討を行うとともに、そこから導かれる他地域との併行関係・地域間関係等について考察を行なう。そして田原東地区出土縄文土器の消長から遺跡の動向について検討したい。

1. 押型文土器の位置づけ

奈良県下で押型文土器を出土する遺跡は、現在大和高原を主として52遺跡⁽²¹⁾が確認されている（図196、表41）。特に、ここ数年来の圃場整備事業に係わる発掘調査に伴って遺跡数は飛躍的に増加しており、該期の編年や地域間関係などに言及する良好な資料が蓄積されてきた。

田原東地区では、別所下ノ前・辻堂・大谷口遺跡、袖ノ川イモタ・キトラ遺跡、水間遺跡第7・9次調査において、押型文土器と後述する早期末前期初頃の土器が比較的多く出土している。遺跡が近接し、且つ長期に亘る継続的な利用が窺えることから、当地域が該期の活動に関する何らかの役割を担った可能性が高く、土器の検討により編年や地域間関係について言及できる可能性がある。そのため、まず当地区における押型文土器を概観し、次いで特筆事項を詳述し若干の検討を行いたい。

1. 田原東地区出土の押型文土器概観

田原東地区では大川式から穂谷式までの押型文土器各型式が出土している（図197-1～44）。

大川式は、袖ノ川イモタ遺跡で大川式新段階が1個体分出土しており、別所下ノ前遺跡ではE発掘区より市松文を施した胴部片が出土した（図197-1・2）。

神宮寺式は、県内の押型文期では最も遺跡数が多い時期であるが（表41）、当地域でも袖ノ川イモタ遺跡と水間遺跡以外のすべての遺跡で出土しており、最多の型式である（図197-3～18）。特に別所大谷口遺跡や別所下ノ前遺跡E発掘区で多く出土しており、前者は古段階、後者は新段階に比定できるものがまとまっている。別所辻堂遺跡ではA発掘区で1個体分が出土しており（図197-9）、胴部内面に付着した煤の分析から、 $9,305 \pm 25 \text{cal B P}$ の値が出ている。袖ノ川キトラ遺跡と別所下ノ前遺跡D発掘区でも新段階が出土しており、後者では石敷炉を検出した。これの炭化材から $9,450 \pm 40 \text{cal B P}$ の年代値が得られている（第4章参照）。別所辻堂遺跡の資料は、神宮寺式古段階に比定されるため、両者の年代値には注意を要するが、広く神宮寺式の年代値として捉えることも可能だろう。

神並上層式は袖ノ川キトラ遺跡、別所辻堂・大谷口遺跡でわずかに出土している（図197-19～25）。袖ノ川キトラ遺跡出土の土器は桐山和田遺跡2群C1類（守屋2002）、別所辻堂遺跡出土のものは2群C3類に比定されるもので狭義の「神並上層式」（矢野1993）に該当するものである。

「山芦屋期」の資料は別所下ノ前・大谷口遺跡で出土している（図197-26～32）。後述するが、下ノ前遺跡では胎土に繊維を含んだ栴門文・山形文と捺系文土器、大谷口遺跡ではI線部内面に刻みを施す山形文・無文土器が出土している。いずれも県内では資料が少なく、様相が不明瞭な時期といえる。

黄鳥式は別所下ノ前・大谷口遺跡、袖ノ川イモタ遺跡で出土しており（図197-33～35）、特に別所下ノ前遺跡E発掘区では1個体分がほぼ完形で出土した。いずれも外面に栴門文、口縁部内面に権杖文を施す。該期も県内での出土が少なく、様相が不明瞭とされてきたものである。

高山寺式は、県内において神宮寺式に次いで遺跡数

が多い時期であり(表41)、当地域では別所大谷口遺跡以外のすべての遺跡で出土している(図197-36~43)。袖ノ川イモタ遺跡では内面に斜行沈線を施すものは1点のみ出土し、他は外面に楕円文を施すのみである。袖ノ川キトラ遺跡では2個体分が出土するが、どちらも内面に斜行沈線を施さない。図197-37は胴部下半に横位の粗い条痕を施し、また器壁も薄いなど他と異なる特徴を有しており、高山寺式に位置づけることが躊躇される。しかし、粗大な楕円文を施し、11縁部が外反して頸部で屈曲、胴部が丸く張る器形など、高山寺式と共通する特徴を持つことから、これに併行するものとして位置づけた(奈良市教育委員会2006)。今後資料の増加に伴い再考すべきものといえよう。水間遺跡第7次、別所下ノ前遺跡出土のものは半截竹管状工具により斜行沈線を施している(図197-38・39)。袖ノ川イモタ遺跡出土の図197-36は指で斜行沈線を施していると考えられる。口縁部に隆帯を貼り付ける点が特徴的であり、後続する穂谷式との関係が示唆される。ただし楕円文や斜行沈線を施す点など、両者の断絶は大きいと思われる。

穂谷式は別所下ノ前・辻堂遺跡で計4点のみの出土と大川式に次いで少ない。県内でも遺跡数は前型式に比して少なく、押型文土器の終焉に向かう傾向を示すものと考えられる。

2. 神宮寺式・神並上層式の変遷について

田原東地区では神宮寺式と、これに後続する神並上層式が出土した。多寡はあるものの、袖ノ川キトラ遺跡と別所下ノ前遺跡ではこれらが層位的に出土しており、編年研究に重要な知見を与えるものといえよう。そのため、ここでは神宮寺式・神並上層式の変遷について若干の検討を行う。

I群B2類a・b種、またc種は文様の長大化の程度に時期差を想定し分類を行ったが、別所下ノ前遺跡E発掘区ではI群B2類a種とb種の新古関係を層位的に確認できた(図56、図75-157~186)。これらは神宮寺式新段階(矢野1993)に比定され、ほぼ同時期に位置づけられる。c種についてはD発掘区でほぼ単独で出土し、後述する袖ノ川キトラ遺跡においてもa・b種と出土地点が異なるためこれらとの新古関係は明らかではない。しかし、神宮寺式古段階から新段

階への変化には文様の長大化が指摘されており、差はほとんどないにしろa→b種の新古関係を示す出土状況は型式変化の方向性を如実に示すものとして評価できよう。このことから、直行する器形で端部の刻み位置が低く、より文様が長大化したc種をより新しく位置づけるのが妥当である。a・b種が位置を違えて出土する状況は、時期差として捉えられるものであろう。

袖ノ川キトラ遺跡では、神宮寺式(本稿I群B2類b種)の上層から口縁部に刺突を縁形に施す土器が出土しているが、これは桐山和田遺跡2群C1類(守屋2002)に比定される。守屋氏は桐山和田遺跡の検討により神宮寺式新段階から「神並上層式」へは口縁部刻み位置の下降と消失、文様の変化から2群C1類(刺突文)→C2類(格子目文)→C3類(縁形文)へと変遷するとし、これらを広く神並上層式として捉えた。このうちC1・2類は矢野氏が神宮寺式から「神並上層式」への移行期としたもので(矢野1993)、C3類が狭義の「神並上層式」に該当する。

上津大片刈遺跡や神並遺跡では、桐山和田2群C3類のみが出土しており⁽⁴³⁾、袖ノ川キトラ遺跡では桐山和田遺跡2群C1類のみが出土する。このため遺跡の引算により守屋氏の細分はそれぞれが1時期を有していると考えられる。

別所大谷口遺跡では神宮寺式古段階がまとまるものの、出土状況から新古関係は判断できない。また一括性があるとも言えず、古段階でくくった場合の多様性として認識できる程度である。別所大谷口遺跡では端部を刻むものとうでないものがあり、別所辻堂では端部を刻まない。ネガティブ楕円文には斜傾するものとうでないものがあり、前者は大川式新段階射原垣内型、後者は大川型の系譜とも考えられる(矢野1993)。地域的には東海からの影響を想定して然るべき位置にあるが、斜傾する文様の神宮寺式は中西国地方にもあり、端部を刻まないものも多くみられる。別所辻堂遺跡や別所大谷口遺跡の端部を刻まないものが無刻み部分である場合や、摩滅で観察されない可能性も考えられるため、その特徴を他地域との関係で捉えることは出来ない。しかし、該期の地域性についてはより広範に検討を行うことが必要であろう。

近畿地方に限らず、西日本においても押型文土器を層位的に確認できる遺跡は少ない。そのため、田原東

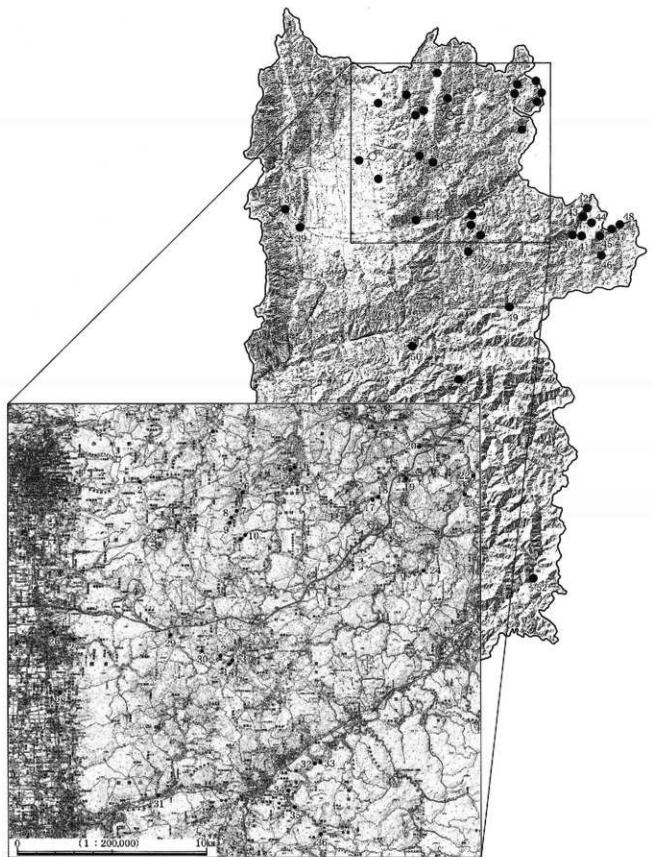


図 196 奈良県内の押型文土器出土遺跡分布図

表 41 奈良県内の押型土器出土遺跡集成表

番号	遺跡/型式	所在	大鼻	大川	神宮寺	神並上層	「山戸屋期」	黄島	高山寺	穂谷	「宮の平」	主要文献
1	白毫寺遺跡	奈良市白毫寺町					?	?				中井1983
2	天鈞山遺跡	奈良市誓多林町			○	?	○					安永2005
3	矢田原遺跡・鉢ヶ坪遺跡	奈良市矢田原町							○			佐々木2001
4	横田矢田野遺跡	奈良市横田町				○						木村2006
5	大柳生宮/前遺跡	奈良市大柳生町								○		湯本2000
6	水間遺跡	奈良市水間町							○			奈良市教委2006
7	別所大谷口遺跡	奈良市別所町			○	○						本書報告
8	別所下/前遺跡	奈良市別所町			○	○	?	○	○	○		本書報告
9	別所辻堂遺跡	奈良市別所町			○	○			○	○		本書報告
10	柚/川イモタ遺跡	奈良市柚/川町			○		?	?	○			奈良市教委2006
11	柚/川キトラ遺跡	奈良市柚/川町			○	○			○			奈良市教委2006
12	高塚遺跡	奈良市蘭生町字高塚			○	○		○	?	○		西藤1983
13	ゼニヤクボ遺跡	奈良市蘭生町字並松			○			?	○	○		楡松1997a
14	丸尾遺跡	奈良市蘭生町字丸尾			?	?	?	○				都祁村史編委2005
15	北野ウチカタビロ遺跡	山辺郡山添村北野			○	○	?	?	?			松田・近江1991
16	桐山和田遺跡	山辺郡山添村桐山			○	○	○		○			松田2002
17	上津堂前沢遺跡	山辺郡山添村西波多			○	○	○	?				平岩1995
18	上津大川刈遺跡	山辺郡山添村西波多			○	○	○	○	?	?		米川2003
19	大西塚/本遺跡	山添村大字大西小字塚/本・室蔵・砂原								○		田部他2005
20	連瀬前田遺跡	山辺郡山添村連瀬										光石2001
21	大川遺跡	山辺郡山添村大字中峰山字大川			○	○	○	○	○	○		松田1989
22	広瀬遺跡	山辺郡山添村広瀬			○					○		松田1982
23	鶴山遺跡	山辺郡山添村大字鶴山字スズカワラ			○	○	○	○	?	○	○	岡田他2006
24	越町遺跡	山添村大字岩屋小字越町						○	?	○		田部2006
25	前栽遺跡	天理市前栽町			○							泉1984
26	布留遺跡豊田地区	天理市豊田町					?					太田他1989
27	布留遺跡豊井(打破)地区	天理市布留町					○	○	○	○		置田・矢野1988
28	五合瀬古墳下層遺跡	天理市佐保庄町			○	○						松田1997
29	上入田遺跡	天理市福住町上入田				?	?					小島1958
30	鈴原遺跡	天理市福住町鈴原					?	?	?	?		末永他1952
31	初瀬遺跡	桜井市初瀬					?					清水1997
32	川井第1遺跡	宇陀市橋原町山辺三			○							久野・小泉1973
33	川井第2遺跡	宇陀市橋原町山辺三				?	?		○			久野・小泉1973
34	檜牧遺跡	宇陀市橋原町檜牧				○	○	?	○			清水・榎山1994
35	坊/浦遺跡	宇陀市橋原町大字松牧・自明				○	○	○	○			柳澤2001a
36	高井遺跡	宇陀市橋原町高井				○	○					柳澤1986
37	下城・馬場遺跡	宇陀市橋原町大字沢								?		柳澤2001b・2002
38	下田東遺跡	香芝市下田東字中/町・福井							?			小泉他1980
39	池田遺跡	大和高田市大字池田			○			?	○			前澤2001
40	念仏堂遺跡	宇陀郡曾爾村塩井字念仏堂			?	?						松田1997
41	条ヶ本遺跡	宇陀郡曾爾村今井字条ヶ本							○			綱干・小泉1972
42	弁天遺跡	宇陀郡曾爾村伊賀見字弁天							?			中野・松田1985
43	久保川原遺跡	宇陀郡曾爾村伊賀見字久保川原			?	○						松田1985
44	大口遺跡	宇陀郡曾爾村大良路字大口				○						中野・松田1987
45	長尾遺跡	宇陀郡御杖村菅野字長尾			?	○	○		?			松田1987
46	中野川向遺跡	宇陀郡御杖村菅野字中野			?							松田1997
47	泥土平遺跡	宇陀郡御杖村神末字泥土平				○	?	?	?	?		松田1986
48	平岩遺跡	宇陀郡御杖村神末字高橋				○	○					松田1997
49	木津名滝遺跡	吉野郡東吉野村木津					?		?			柳澤他2004
50	宮滝遺跡	吉野郡吉野町			○	○	○					青木・石井2001
51	宮の平遺跡	吉野郡川上村迫			○	○	○	○	○	○		橋本・南部2003
52	向平遺跡	吉野郡上北山村宮平字向平					?					小島1962

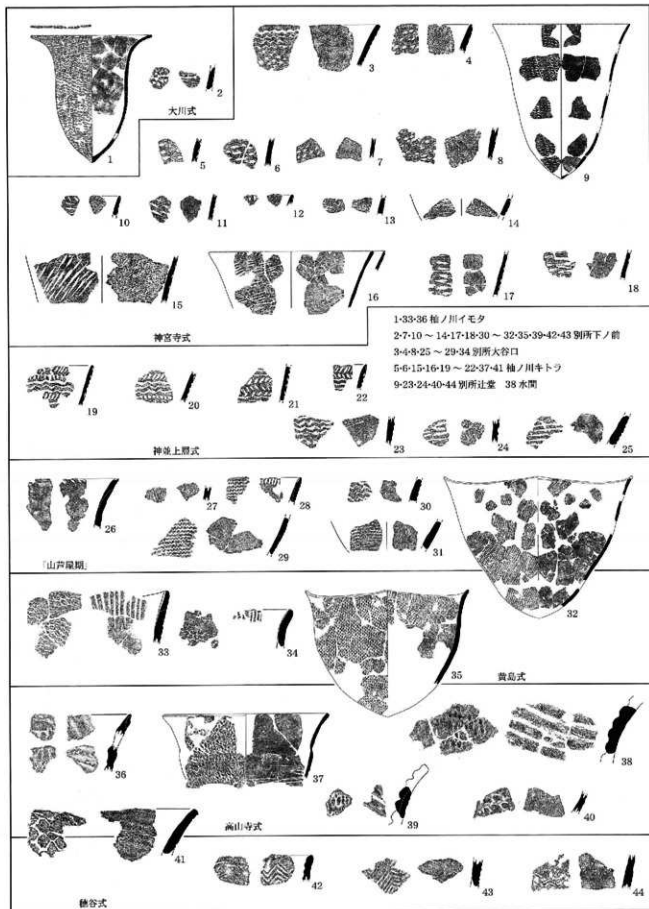


図 197 田原東地区出土押型文土器変遷図 (1・9・16・32・35・37: S = 1/8, その他: S = 1/4)

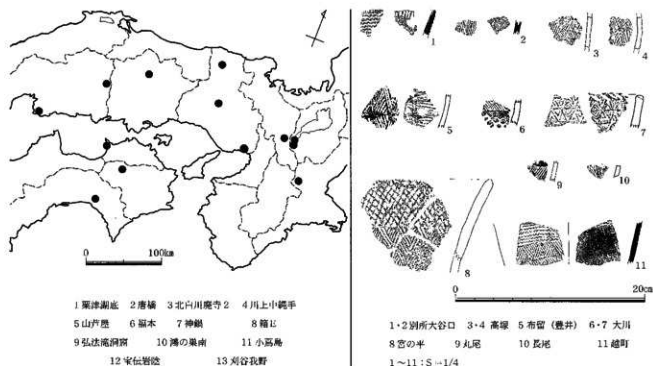


図198 奈良県出土複合鋸歯文と西日本複合鋸歯文出土遺跡

地区における成果は、現行編年を層位的に裏付けられるものとして評価できよう。

3. 「山芦屋期」の押型文土器と無文土器について

本報告の押型文土器の成果において特に重要な知見を与えるものとして、別所大谷口遺跡における口縁部内面に刻みを入れる「山芦屋期」(熊谷2006)の山形文・無文土器の出土が挙げられる。これらは「神並上層式」と黄島式の間に位置づけられるもので、刻み位置から「山芦屋4・5期」に位置づけられる⁽¹³⁾。

県内における類例は断片的であり、まとまった資料はみられない。大川遺跡では内外に刻みを入れる口縁部片と山形・楕円文と複合鋸歯文を併用した胴部片が出土している(松川1989)。京都府北白川廃寺2遺跡(網1994)、広島県弘法滝洞窟遺跡(中越1995)、徳島県宝伝岩陰遺跡(森・松藤1999)、高知県刈谷我野遺跡⁽¹⁴⁾でも口縁部を刻む土器と複合鋸歯文が伴い、刻み位置も「山芦屋4・5期」に比定されるものであることから、複合鋸歯文の時間的位置はある程度限定できると考えられる。県内における複合鋸歯文出土遺跡は8遺跡⁽¹⁵⁾が挙げられる(図198)が、このことから該期に位置づけられる蓋然性は高い。

複合鋸歯文などの「異形押型文」については片岡肇

氏の研究が詳しいが(片岡1988)、主として中部・東海地方に分布し、西日本での出土は少ない。そのため中部・東海地方の細久保式との関係が想定され、広域編年の指標となりうると考えられる。

北白川廃寺2遺跡出土資料が細久保式に比定される点は、矢野健一氏が指摘している(長野県考古学会1995)。また山芦屋遺跡S4地点下層層出土資料と、北白川廃寺2遺跡出土資料などの外面に刻みを施す土器が併行し(赤塚2003、熊谷2006、矢野2007)、ポジティブな楕円文も該期に成立している。これらのことから黄島式に先行する「山芦屋期」の段階において押型文土器のホライズンは形成されている。

県内で該期の無文土器の類例はなく、押型文土器全時期を通じても確実なものは鶴山遺跡の例(図199-5)しかない。近畿地方では、京大橋内遺跡(千葉・阪口2005)で黄島式に伴う無文土器が出土するが、刻みは入らない。しかし近接する北白川廃寺2遺跡では無文土器は出土していない。鴻ノ木遺跡では鴻ノ木IV式に無文土器が伴うとされており(山田1998)、山芦屋遺跡では内面を刻む無文土器が出土している。

中四国地方では智頭枕田遺跡(酒井他2006)、弘法滝洞窟遺跡(中越1995)で外面刻み、刈谷我野遺跡(松本2006)で内面刻みの無文土器が出土している。瀬

戸内地方の無文土器については古くから指摘されており(樋口1936, 三森1937)、押型文土器との共存関係が問題とされてきた。その経緯は兵頭氏と松本氏の論考が詳しい(兵頭2006, 松本2005b)。遠部慎氏は大分県北鉄輪遺跡の事例から船荷山式と無文土器との共存関係を疑義を提示し(永野・遠部・志賀1999)、松本氏は刈谷我野遺跡の無文土器が「黄鳥式」とは異なり、また東九州のそれとも異なることから在地の土器型式として理解するとともに黄鳥式以前に位置づけた(松本2005a・b)。

帝釈峡遺跡群の条痕文土器は北部九州に起源が求められ(矢野2003)、四国・近畿地方で出土する条痕を施す山形文土器もその影響による可能性が高いと考えられる。刈谷我野遺跡では無文土器に山形文を施した「器種間交渉」を行った土器が出土し、上坑出土の押型文・無文土器の様相から刈谷我野1～4期が設定されている(松本2005b)。筆者は、帝釈峡遺跡群の事例から中四国地方の条痕文・無文土器が、神並上層式以降に位置づけられ、また刈谷我野1～3期が、押型文土器の刻み位置と山形文の形態から「山芦屋期」に併行するという見解を示した(熊谷2006)。

別所大谷口遺跡出土の無文土器の類例は見当たらないものの、中四国地方での事例を鑑みれば近畿以西の影響を考慮するのが妥当であろう。しかし、近畿以東では掘沢式の段階に多量の無文土器を伴い、後続する細久保式には殆ど伴わないという事例がある(会田1988)。また瀬戸内では黄鳥式と無文土器が融合し高山寺式が成立したという見解がある(矢野1997)。掘沢式の薄さに対して細久保式の器厚は厚く、また無文土器が減少しているという状況だけをみれば、細久保式は掘沢式と無文土器の「器種間交渉」したものと捉えられるのかもしれない。このような視点を持つならば、より古く位置づけられる近畿以東の無文土器との関係も決して無視できる状況ではない。

時期と地域を離れた東西の無文土器を結びつける訳ではないが、近畿地方でも桐山和田遺跡や湯ノ木遺跡では、幅広の山形文を横位密接施文した厚手の土器(図199-16・17)が出土している⁽⁴⁸⁾。また鳥浜貝塚84T調査区(鳥浜貝塚研究グループ1985)において桐山和田2群C3類と同一層から幅広の山形文を横位密接施文した厚手土器が出土していることから、「神並

上層式」の段階ないし、その直後に厚手の山形文土器が伴うのではないかと考える⁽⁴⁹⁾。

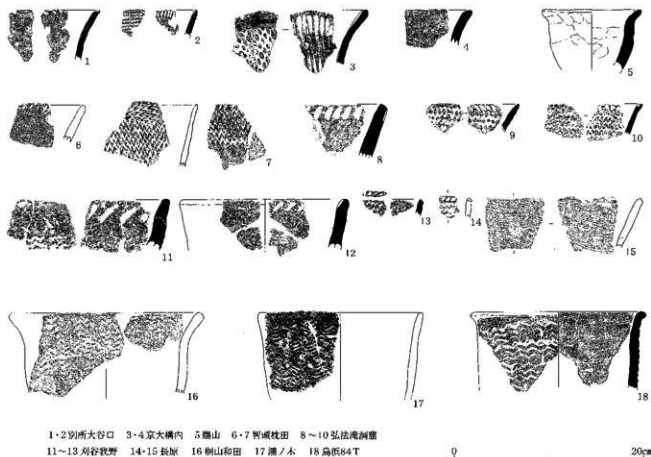
近畿地方で出土する無文土器と厚手山形文土器の位置づけと系譜は今後検討を要するが、該期は複数系統の土器が存在する時期であり、広域な視点で比較検討を行う必要がある。ただし、矢野氏の指摘(矢野1993)通り、地域幅年の充実を待たずして広域な比較を行った先学の過ちは繰り返さない。押型文土器にする無文土器にする該期は多くの課題が残されている。

また、別所下ノ前遺跡D発掘区では内外にポジティブな楕円文を施した土器(I群D4類)と、山形文、燃糸文が出土している。これらの共存関係は明らかでないが、黄鳥式は胎土に殆ど繊維を含まず、文線幅の太い山形文は殆どみられない。燃糸文の胎土はこの山形文と類似しており、北白川院寺2遺跡や長原遺跡東部地区(杉本2002)で外面刻みの山形文と燃糸文が共存することからも「山芦屋期」に位置づけられる可能性が高い。またI群D4類の端部形態は船荷山式に比定されると考えられ⁽⁵⁰⁾、黄鳥式より遡るものといえる。

4. 近畿地方における黄鳥式併行期の位置づけ

瀬戸内地方の黄鳥式に併行する時期は近畿地方では資料が僅少のため、様相が依然不明瞭である。しかし田原東地区の調査では黄鳥式が一定量出土しており、とりわけ別所下ノ前遺跡E発掘区では、瀬戸内地方で見られるものと比しても遜色がない資料が出土した(図76-191)。赤塚亭氏は中四国地方の黄鳥式が近畿地方でも同様に分布し、広域に分布する高山寺式の母体となったとしている(赤塚2003)。高山寺式との関係はともかく、筆者は瀬戸内地方と遜色ない土器が出土する背景として、近畿地方での該期の遺跡は少なく、地域色を生み出す程の活発な活動がなかったためではないかと考える。そのため、赤塚氏が示すように、黄鳥式の細分と変遷は基本的に矢野氏の見解が近畿地方でも適用可能と考える(矢野1997)。

近畿地方で黄鳥式に併行するものとして葛籠尾崎3が挙げられるが(松田1989)、これは筆者の「山芦屋期」としたものを含んでいる。また福本式もこれに近いが、黄鳥式に先行するものとして設定されている点は筆者の認識に近い⁽⁵¹⁾。黄鳥式や黄鳥式併行期の内



1・2別所大谷口 3・4京大横内 5藤山 6・7野成枝田 8～10弘法滝洞窟
11～13刈谷我野 14・15長原 16朝山和田 17浦ノ水 18鳥居84T

図199 押型文土器に伴う無文・捺糸文土器と厚手山形文土器(1/4)

容は研究者により異なるため、その実体が不明瞭となり、一人歩きしている感がある。黄島貝塚出土資料で設定された「黄島式」には口縁部を刻む資料は含まれていない(鎌木・木村1956)。該期は海進による影響で貝塚を形成する貝がヤマトシジミからハイガイへ変化する時期にあたり(遠部2006)、編年の細分を行い、海進の影響を認識することは、それによる環境変化と遺跡の動向、地域間関係などを明らかにする上で重要である。そのため少なくとも黄島式の名称を用いるのであれば欄状文をメルクマールとし、先行する刻みを行う段階は年代も、その用いられた環境も黄島式とは異なるものであると認識する必要がある⁽¹⁰⁾。

II. 早期末前期初頭土器の位置づけ

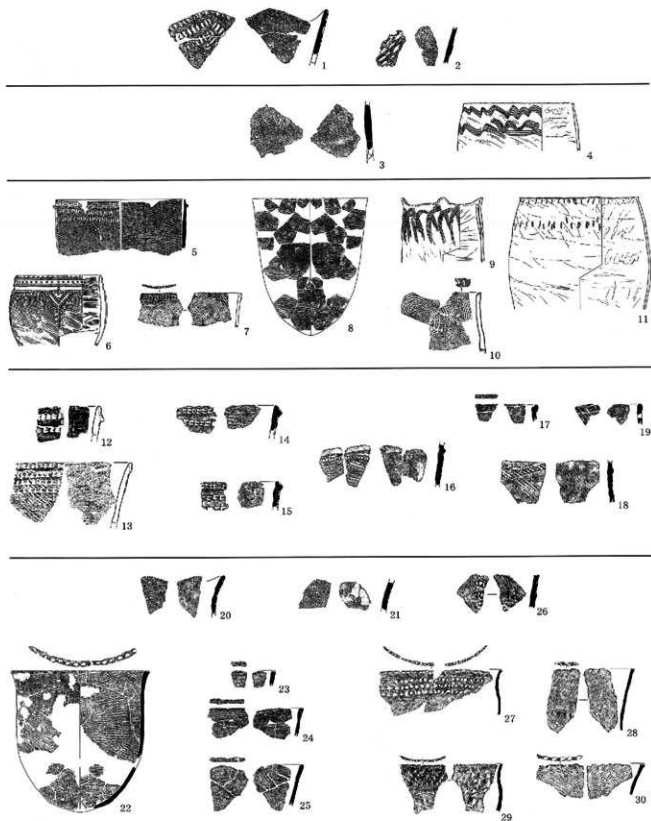
該期の近畿地方は、アカホヤ火山灰の影響や他地域との併行関係、また早期・前期の区分など多くの問題を内包している。特に近畿地方では東海や山陰などの他地域の土器が多く認められる一方で、在地の土器型式の実態が不明瞭である。この点が、広域編年を構築

する上での障壁となっていると考えられる。山原東地区の調査では早期末前期初頭の上層が一定量出土しているが、類例が少なく位置づけが困難な資料がいくつかみられる。これらの位置づけによっては広域編年の構築において有効な知見を与える可能性があるため、以下、若干の検討を行うこととする。

1. III群B1類の検討

III群B1類は別所下ノ前遺跡E発掘区で出土している。口縁から胴部下半までが残存したため、器形復原を行った(図79)。これには、1) 貝殻腹縁を用いて押引を行う、2) 胴部に同心円上のモチーフを施す、といった2点の特徴がある。後者の特徴により東海地方の天神山式に併行するものと判断したが、両者の特徴が1個体内に共存する例は天神山式にはみられない。そのため、いずれかの属性を持つ土器群との検討を行う必要がある。

愛知県橋廻間貝塚では、天神山式の新相にあたる土器群を検出し、従来の天神山式の古相を塩屋中層C



1・2 別所大谷口 3・19・22～25 水洞 4・6・9～11 横瀬岡 5 大浦浜
 7 一乗寺内畑町 8・14～18・20・21 別所下ノ前 12・13 西川津 26～30 粟津貝塚
 4～11・22～25・27～30: S=1/8, その他: S=1/4

図 200 出原東地区出土早期末前期初頭土器と参考資料

式、天神山式の新相を桶廻間式として設定を行っている(山下2005)。この桶廻間式には1・2の属性を個別に持つ土器が出土している(図200-9~11)。

図200-9・10はV群2類a種1とされたもので、上下に長い楕円状のモチーフや、同心円状のモチーフを持つ。11縁端部は幅広く面を持つものと、丸い形態のものがみられる。これらの文様はV群1類(図200-4)の波状文が発展したものとされている。

図200-11はV群2類a種2とされたもので、口縁部に貝殻腹縁を用いて刺突ないし押し印を施している。口縁端部は面を持つものと、先尖りを呈するものがみられる。

両者は器面に条痕があまりみられない点で本稿Ⅲ群B1類と異なるが、個別の文様は共通する。また端部形態が先尖り状を呈する点で、V群2類a種2との共通性が際立つ。よって、地文に条痕を多用し、V群2類a種1・2のモチーフを施したものが本稿Ⅲ群B1類と考えられ、桶廻間式併行と位置づけるのが妥当と思われる。この場合、条痕を多用する点は近畿地方の地域色として捉えられるのかもしれない。

2. Ⅲ群B2・3類の検討

Ⅲ群B2・3類は、別所下ノ前遺跡D発掘区で出土した。その特徴は、横位の貝殻腹縁刺突を縦位に施す点である(図200-20・21)。条痕の有無で分類を行ったが、施工手法からみれば同類として大過ないだろう。

類例は粟津貝塚湖底遺跡にあり、S2ⅡB類とされている(図200-26・28、泉1984)。これに共伴する粟津S2Ⅰ群は、器形や文様および他遺跡の層位事例から羽島下層Ⅱ式以前に位置づけられており、また清水ノ上Ⅰ式と併行する可能性が高いとされている(横澤2006)。

粟津貝塚湖底遺跡S2ⅡB類には、横位の貝殻腹縁を縦位に刺突を行うものと、縦位の貝殻腹縁を横位に刺突を行うものがある。前者は本稿Ⅲ群B2・3類に近いと考えられるが、後者と共に粟津S2Ⅰ群と同時期に位置づけられるかは不明である。ただし、粟津湖底遺跡では広義の天神山式がみられないことから、本稿Ⅲ群B1類や桶廻間式に比定することはできない。したがって、これらより新しく位置づけるのが妥当であろう。

3. Ⅲ群B4類の位置づけ

Ⅲ群B4類は別所下ノ前遺跡D発掘区で出土した。これには、1) 隆帯を貼付ける、2) 隆帯の直下に貝殻腹縁刺突を横位に施す、といった2点の特徴がある(図200-16)。これもまた類例がないが、近い例として一乗寺南畑町南部地点下層出土土器(以下、一乗寺南層)とその類例が挙げられよう。

一乗寺南層出土資料については横澤慈氏が分析されている(横澤2006)。氏は当資料をⅠ~Ⅲ群に分類し、条痕地で隆帯を貼付けるものをⅡ群としている。主体資料はⅡ群であり、隆帯の位置や形状により細分を行っているが、いずれも隆帯上に刻みや刺突を行う点で、本稿Ⅲ群B4類と異なる。ただし、隆帯下に刺突を行う点は、施工手法上、Ⅱ群A2類・C類に近いといえよう。

Ⅱ群C類は円形刺突を施すもので、近畿地方を中心に、西は帝釈峽遺跡群、東は桶廻間貝塚に類例がある。桶廻間貝塚では、桶廻間式に伴う可能性が高く(坂野2005)、広義の天神山式~塩屋式の間に位置づけられるのは確実である。また、近畿地方で羽島下層Ⅰ式や西川津式が出土する一方で、帝釈峽遺跡群奇倉岩陰遺跡では類似資料が羽島下層Ⅰ式・西川津式と同一層から出土している。このことから、横澤氏は当資料と中国地方との関わりを指摘した上で、隆帯上下に刺突を行う特徴から羽島下層Ⅰ式との併行関係を指摘している。

問題は、本稿Ⅲ群B4類の位置づけである。当資料と一乗寺南層出土資料は共伴しないため、新古関係を摸索することとなるが、この場合、1) 隆帯を持つ、2) 円形刺突が無い、3) 外面にのみ条痕を施す、などの特徴が位置づけを行う際有効な属性となろう。

横澤氏は、円形刺突を施し、隆帯の無いものを新しい要素と捉え、粟津S2Ⅰ群の前に位置づけている。また矢野健一氏は、長山式→羽島下層Ⅰ式→西川津式の変遷を示しているが、これは口縁端部の刻みが長山式と羽島下層Ⅰ式にみられるのに対して、西川津Ⅰ式にはみられず、また前者が内外に条痕を施すのに対して後者が内面の条痕をナゲ消すものが多いことに基づいている。さらに、後続する羽島下層Ⅱ式への変遷を単純なものから複雑なものとし、その成立前に条痕の卓越する時期を想定している(矢野2002)。

両者の変遷観に当てはめると、隆帯を施す点は古い要素と考えられるが、内面に条痕を施さない点は、羽島下層I式より古く位置づけることは出来ない。これは近畿・山陰地方において羽島下層I式に先行する型式が裏面に条痕を施すものであるためである。したがって、羽島下層I式より新しく、西川津1式より古いか、併行する位置を与えるのが妥当と考えられる。

4. Ⅲ群C類の位置づけ

Ⅲ群C類は別所下ノ前遺跡D発掘区で出土した。これには、1)口縁部に断面三角形の隆帯を貼付ける、2)隆帯の上下に押し印を行う、といった2点の特徴がある(図200-14・15)。

隆帯の上下に施文を行う点は、先述の一乗寺南下層出土資料と同様である。ただし、隆帯の形状や施文が押し印である点は、併行すると考えられる羽島下層I式や、それに後続する西川津1式の特徴である(図200-5・12・13)。施文が半截竹管状工具による押し印である点や、条痕がみられない点を積極的に評価するならば、矢野氏の西川津1式の範疇で捉えられるかもしれない。しかし、小片のため、そのどちらに位置づけられるか、もしくは中間の様相を示すものか判断としない。ただし、一乗寺南下層出土資料や本稿Ⅲ群B4類と時間的に近い関係にある蓋然性は高い。

5. 田原東地区早期末前期初頭の様相

以上の検討により、田原東地区における早期末前期初頭の様相がある程度判明してきた。それらを既存型式と対応させると概ね表42のようになる。

まず、別所大谷口遺跡のⅢ群A類は石山式に比定されるものである(坪井1956)。東海地方を主として分布し、近畿地方では発掘湖周辺を除き、ほとんど例がみられない。

愛知県天神山遺跡では爪形文を施す七器と櫛刷波状文を施す土器が層位的に把握され、後者が天神山式として石山式の後に位置づけられた(紅村1963)。桶廻間貝塚ではこの天神山式の新相にあたる土器群が見出され、従来の天神山式をその古相として埴屋中層C式、新相を桶廻間式として設定している(山下2005)。これによれば水間遺跡第7次調査出土の図200-3は埴屋中層C式に、別所下ノ前遺跡E発掘区出土のⅢ群B1

表42 田原東地区早期末前期初頭編年対比表

中国地方	近畿地方	東海地方	田原東地区
	石山式		Ⅲ群A類 (水間7次)
	天神山式	埴屋中層C式	Ⅲ群B1類 Ⅲ群B4・C類 Ⅲ群B2・3類 (水間7次) (袖ノ川イモタ)
羽島下層I式	一乗寺南下層	桶廻間式 埴屋式	
西川津1式	東津S21群		
	羽島下層II式		

類は桶廻間式に比定される。

それに後続すると考えられるものが本稿Ⅲ群B4類とⅢ群C類である。前者は一乗寺南下層出土土器に類似するもの、それより新しい可能性がある。桶廻間式と一乗寺南下層出土土器、羽島下層I式が併行する可能性が高いことから、Ⅲ群B1類の直後に位置づけるのが妥当だろう。また、Ⅲ群C類も羽島下層I式より新しい可能性が高く、その特徴から中国地方の異系統土器と考えられ、Ⅲ群B4類と共伴する可能性が考えられる。さらに、別所下ノ前遺跡D発掘区ではⅢ群D2類が出土するが、これは東海地方の埴屋式に比定できる。その細分は諸氏の論があるが(磯部他1965、磯部1984、増子2006、山下2006)、その編年の位置は、桶廻間式に後続するものである。そのため、一括性や共伴の根拠は希薄であるが、大枠で捉えた場合、Ⅲ群C類・Ⅲ群B4類・Ⅲ群D1・2類の隆帯を持つ一群が共伴する可能性は高い。層位的には確認できないものの、平面分布ではⅢ群C類・Ⅲ群B4類・Ⅲ群D2類b種は比較まとまりを持って出土している(図43)。

また、Ⅲ群B2・3類は隆帯を持たない点でⅢ群B4類より新しく位置づけられると考えられ、貝殻腹縁を用いた一群はⅢ群B1類→Ⅲ群B4類→Ⅲ群B2・3類と漸移的に変化する可能性が考えられる。この場合、検測の域を出ないが、Ⅲ群B1類は隆帯を持たないため併行すると考えられる一乗寺南下層出土土器に貝殻腹縁文を施し、隆帯上の刻みを省略したものがⅢ群B4類だと想定できる。つまり、一乗寺南下層出土土器の変遷の1系列として、微隆帯上刻み・隆帯下刺突→微隆帯上無刻み・隆帯下貝殻腹縁刺突→隆帯無し・横位貝殻腹縁縦位刺突という段階があるのではないだろうか^(註11)。

表 43 田原東地区縄文時代遺跡消長表

種類・形式/遺跡・地点	地/川 中/今	地/川 イ/年	地/川 試/層	別所辻堂					別所下ノ前						水間					
				A	B	C	D	E	I			J	K	L	M	N	O			
									19r	25r	28r									
大川式																				
神宮寺式 (旧)																				
神宮寺式 (新)																				
神宮寺・神宮寺付居																				
「神宮」形式 (「山ノ形」)																				
野島式																				
高山中式																				
鶴形式																				
鶴ヶ島台式																				
茅山下層式																				
ハッ崎I式																				
鶴形式																				
石山式																				
大川式																				
稲妻式(前期)																				
野島下層I式																				
北谷川下層I式																				
北谷川下層II式																				
飯沼I・II																				
飯沼III・IV																				
北谷川中式																				
中野末原遺跡																				
高野遺跡																				
北谷川上層式																				
長谷山I式?																				
鶴形式																				

Ⅲ群B2・3類の具体的な位置づけは、共存関係が明らかでないため、併行・後続する土器群が確定できない。しかし、栗津貝塚湖底遺跡の例を鑑みれば、栗津SZ1群がこれに伴うか後に位置づけられる蓋然性が高い。水間遺跡第7次調査では拡張口縁で肥厚する端部をもつ栗津SZ群に位置づけられる土器が出土した(図200-22、奈良市教育委員会2006)。これは端部に刺突を行うが、刻みを施すものもみられる(図200-23~25)。栗津貝塚湖底遺跡SZII B類(図200-28)の器形や端部形態も類似しており、これらに近い位置づけを与えるのが妥当であろう。

以上のように田原東地区では、近畿地方で断片的にしか出土していない石山式や、後続する土器群が少量ながら出土した。これらは良好な資料とはいえないものの、類例のない資料を含んでいたため、研究の進む他地域の例を援用し、その編年的位置を考察した。ただしいまだ多くの検討の余地を残しており、これらについては今後の課題としたい。

Ⅲ. 田原東地区における縄文時代遺跡の動向

田原東地区では縄文時代早期から晩期に至る各期の土器を出土した。各遺跡・発掘区は、巨視的にとらえれば早期前葉~早期末前期初葉、中期末が多い点で共通している。逆に、個別土器型式で各遺跡・発掘区の消長を取看すると、当地域における遺跡の動向が窺

る(表43)。

田原東地区における縄文時代の利用は、大川式の時期に始まる。大川式は柚ノ川イモタ・別所下ノ前遺跡で出土し、後者は後続する神宮寺式への連続性が認められる。また、近接する柚ノ川キトラ遺跡、別所辻堂・大谷口遺跡でも神宮寺式が出土しており、当該期における両地域の緊密な関係が窺える。ただし、より細分された土器の分類からみれば、これらは同時に存在した可能性は低く、時間差をもって分布するものと考えるのが妥当である(表43)。

押型文期においては、特に前半期を中心としてその最後型式までが出土しており、その出土傾向は各型式の特徴をある程度反映していると考えられる。分布圏を拡大する神宮寺式と高山寺式は多寡こそあれ、ほぼ普遍的に出土しているのに対し、遺跡数が減少する時期では、当地域でも出土が僅少となる傾向がある。このように押型文土器期には盛衰を繰り返しながらも、当地域を継続的に利用しているといえよう。

しかし、押型文土器様式の終焉と軌を一にして当地域に最初の断絶が訪れる。これは近畿地方では普遍的な様相で、該期に後続する野島式が出土せず、その次型式である鶴ヶ島台式から出土が認められ、以後関東・東海系糸痕文土器群が続くとされている(泉1996)。田原東地区の様相も例外ではなく、鶴ヶ島台式・茅山下層式を断片的に、ハッ崎I式・粕畑式をある程度ま

とまって出土する。また、早期末の石山式から前期前半の北白川下層Ⅱ式までは、断片的ながら連続して出土するものの、ヒノ山式・入海式、北白川下層Ⅲ式から鷹鳥式の間には空白がみられる。船元式も仙ノ川イモタ遺跡や水間遺跡で出土するが、後続する里木Ⅱ式ではなく、中期末北白川C式から後期中葉にかけて再度連続して出土する。その後は篠原式まで断絶がみられる。

このように、断絶を繰り返しながらも当地域を継続的に利用する状況を看取できるのだが、近接地域間で土器型式の補完がみられる場合、その地域間での集落移動があったとする見解がある（泉1985、高松・矢野1997）。これに対し、近接地域間で土器型式の共有がなければ遺跡の断絶とみる見解もある（高松・矢野1997）。田原東地区では押型文土器期、茅山下層式～稲畑式、早期末前期初頭、北白川下層Ⅱ式、北白川C式～北白川上層式に遺跡間の共有がみられるが、先述のように、押型文土器には時間差が認められるため、安易に集落移動とすることはできない。可能性を見出せるのは神宮寺式における本稿1群B1類b1種と1群B2類c種くらいだが、型式の時間幅を考えれば、厳密に併存するかどうかは確証性に欠ける。以上のことから、田原東地区の遺跡の様相は、当地域内での移動とは考えにくい。むしろ、より広範な領域内における同帰的な利用の一環によるものと捉えられるのではないだろうか。

田原東地区での遺構の出土は、別所下ノ前遺跡の石敷炉を別にすれば、他に集石土坑があるのみで住居跡はみられない。調査区外に厩作城を求めることも不可能ではないが、各発掘区の様相は各時期の利用の実態をある程度示すものと考えられるし、また大川遺跡や鶴山遺跡、宮の平遺跡などの河岸段丘状に立地する大規模遺跡と比較した場合、当地域は集落を構えるだけの十分なスペースが確保出来ないと考えられる。これらの点からして、当地域が集落として利用された可能性は低いと考えられ、その場合、当地域はなんらかの生業活動の領域として継続的に利用されたと考えるのが妥当と思われる。

それでは、田原東地区の遺跡を造した人々の居住域はどこにあったのだろうか。該期の遺跡・遺構の少なさから、これに対する明確な回答を導くのは困難とい

わざるを得ない。対象を押型文土器期に限定した場合、大和高原では大川遺跡・鶴山遺跡・上津大片刈遺跡・桐山和山遺跡で住居跡が検出されている。しかし、これらが田原東地区や他の人和高原に立地する遺跡の拠点であったとするには、時期が共通せず、また住居跡が検出されていない時期もあることから、安易に認めることはできないと思われる。もちろん拠点的な遺跡の存在を否定するわけではなく、岡田肇氏の想定（岡田・田部2006）のように、大川遺跡や鶴山遺跡などに拠点を設けた集団もあったと考えている。しかし、これらと田原東地区、また大和高原や他地域の遺跡との関係は、より広範な地域を対象とした土器の検討による系統関係の把握からなされるべきであり、通年定住・季節移動などの問題も遺跡総体の分析から導くべきであろう。これらの分析を行うには、田原東地区の成果は資料不足の感を否めない。

大和高原北部では早期の遺跡が多く、田原盆地ではより新しい時期の遺跡が多いとされる（岡田2006）。また、近畿地方では中期末以降に低地部の利用が多くなる点が指摘されている（泉1985、大野2001）。田原東地区においては、早期のみならず、中期末以降の連続的な利用、また晩期の利用も認められており、当地域と低地部との関係を考える上で重要な成果といえる。この点において、田原東地区の調査が提起する問題は早期にのみ限定されるものではないが、現状では十分な評価を与えることはできない。今後の資料の蓄積を期待したい。

IV. まとめ

以上、田原東地区の縄文時代の遺跡調査から考えられる問題について触れてきた。今一度その成果を挙げると

- ・神宮寺式・弁並上層式が層的に出土した
- ・神宮寺式の実年代を得た
- ・神宮寺式期の石敷炉を検出し、且つその年代値を得た
- ・「山芦屋期」の無文土器が出土した
- ・黄鳥式の良好な資料が出土した
- ・早期末前期初頭の各種の土器が出土した

点が挙げられる。

上層の編年研究と自然科学の両分野で成果を得られ

た点は今後の研究に貢献するものとして評価できるものである。逆にそれらに付随して多くの問題が提示されるものと考えられるが、以後の課題とし、今後検討していきたい。

本報告が近畿地方の縄文文化研究の一助となれば幸いである。

謝辞

Iは平成17年度奈良大学文学部に提出した卒業論文、第17回中四国縄文研究会の成果を使用している。これらの作成にあたり指導教官である植野浩三先生をはじめ、多くの方々にご指導を賜り、また鳥浜只塚出土資料の凶化、掲載に関しては若狹歴史民俗資料館にご協力いただいた。IIは学兄である横澤慈氏をはじめ、多くの方々にご教示いただき、また一乗寺南下層出土資料の見学は泉拓良氏にご協力いただいた。本節の執筆にあたり非常に多くの方の御協力を得ている。紙幅の都合によりご方名を挙げる事ができませんが、記して感謝申し上げます。(熊谷)

註

- 註1 2007年2月現在の既報告分。ただし集成漏れも考えられる。また、筆者が未発見のもので報文から扇形式を判断できないものは「？」と記した(表41)
- 註2 筆者は守屋氏が2群C2類とした資料のうち、口縁端部からやや下がった位置に円形の刺突を行うものは神並遺跡や上津大片刈遺跡で見られるもの、両遺跡では2群C2類が出土していないため、2群C3類に伴うものではないかと考える。
- 註3 「山戸層期」は神並上層式と黄島式の間の仮称として便宜的に用いている。資料の詳細が明らかになった後、細分等再度検討されるべきものである点を強調しておきたい。
- 註4 松本安紀彦氏のご教示による。
- 註5 丸尾遺跡の資料に関しては弥生時代の遺跡として都祁村史(都祁村史編委2005)に紹介されているが、川村和正氏のご教示により押印文土器と判断した(川村2000)。
- 註6 桐山和田遺跡の資料に関して守屋氏は2群I類とし(守屋2002)、鴻ノ木遺跡の資料に関して山田氏は鴻ノ木IV式として神宮寺式と「神並上層式」の間に位置づけている(山田1998)。
- 註7 また、山田氏は鴻ノ木IV式に後続するものとして「高皿式」を位置づけたが、端部を刻み、また帯状施文を行う特

徴は近畿地方では「神並上層式」より新しい要素として捉えることも可能である(熊谷2006、矢野2007)。

註8 矢野健一氏のご教示による。

註9 筆者は発見していないため、その内容については岡崎氏の記述による(岡崎1996)。ただし、図示されているものを見る限りは、一部黄島式を含むものと思われる。

註10 ただし、「山戸層期」・黄島式・高山寺式はI級部(刻み・楕円状・斜行沈線)をメルクマルとしても、胴部片でこれらを判別することは困難であり、横田文のサイズも決め手にならない例が多々ある。現状では胎土の繊維量と厚層がある程度の目安になるが、袖ノ川キトラ遺跡のような例外もあり、小片が甲体で出土した場合は判断できないこともある点は否めない。

註11 一乗寺南下層出土器には隆帯の太いものと細いものがある。これらが時間差を示すものか、多様性を示すものかは検討を要するが、隆帯上部を横位に強くナデを行うことによって隆帯を貼付ける方法は共通する。そのためここでは両者の差異は多様性と判断し、太い隆帯は中国地方との関わりが強いのではないかと考えた。また、一乗寺南下層出土土器には細い隆帯があり、横澤氏がII群A2類としたものが本稿III群B4類に類似する。仮に、横澤氏のII群A2類と本稿III群B1類が併存とした場合、連続刺突が具殻版縁に置換され、隆帯上の刻みと内面の条痕を省略すれば本稿III群B4類になると考えた。このような想定が可能かどうかは今後の資料増加と、検討により明らかにされるべきことであるが、筆者の仮説として提示しておき、大方のご批判を仰ぎたい。

挿図・挿表出典

図196: 熊谷作図

図197: 熊谷作図、1・5・6・15・16・19 ~ 22・33・36 ~ 38・41、奈良市教育委員会2006より転載

図198: 熊谷作図、3・4 都祁村史編委2005、5 畠田・矢野1987、6・7 松田1989、8 橋本・南部2003、9 川村2000、10 松田1987、11 田部2006 より転載

図199: 3・4 千葉・阪口2005、5 河田他2006、6・7 酒井他2006、8 ~ 10 中越1995、11 ~ 13 松本2005b、14・15 杉本2002、16 松田2002、17 山田1998 より転載、18 熊谷実測 若狹歴史民俗資料館所蔵

図200: 熊谷作図、3・22 ~ 25 奈良市教育委員会2006、4 ~ 11 坂野2005、5 大山・真鍋1988、7 横澤2006、12・13 内田1987、26 ~ 30 泉1984 より転載

表41 ~ 43: 熊谷作表

参考・引用文献

- あ行
- 会田 進他 1988 「向陽台遺跡」『一般国道20号(塩尻バイパス)改築工事埋蔵文化財発見地発掘調査報告書』塩尻市教育委員会
- 朝倉 弘 1993 『奈良歴史』第11巻 大和武士
- 青木春洋江・石井香代子 2001 「高滝遺跡第58次・第59次」『奈良遺跡調査概報 2000年度』奈良県立橿原考古学研究所
- 赤塚 亨 2003 「押型紋と無紋土器の関係について(下巻)」『利根川』24・25、利根川同人
- 芦屋市教育委員会・関西大学考古学研究室 1983 『山内遺跡S4 地現地説明会資料』
- 網下善教・小泉俊夫 1972 『富爾村の黎明』『富爾村史』
- 網 伸也 1994 「30、北白川庵寺2」『京都市埋蔵文化財研究所 泉 拓良 1981 「近畿地方の上器」『縄文文化の研究 4 縄文土器Ⅱ』 雄山閣
- 泉 拓良 1981 「第4章 第2節 遺物」『栗津貝塚湖底遺跡』滋賀県教育委員会(財)滋賀県文化財保護協会
- 泉 拓良 1985 「近畿地方の事例研究」『講座考古地理学 第4巻 村落と開拓』学生社
- 泉 拓良 1996 「近畿地方の縄文土器」『日本土器事典』雄山閣
- 泉 武 1984 「前栽遺跡—縄文時代晩期遺跡の調査—」『大和市文化財調査報告1』
- 磯部幸男 1984 「集居遺跡出土の縄文土器」『知多古文化研究』1、知多古文化研究会
- 磯部幸男・杉崎章・久永春男 1965 「愛知県知多半島南端における縄文早期末〜前期初頭の遺跡群」『古代学研究』41、古代学研究会
- 伊庭 功 2000 「第4章予備調査の結果」『粟津湖底遺跡IV』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 楢松安益 1997 「セニヤクボ遺跡第8次調査」『奈良県内市町村埋蔵文化財調査報告会資料』
- 氏平昭則 2005 「第4章 第E遺跡」『杉正宗遺跡・第E遺跡・かなばれB遺跡・丸ヶ丸遺跡・勝の段遺跡・ド黒木遺跡・久山神社古墳・城崎城跡北散布地』岡山県古代古蹟文化財センター
- 内田律雄 1987 『四川津遺跡発掘調査報告書』Ⅲ、鳥根県教育委員会
- 近江俊秀 1991 「大和型瓦器輪の幅年と実年代の再検討」『古代文化』第43巻第10号
- 太田三喜・池田保徳ほか 1989 「奈良県天理市布留遺跡 三島(木寺)地区・豊田(三反田)地区発掘調査報告書」『考古学調査研究中間報告』16
- 太田陽子・成瀬敏郎他編 2004 『日本の地形6 近畿・中国・四国』東京大学出版会
- 大野 薫 2001 「近畿・中国・四国地方における集落変遷の調査と研究の現状」『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会
- 大山寛亮・真鍋昌宏他 1988 「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書V 大浦浜遺跡」香川県教育委員会・本州四国連絡橋公団
- 岡崎正雄 1996 「榎木式土器」『日本土器事典』雄山閣
- 岡田憲一 2002 「縄文時代前期以前の上器—西日本・近畿地方意見—」『第4回関西縄文文化研究会 縄文時代の石器—関西の縄文草創期・早期—』関西縄文文化研究会
- 岡田憲一 2006 「第7章 調査成果とまとめ 第1節 縄文時代」『和ナカドフリ遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 岡田憲一・田部剛上 2006 「第6章 まとめ」『輪山遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第96冊、奈良県立橿原考古学研究所
- 岡田憲一・田部剛上・上崎高史 2006 『輪山遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第96冊、奈良県立橿原考古学研究所
- 横田雅昭・矢野健一 1988 「奈良県大和市布留遺跡縄文時代早期の調査」『考古学調査研究中間報告』14 埋蔵文化財調査報告会
- 地崎正紀・森川 勉他 2000 『奈良地域の地質』地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)一 地質調査所
- 遠部 慎 2003 「筑島貝塚再考」『立命館大学考古学論集Ⅱ』立命館大学考古学論集刊行会
- か行
- 片岡 肇 1988 「異形押型土器について」『朱雀』第1集
- 鎌木義昌・高橋 護 1965 「9 瀬戸内」『日本の考古学』Ⅱ 河出書房
- 河瀬正利・藤野次史 1995 「Ⅲ. 瀬の黒南遺跡の調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅷ、広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会
- 河田清男・宮村 学他 1985 「20万分の1地質図「京都及び大阪」地質調査所
- 川村和正 2000 「大和高原西部の縄文資料について」『かこうけん友史』第5号、奈良県立橿原考古学研究所友史会
- 木村健明 2006 『横田矢野野遺跡』奈良県文化財調査報告書第116集、奈良県立橿原考古学研究所
- 京都市埋蔵文化財研究所 1991 『北白川庵寺発掘調査現地説明会資料』京都市埋蔵文化財研究所
- 久野邦雄・小泉俊夫 1973 「室生ダム水没地埋蔵文化財調査概報」奈良県教育委員会
- 熊谷博志 2006 「筑紫枝田遺跡の編年の位附付け—筑古式の成立過程について—」『第17回中国縄文研究会発表要旨集 早期研究の現状と課題- 前巻を中心に』
- 栗本史雄・牧田 博他 1998 「20万分の1地質図「和歌山」地質調査所
- 紅村 宏 1963 『東海の大先遺跡-総括編』名古屋鉄道株式会社
- 小泉俊夫・辻利和・山下隆次 1980 「押型土器を出した香芝町下田遺跡(一)」『青陵』46
- 小島俊次 1958 「奈良県天理市上入遺跡」『古代学研究』18
- 小島俊次 1962 「東ノ川のあけぼの」『東ノ川 上北山村文化そら書』1

さ行

- 西藤清秀 1983『高塚遺跡』『奈良県遺跡調査概報1982年度』奈良県立歴史考古学研究所
- 境 安 2002Ⅲ 第3章 調査の成果 第2節 遺物『川上ダム建設事業地内所蔵文化財発掘調査概報Ⅱ 川上中興手遺跡(A・B・C地区)』青山町教育委員会
- 酒井雅代・木田 真・酒田竜彦 2006『智頭枕田遺跡Ⅰ』智頭町教育委員会
- 坂野健哉 2005『楠瀬間貝塚』知多市文化財資料集第38巻、知多市教育委員会
- 佐々木好直 2001『久田原遺跡・鉢ヶ坪遺跡 試掘調査報告』『奈良県遺跡調査概報2000年度』奈良県立歴史考古学研究所
- 清水真 1997『第3節 初瀬遺跡第3次発掘調査報告』『桜井市埋蔵文化財1996年度 発掘調査報告書』1、(財)桜井市文化財協会
- 清水昭博・棚山佳幸 1994『輪倉遺跡第2・3次発掘調査概報』『奈良県遺跡調査概報1993年度』奈良県立歴史考古学研究所
- 下村晴文・菅原幸太 1987『神並遺跡Ⅱ』東大阪市教育委員会
- 木末雅夫・角田文朗・藤原光輝 1952『奈良県総合文化調査報告部野地区』
- 菅原正明 1983『畿内における七釜の製作と流通』『文化財論叢 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』
- 菅沼孝之他 1985 5万分の1現存植生図『板井』環境庁
- 菅沼孝之編 1985『奈良市現存植生調査報告』奈良市教育委員会
- 杉本厚典 2002『長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅴ』(財)大阪市文化財協会

た行

- 高松龍輝・矢野健一 1997『縄文集落の定住性と定着性—兵庫県淡路郡八木川上・中流城における事例研究—』『考古学研究』第44巻3号
- 高橋美久二 2006『近江の糸里—呼称法の復原と基準線—』『近江の考古と地理』滋賀県立大学人間文化学部考古学研究室
- 田嶋英雄・菅沼孝之他 1985 5万分の1現存植生図『奈良』環境庁
- 田部剛士 2006『越町遺跡・小切山遺跡』山添村教育委員会
- 田部剛士・井上右貴・原田博志・井ノ竜太 2005『大塚塚ノ木遺跡発掘調査概要報告』山添村教育委員会
- 千葉 豊・阪口英毅 2005『第2章 京都大学古田南構内AN22区の発掘調査』『京都大学構内遺跡調査研究年報2000年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 都祁村史編纂委員会 2005『改訂 都祁村史』上巻、都祁村史編纂委員会
- 坪井清足 1956『二、遺物』『石山貝塚』平安学同考古学クラブ
- 戸沢久則編 1994『縄文時代研究事典』東京堂出版
- 島羽正剛2007『瓦器小輪にみる特異な使用痕に関する考察—真言密教の仏前作法からの検討—』『金剛峯寺遺跡 K B T05-21』高野町文化財調査報告書第2巻 高野町教育委員会、(財)元興寺文化財研究所
- 鳥辺貞彦研究グループ 1985『鳥辺貝塚1984年度調査概報・研究の成果—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査5—』福井県教育委員会、福井県若狭歴史民俗資料館

な行

- 中井一夫 1983『白毫寺』『奈良県遺跡調査概報1982年度』奈良県立歴史考古学研究所
- 中越功夫 1995『帝釈弘法流洞窟遺跡(第2～9次)の調査』『広島大学文学部常磐峯遺跡群発掘調査年報X』広島大学文学部帝釈峯遺跡群発掘調査室
- 中野和正・松田真一 1985『曾爾村弁天遺跡採集の縄文時代遺物』『青陵』56
- 中野和正・松田真一 1987『曾爾村大口遺跡出土の縄文時代遺物』『青陵』61
- 水野康洋・遠部恒・志賀智史 1999『別府市における縄文時代早期の稲—北筑輪遺跡試掘調査概要を中心に—』『おおいた考古』第12巻
- 長野県考古学会 1995『長野県考古学会誌 シンポジウム特集号 表裏縄文から立野式へ』77・78号
- 中村健二 1992『7、縄文式土器および石器について』『唐橋遺跡』滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会
- 奈良市教育委員会 2006『興宮園地整備事業田原東地区における埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅰ—柚ノ川イモタ・キトラ遺跡・水間遺跡—』奈良市教育委員会
- 西岡芳晴・尾崎正紀他 2001『板井地域の地質—一地質地質研究報告(5万分の1地質図版)— 地質調査所』

は行

- 橋本清一 2005『第1章 風土と環境 第1節 自然環境』『南山城村史 本文編』南山城村
- 橋本裕行・南部裕樹 2003『宮の平遺跡Ⅱ』奈良県立歴史考古学研究所調査報告第86冊、奈良県立歴史考古学研究所
- 樋口浩之 1936『廣敷島貝塚の研究』『史前学雑誌』第8巻1号
- 兵頭 熾 2006『北四国地域における早期土器研究の現状と課題』『第17回中国縄文研究会発表要旨集 早期研究の現状と課題—前業を中心に—』
- 平岩欣太 1995『上津ダム水没地内遺跡群 上津堂前瓦遺跡』『奈良県遺跡調査概報1994年度』奈良県立歴史考古学研究所

ま行

- 前澤郁浩 2001『池田遺跡』大和高田市教育委員会
- 増了康廣 2006『楠瀬間式から塩屋式土器へ』『伊勢湾考古』20、知多古文化研究会
- 松澤 修 1992Ⅲ、調査の成果 3、縄文時代早期の遺構及び包含層『津澤湖底遺跡』滋賀県教育委員会、(財)滋賀県文化財保護協会
- 松田真一 1982『広瀬遺跡発掘調査概報』『奈良県遺跡調査概報1981年度』奈良県立歴史考古学研究所
- 松田真一 1985『久保川原遺跡発掘調査報告書』『奈良県遺跡発掘調査概報1984年度』奈良県立歴史考古学研究所
- 松田真一 1986『奈良県御杖村土平遺跡出土の縄文時代遺物』『古代文化』第38巻10号
- 松田真一 1987『奈良県御杖村長尾遺跡出土の縄文時代遺物』『古代文化』第39巻6号
- 松田真一 1989『大川遺跡—縄文時代早期遺跡の発掘調査報告書』山添村教育委員会

松田真一 1997『奈良県の縄文時代遺跡研究』奈良大和古代文化研究協会
 松田真一 2002『橿山和田遺跡』奈良県文化財調査報告書第91集、奈良県立橿原考古学研究所
 松田真一・近江俊秀 1991『布目川流域の遺跡6』『奈良県遺跡調査概報1990年度』奈良県立橿原考古学研究所
 松本安紀彦 2005a『南四国の縄文土器考(1)―物部川流域における押型文土器出現期について―』『九州縄文時代早期研究ノート』第3号、九州縄文時代早期研究会
 松本安紀彦 2005b『刈谷我野遺跡Ⅰ―個人住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』高知県香北町教育委員会
 光石唯巳 2001『遊瀬前田遺跡 第2次発掘調査概報』『奈良県遺跡調査概報 2000年度』奈良県立橿原考古学研究所
 三森定男 1937『讃岐小島島遺跡の研究―押型文土器に對する考察―』『考古学論叢』第4輯、考古学研究会
 村田修一 1994『第6章第4節 中世の城郭』『奈良市史 通史2』奈良市
 森浩一・松藤和人 1999『加茂谷川岩陰遺跡群』同志社大学文学部考古学研究室
 守屋豊人 2002『近畿地方押型文土器前半期における横位密接接文の展開と地域差―橿山和田遺跡第2層土器の編年の位置づけ』『橿山和田遺跡』奈良県立橿原考古学研究所

や行

安永周平 2005『大釣山遺跡、誓多林庵寺』『奈良遺跡調査概報2004年』奈良県立橿原考古学研究所
 柳澤一宏 2001a『橿原町文化財調査概要』24、橿原町教育委員会
 柳澤一宏 2001b『IV 下城・馬場遺跡第6次発掘調査概要』『橿原町内遺跡発掘調査概要報告書 1999年度』橿原町教育委員会
 柳澤一宏 2002『III 下城・馬場遺跡第7次発掘調査概要』『橿原町内遺跡発掘調査概要報告書 2000年度』橿原町教育委員会
 柳澤一宏・横澤慈・朴天子 2004『東吉野村木津名施遺跡の出土遺物』『青陵』111
 矢野健一 1993『押型文土器の起源と変遷―いわゆるネガティブな横切文を有する押型文土器群の再検討―』『考古学雑誌』78-4
 矢野健一 1997『中四国地方における押型文土器後半期の様相』『シンポジウム押型文と沈黙文』木編、長野県考古学縄文時代(早期)部会
 矢野健一 2002『中四国地方における縄文時代早期末前期初頭の土器編年』『環瀬』(内海の考古学―平井勲氏追悼論文集―)上巻、古代古備編研究会
 矢野健一 2003『北部九州における押型文土器出現の時期―広島県東部秩原法滝洞窟遺跡出土土器の検討から』『立命文学』第578号、立命館大学文学部
 矢野健一 2005a『土器型式圖の広域化』『西日本縄文文化の特徴』関西縄文文化研究会・中四国縄文研究会・九州縄文研究会
 矢野健一 2005b『定住の指標』『関西縄文時代における土器・集落の諸様相』関西縄文論文集2』六、豊房
 矢野健一 2007『押型文土器出現以前の九州地方と水州地方との

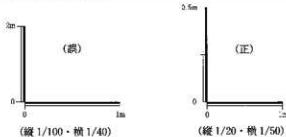
地域間関係』第17回九州縄文研究会 福岡大会 九州における縄文時代早期前葉の上層部 発表要旨・資料集』九州縄文研究会
 矢野慎道・波田善丈他 1983『日本の縄文図鑑(Ⅲ) 人里・草原』保育社
 山下勝年 2006『塚原式土器の細分』『古代人』66、名古屋考古学会
 山下勝年 2005『第7章 総括』『橿原問貝塚』知多市文化財資料集第38集、知多市教育委員会
 山田 猛 1998『縄文土器』『河の本道跡 下層編』三重県埋蔵文化財センター
 湯元 整 2000『大柳土造跡群 第10次 発掘調査概報』『奈良県遺跡調査概報1999年度』奈良県立橿原考古学研究所
 横澤 慈 2006『近畿地方縄文時代早期末～前期初期の土器編年』『往還する考古学 近江川探研究会論集』3、近江川探研究会
 米川仁一 2003『上津大井刈遺跡』奈良県文化財調査報告書第104集、奈良県立橿原考古学研究所

わ行

渡辺忍夫 1966『増訂 畿内庄園の基礎構造(上)』吉川弘文館
 和田秀寿 1988『縄文早期高山寺式土器の成立過程と編分編年』『古代学研究』117、古代学研究会

『県営園場整備事業田原東地区における埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅰ』 正誤表

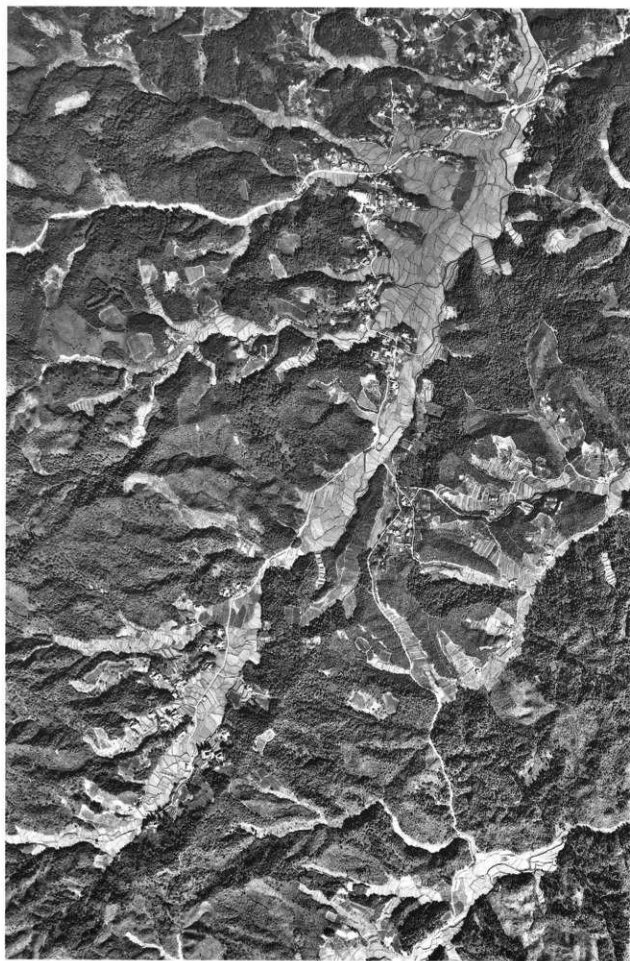
頁	行・箇所	誤	正
20	図27		
21	図28		
26	図34	※下図参照	※下図参照
146	図120		
147	図121		
113	左段 25 行目 左段 26 行目 左段 40 行目 右段 11 行目	図 105	図 104
148	右段 22 行目	14発掘区内	K発掘区内
184	右段 6 行目		(占塚境研究所)



写真図版



別所大谷口遺跡調査参加者一同



田原東地区の空中写真 (国土地理院 1963 年撮影 KK63-7X C3-8、上が北)



調査前の別所下ノ前遺跡現況（北東から）



調査前の別所下ノ前遺跡西方微高地E現況（南西から）



調査前の別所辻堂遺跡現況（南東から）



調査前の別所辻堂遺跡現況（東から）



第1発掘区全景（南から）



第1発掘区縄文時代遺物包含層（南から）



第1発掘区縄文時代遺物包含層断面（東から）



第1発掘区黄島式土器出土状態（北西から）



第2発掘区全景（東から）



第3発掘区全景（北から）



第4発掘区全景（北から）



第5発掘区全景（南東から）



第6発掘区全景（北東から）



第7発掘区全景（南から）



第8発掘区全景（北から）



第9発掘区全景（西から）



第10発掘区全景（東から）



第10発掘区炭窯検出状態（南東から）



第11発掘区全景（西から）



第12発掘区全景（南西から）



第13発掘区全景（東から）



第14発掘区全景（東から）



第14発掘区流路（北東から）



第14発掘区石組井戸（南から）



第14発掘区土坑（南から）



第15発掘区全景（南西から）



第16発掘区全景（北東から）



第17発掘区全景（南から）



第18発掘区 (南から)



第19発掘区 (北から)



第20発掘区 (東から)



第20発掘区溝縄文土器出土状態 (南から)



第21発掘区 (北東から)



第22発掘区 (北から)



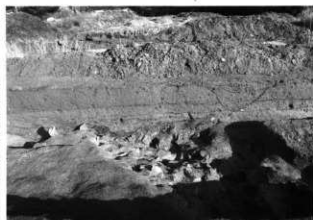
第23発掘区 (北東から)



第24発掘区 (西から)



第25発掘区全景（北西から）



第25発掘区古墳時代溝（西から）



第26発掘区全景（南西から）



第27発掘区全景（南西から）



第28発掘区全景（北西から）



第29発掘区全景（南西から）



第29発掘区全景（北から）



第30発掘区全景（東から）



別所下ノ前遺跡A・B発掘区全景航空写真（東から）



別所下ノ前遺跡C・D発掘区全景航空写真（東から）



A発掘区全景（南東から）



A発掘区垂直写真



B発掘区全景（北東から）



B発掘区垂直写真



C発掘区全景（北東から）



C発掘区垂直写真



SD01・02 (東から)



SD02堆積土層 (東から)



SK01 (南西から)



SK01堆積土層 (南西から)



D発掘区上層遺構面全景（北西から）



D発掘区上層遺構面全景（北東から）